# 漫画讀物

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和三年二月二十八日印刷
昭和三年三月一日發行

# 小道具・小裂
# 貸衣裳

其他一般の衣裳を多少に拘ず御利用下さい
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます

素人演藝會
宴會の催物
春秋温會習
婚禮の衣裳

## 松竹衣裳部

本店　大阪市南區久左衛門町八番地
電話南　四七一一　一八八番

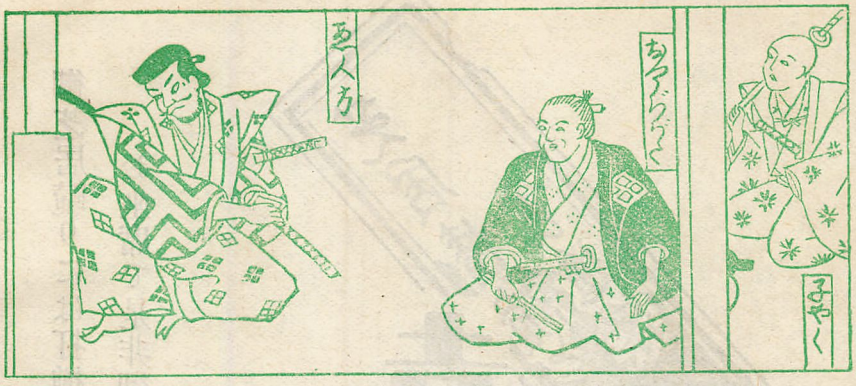
東京支店　東京市淺草區並木町五十五番地
電話淺草　五五九九番

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を

# 喜久屋食堂

道頓堀戒ばし北詰

支店
大阪支店　北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋



# 道頓堀（彌生號）

第三年・第十八輯


表紙（戀飛脚大和往來）

口繪寫眞

◇「戀飛脚大和往來」鴈治郎の龜屋忠兵衞◇「勸進帳」幸四郎の辨慶◇「勸進帳」鴈治郎の富樫左衞門・福助の源判官義經◇釣女「宗十郎の太郎冠者・長三郎の醜女◇「戀飛脚大和往來」福助の井筒屋おゑん・魁車の槌屋梅川◇「乘合船惠方萬歲」宗十郎の才藏龜藏・魁車の白酒賣榮吉◇中座如月興行グラフ◇各座如月興行グラフ

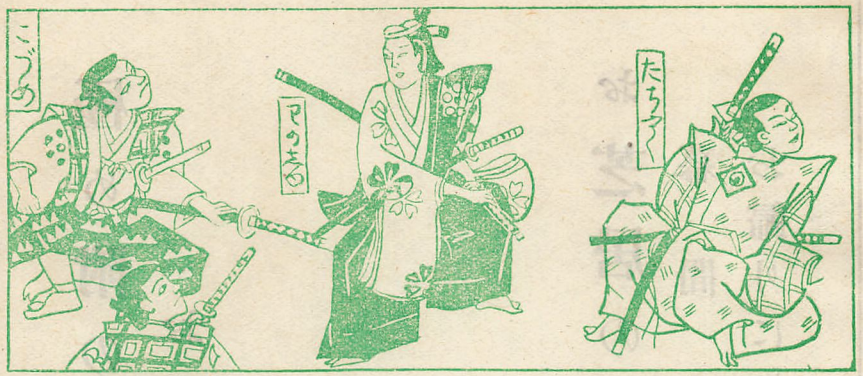
扉（けいせい双鏡山）

中座

□加賀見山舊錦繪（芝居物語）……夜雨庵主人（二）
□戀飛脚大和往來（芝居物語）……平一平（八）
□歌舞伎十八番勸進帳（鸚鵡石）……（一四）
□淨瑠璃釣女（歌詞）……（一六）
□乘合船惠方萬歲（歌詞）……（一八）

狂言の解說と考證

□私の役々に就いて……澤村宗十郎（二〇）
□宗十郎のお初……大村嘉代子（二二）
□幸四郎の「勸進帳」……三宅周太郎（二三）
□そこばく勸進帳……竹內勝太郎（二五）
□勸進帳の辨慶に就いて……松本幸四郎（二七）
□「封印切り」問答……高原慶三（二九）
□鴈の「梅忠」考……鐘芳堂主人（三二）
□世阿彌の云ふ批評と鴈治郎の梅忠……高安吸江（三三）
□「暫」から「勸進帳」へ……入江來希（三六）
□洛北の秋について……編輯部（六六）
□中座彌生興行……（四六）
□浪花座彌生興行……（五七）
□角座總配役……（五九）
□「櫻時雨」と吉野太夫（京都南座）……堂本寒星（六一）




□狂言の解説……編輯部
□洛北の秋（鵬鶴石）……（七〇）
□御存知東男（芝居物語）……永松愿（七二）
□愛憎亂麻（上演脚本）……下村悅夫原作 鳥江鐵也脚色（七四）

浪花座

◇「實盛」と「暫」の印象◇
□「實盛」斷想……西田眞三郎（四〇）
□「私は暫く考へる」……前田榮三（四二）
□サフィアいろの「暫」……正岡蓉（四三）

◇次の時代の會・芝居と劇評◇
□謂ゆる「次の時代」の集りに就て……大西利夫（四四）
□盲目の垣のぞき……坪内士行（四八）
□劇評家の立場……中井浩水（五二）
□私の見た劇評……片岡我童（五五）
□私の觀劇の態度……京極利行（五七）

□芝居俳句……澱江翁以老（六五）
□道頓堀見物……山口小豐山（三九）
□鼈の研究……瀨川春江（四八）
□菊吾の鏡獅子……S・日生（四七）
□八十助丈歡迎句會……（五四）

◎幕内閑話……大川澱江 日比繁二共編（六七）

□讀者文藝（俳句・煤萠選）（短歌・山上貞一選）……（六一）
□讀者倶樂部（選編輯部選）……（六三）
□讀者文藝應募規定……（六〇）
□讀者倶樂部應募規定……（六〇）
□編輯後記……朝郎生
□カット・挿畫……大塚克三

極め附の
お献立！

お芝居の
幕間と
お歸りには

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを

梅園

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

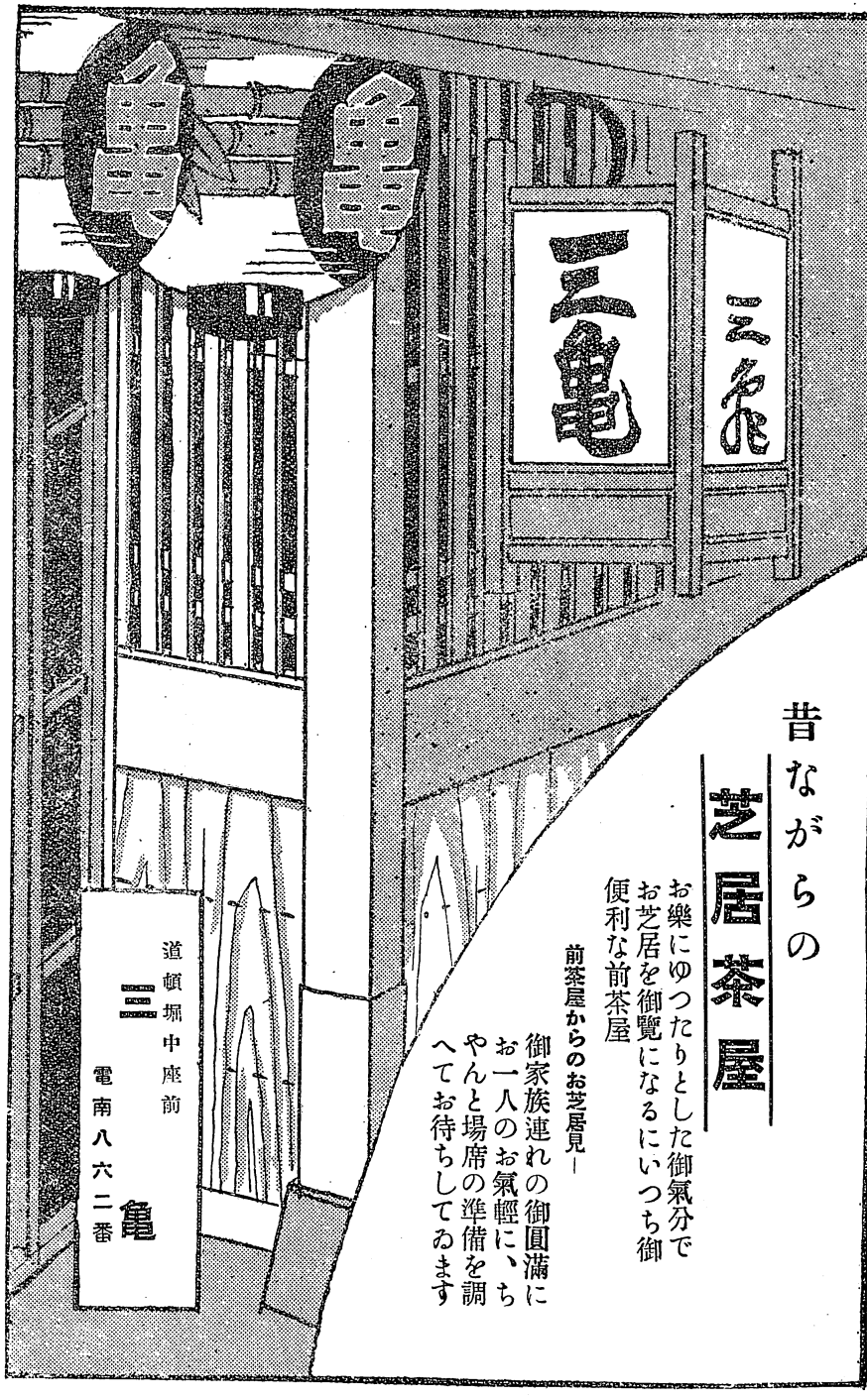
皆さん！
マルキン醤油の
御馳走を召せ
さぬき小豆島　丸金醤油株式會社

會旗優勝旗
劇場幕幟
緞帳フラフ

神戸市楠社西門
梅原商店
電話元町一六一五番

優秀の技術と迅速が當館の有つ
唯一の誇りです。
御散索の折にぜひ御立寄りを……

高津郵便局東
山崎寫眞館
電話南四二四四番


三亀
亀
亀
昔ながらの
芝居茶屋
お樂にゆつたりとした御氣分で
お芝居を御覽になるにいつち御
便利な前茶屋
前茶屋からのお芝居見—
御家族連れの御圓滿に
お一人のお氣輕に、ち
やんと場席の準備を調
へてお待ちしてゐます
道頓堀中座前
三亀
電南八六二番

# スキナ脂取紙（あぶら）

スいなお方の懷中にはいつも
キのきいた化粧紙がひそんで居る
ナんで手ばなしが出來ましょ……。

妾しの
**スキナあぶら取紙**
じやもの……

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり
お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ

現品縮圖
スキナあぶら取紙

本舗
スキナ屋號
中田商店
大阪

# 豫約募集

# 日本戲曲全集

東京市京橋區南傳馬町二ノ六
發行所 春陽堂
振替東京一六一七五二
電話京橋(四四一五)

## 第一部歌舞伎篇（三拾二册）

一、古代歌舞伎集

二、中古江戸歌舞伎集（伊原青々園編）

雷神不動北山櫻。玉櫛粧曾我。助六曲輪名取草。高尾宮本地開帳。高尾大明神楓饒。千代始音頭瀾渡。傾城片岡山。けいせい優曾我。

三、京坂歌舞伎集（守隨憲治編）

伊勢海道錢懸松。鬘髮歌仙櫻。大當百足山。戀。幼稚子敵討。傾城咬嚼吧文章。秋葉權現廻船話。

四、並木正三集

宿無團七時雨傘。せいせい天羽衣。近江源氏艪講釋。霧太郎天狗酒宴。三十石登始。和布刈神事。

五、並木五瓶時代狂言集

けいせい黃金鱗。けいせい飛馬始。入間詞大名賢儀。けいせい忍術池。袖簿播州廻。けいせい倭莊子。

六、並木五瓶世話狂言集

五大力戀滅。富岡戀山開。青櫻詞合鏡。隅田春妓容性。月武藏野秋狂言。四紅葉思戀操川。江戸紫由緣十德。

七、寛政期京坂時代狂言集

金門五山桐。艶競石川染。けいせい青陽鶯。天滿宮菜種御供。競伊勢物語。

八、寛政期京坂仇討狂言集

伊賀越乘掛合羽。姉妹達大磯。敵討安樂錄。淺草靈驗記。敵討千手助太刀。大願成就殿下茶屋聚。

九、寛政期京坂世話狂言集

戀飛脚大和往來。伊勢音頭戀寐刃競もとの紅翹。銘作切籠曙。隅田川續俤。百千鳥鳴戸白浪。思花衒容性。

一〇、初代櫻田治助集

國色和曾我。けいせい吾妻鑑。大商蛭子島。瀾川の仇浪。けいせい鏡臺山。春錦伊達染曾我。女達高麗屋經衞。赤松玉蟾見島臺。

一一、鶴屋南北怪談狂言集

東海道四谷怪談。彩入御伽草。阿國御前化粧鏡。法懸松成田利劍。獨道中五十三驛。

一二、鶴屋南北世話狂言集

心謎解色絲。春錦伊達染曾我。女達高麗屋經衞。當穗八幡祭。於染久松色賣販。勝相撲浮名花觸。浮世相比翼稻妻。盟三五大切。

一三、顏見世狂言集

御攝勸進帳。花三升吉野深雪。八百八町飄篇笄。

壯平家物語。戾橋脊御攝。雪月花黑主。蝶花形戀聟源氏。

一四、曾我狂言集

戀便假名書曾我。稻光田毎月。比翼蝶春曾我菊。御國入曾我中村。初冠曾我皐月富士根。全盛虎女石。

一五、赤穗義士劇集

假名手本忠臣藏。太平記忠臣講釋。忠臣いろは四十七調。忠臣蓮理の鉢植。いろは假名隨筆。菊宴月白浪。忠臣藏後日建前。假名書忠臣講釋。

一六、伊達騷動狂言集

伽羅先代萩。伊達競阿國戲場。歸曲輪花伊達染。萬歲阿國歌舞伎。けいせい睦玉川。

一七、寛政期江戸世話狂言集

袷小袖血汐染色。幡隨長兵衞。大三浦達喬。關取萬蒲綿。其往昔戀江戸染。堂島田實込。男達五雁金。河原噂京詮。

一八、化政度江戸世話狂言集

垣衣草手向發心。短衣仇散書。文月恨鮫鞘。褄重曆菊月。臺頭霞彩幕。東都名物錦繪始。男作女吉原。

一九、化政京坂仇討狂言集

繪本天下茶屋聚。敵討義戀柵。敵討黃鳥塚。敵討高砂松。敵討捕朝霧。

二〇、化政度江戸仇討狂言集

敵討覘雁的。敵討相合袴。繪本合法衢。靈驗龜山鉾。

二一、滑稽狂言集

油賣り與兵衛。ちよいのせ善六。
廬生の夢。彌次喜多。とん〳〵の三吉。乳もらひ。堤畑の十作。かりのたより〳〵。轆轤首のおきん。おもと新助。三世相。
二二、三世櫻田治助集
名譽仁政錄。青砥稿。隅田川對高賀紋。名高手毬諷實錄。福壽開駒量傳記。月梅惠景清。明烏花濡衣。新板越白浪。
二三、幕末期世話狂言集
與話情浮名横櫛。東山櫻莊子。妹脊鶏。近頃河原の達引。綬三升曾我初夢。散書戀文章。袖浦故郷錦。世情相宿噺。
二四、お家狂言集
花菖蒲佐野入橋。梅柳若葉加賀染。濃紅葉小倉色紙。花嵯峨猫魔稗史。けいせい廓源氏。
二五、小說脚色狂言集
花魁菩入總。復讐高音跳。柵自來也談。信州於六櫛。花御摹大和文庫。花楓秋葉話。
二六、勝諺藏集
新暦開化當的矢。春駒小栗美勇傳。松前庭月影模樣。玉櫛笥箱崎文庫。東海道小夜中山。近世櫻田雪紀聞。名高田越後祕錄。花茨胡蝶廼彩色。御誂染梅加賀紋。朝顏處女菩紅筆。
二七、舞踊劇集
舌出し三番。うつぼ猿。六歌仙。松江七變化。奴道成寺。操三番百眼。鳴神鐘入櫻。角力おし鳥。身替りお俊。關の扉。吉田屋。戻り駕。雪のお鶴。船饅頭。葛の葉。蜘蛛の絲。女夫松。色の塞。茶筌賣。お染久松。山鳥。小倉山。榮華の夢。落人。若松。左甚五郎。女清玄。望月。日本振袖始。桂建曾我。女鉢木。今樣高野物語。
二八、義太夫狂言時代物集
菅原傳授手習鑑。義經千本櫻。妹脊山婦女庭訓。本朝二十四孝。一谷嫩軍記。近江源氏先陣館。木下蔭狹間合戰。
二九、義太夫狂言世話物集
夏祭浪花鑑。双蝶同曲輪日記。關取二代勝負附。伊賀越道中双六。
往古曾根崎村曾。心中紙屋治兵衛。極彩色娘扇。傾城反魂香。
三〇、默阿彌集（上）
三一、同（下）
三二、三世新七及其水集

## 第二部現代篇（第拾八册）

三三、坪内逍遙。
三四、依田學海。福地櫻痴。宮崎三昧。複本寅彦。右田寅彦。岡村柿紅。
三五、岡本綺堂。
三六、岡鬼太郎。高安月郊。山崎紫紅。伊原青々園。長谷川時雨。岡田八千代。野上彌生。大村嘉代子。木村富子。
三七、池田大伍。小寺融吉。清見陸郎。林和。頴田六福。佐藤紅綠。川村花菱。瀨戸英一。大森痴雪。木村錦花。
三九、新派劇臺本集。
四〇、森鷗外。永井荷風。小山内薰。
四一、長田秀雄。木下杢太郎。吉井勇。郡虎彦。灰野庄平。
四二、谷崎潤一郎。久保田万太郎。里見弴。泉鏡花。
四三、中村吉藏。島村抱月。秋田雨雀。島村民藏。藤井坪内士行。
四四、有島武郎。長與善郎。倉田百三。吉田絃二郎。室生犀星。
四五、武者小路實篤。正宗白鳥。
四六、菊池寛。山本有三。
四七、久米正雄。横光利一。犬養健。邦枝完二。北尾龜男。鈴木泉三郎。
四八、岸田國士。佐藤春夫。岡榮一郎。田島淳。水木京太。關口次郎。
四九、藤森成吉。長谷川如是閑。金子洋文。村山知義。前田河廣一郎。
五〇、北村小松。高田保。池谷信三郎。鈴木彦次郎。田中總一郎。北村壽夫。北村喜八。其他。

◎不滅の大衆文藝　三百年に亘つて億兆の見物を向うに廻して喜怒哀樂灼熱的喝采を博したるもの、明日の日古くなる本と違ひます。

◎芝居繪の大繪卷　挿繪總計一千枚以上口繪百枚の異彩錦繪から今日の新劇の舞臺迄本全集の最も誇とする所です。

◎内容見本進呈

### 略規

◎種類
全五十卷
第一部　歌舞伎篇　三十二卷
第二部　現代篇　十八卷

◎裝幀
體裁　八畫伯裝幀
木村莊八
總布四六大版函入
木版刷表裝上製本

全國各地書店にあり

◎會費（ます）
分拂一册　一圓
一時拂第一部　貳拾八圓
第二部　貳拾六圓貳拾錢
通し四拾五圓

◎申込金
各部　金一圓
通し　金二圓

これは最後の會費に充當します

# 松竹興行賣切手

## 御贈答品は折紙附の

この切手一枚で全國何處へ往つても
松竹經營の劇場のお芝居が見られます。

**お手頃の種類**

一圓・二圓・三圓・五圓・十圓・十五圓・廿圓・五十圓の八種

御觀劇代のほかに御召上り物、各賣店の御買上品
本家茶屋直營の案内所等一切御支拂に通用致します
様式は十圓券は一圓券十枚、一圓券は十二錢券五枚
にて離れるやうになつてゐますから至極御便利です

**お手近の發賣所**

大阪南區久左衛門町八
大阪道頓堀
松竹合名社
（電南一二四〇・六六八五）

大阪東區高麗橋心齋橋筋
角座
（電南六九五六〇）

京都市河原町蛸薬師上ル
プレイガイド
（電本三三〇九・三九九五）

松竹合名社
（電中二三五二）

其他各座にては三日前より場席の取れる
指定番號入前賣切符も發賣してゐます

「來往和大脚飛戀」座中　衞兵忠屋龜の郎治鴈

幸四郎の辨慶　中座　「勸進帳」

中座「勧進帳」

鷹治郎の富樫左衛門
福助の源判官義経

「女　釣」　座中　宗十郎の太郎冠者
長三郎の醜女

福助の井筒屋お園
魁車の梅屋槌川

中座「戀飛脚大和往來」

「歳萬方惠船合乗」座中　藏龜藏オの郎十宗
魁車の白酒賣榮吉

「山野吉花」と「島中川劔信」　座花浪

虎輝正彈尾長の童我

狐郎五又の治團右

## 中座如月興行グラフ

| | | | |
|---|---|---|---|
| 「瀧引布平源」 | 盛實當別藤齋の郎治鷹 | (右) | 上 |
| 「湖の戀」 | 稲小の助福、衞兵半の郎治鷹 | (中) | 上 |
| 「叟番三操」 | 叟番三の郎五津三 | (左) | 上 |
| 「　暫　」 | 衡武原清の若延 | (右) | 中 |
| 「　暫　」 | 政景郎五權倉鎌の郎四幸 | (左) | 中 |
| 「語物月雨」 | 木宮妻の雀扇、郎四勝の郎十宗 | (右) | 下 |
| 「　暫　」 | 鯰女の車魁 | (中) | 下 |
| 「寺成道女男」 | 子櫻子拍白の郎十宗 | (左) | 下 |

## 如月興行の各座グラフ

上（右）「櫻時雨」我童の紹由
上（左）「櫻時雨」長三郎の世之助

右（上から）「祭りの夜」長三郎の彌吉「勢獅子」長三郎の鳶頭鶴松、魁車鳶頭龜吉「大岡政談」（浪）壽三郎の丹下左膳「大岡政談」（角）中田の丹下左膳

左（上から）「戀女房染分手綱」福助の重の井義直の三吉「後の梅川」我童の梅川、壽三郎の八右衞門「道中双六乘掛合羽伊賀越」大廣間の舞台面

蒲田春季超特作品

モオパスサンの「女の一生」より飜案脚色せる大作品

脚色　小田喬
監督　池田義信
撮影　濱林義康

主演　栗島すみ子
助演　武田春郎
奈良眞養
新井淳
小林新一郎
三田英兒
飯田蝶子
八雲恵美子
鈴木歌子
岡林文子
白河奈々子

近日完成！
一齋封切！

第十八輯

月刊・演劇研究・雑誌

# 演藝畫報

第三年

芝居物語

中座彌生興行上演

# 加賀見山舊錦繪

夜雨庵主人

だんだら幕がばらりと切つて落されると朱塗廻廊の遠見で櫻の花盛りです。隅田川三圍の境内で花見の場である。局岩藤、中老尾上、天城軍次兵衛、奴江戸平、それに奥女中桐島、淺野皐月、七浦、柏木、早蕨と腰元左枝、伏家、關谷、梅ケ枝、山吹、桔梗、楓がずらりと並んだ處はさても見事な美しさだ。

『はつ、姫君樣へ申上げまする。空も長閑に春景色、見渡す土手の花ざかり、咲きも揃はず散りもせず』

と岩藤が言ふと、尾上は續いて、

『草木心なしとは申しながら、時を知つての花盛り』

『ちと御遊覽を……』『遊ばされませう』

と皆が聲を揃へて言ふ。乘物の中から、

『仇にのみうつろいぞ行くかけろうの夕、山櫻風にまかせて』

と大姫の優しい聲がする。といつた……まあ、春らしい實にのどかな歌舞伎劇の見本のやうな芝居は續けられます。腰元の敷いた毛氈の褥の上へ大姫が座る。花は散るとも根にかへる。歸らぬものは許嫁の義高樣、その菩提のために生物を放つべく

大姫は參詣したのです。奥女中や腰元達は頻りに四邊の春景色を口を揃へてほめちぎる。三吉野にも劣らぬと言ひ小町櫻や楊貴妃櫻、筆も及ばぬとまでは無事ですが、ふだん櫻もよい殿御、私共にはその花は、日毎々々に好もしくとは物騒です。軍次兵衞のとりなしで皆は夫々休息のため次に下る。大姫はねつから心が晴れそうにない。剃髪染衣の敎へが受けたいと言ふ。その敎へをうけた時は一生殿御は持たれないと岩藤が言ひ出る鼻を尾上が貞婦二夫にまへえずとは聖賢の道とへし折りますと、さあ岩藤はおさまりません。お指圖無用とのし出るので尾上は御免下されと引下る。大姫は短册に

黑髪の色は變らぬそき尼の誠の道に身はなびきつゝ

岩藤は自分の勸めを聞かぬ大姫へのあてこすりに硯を片づける腰元左枝につき當る。はつと硯を落すと二つに割れる。その硯こそ御母公よりお讓りのあつた大切な、松かげの硯です。左枝は岩藤の當つたことを言ほふとすると岩藤の瞳はぎろりと光る。硯を割つた言ひ譯あるか、サアそれは、さあ〳〵〳〵と軍次兵衞が大表へ引立てやうとするのを、尾上が止め立てる。

『硯を打割りしは左枝殿の誤りなれども、萬物の長たる人の命にかゝはる寶はございますまい』

と軍次兵衞に取なしを賴みますが聞きませぬ。姫君は見かねてその紀明も此の島もソレ一緒に放してやれと籠の中より小鳥を放ちます。軍次兵衞はあきれはてる。岩藤はにがにがしく思ふ。尾上は情深いことに喜ぶ。斯くて左枝は許されたのである。

そこへ牛島主税、谷澤求女が言ひ爭つて出て來ます。姫君よりたまはつた賴朝公より拜領のお家の重寶波の元どりの觀世音について である。軍次兵衞は兩人控へと叫んだ。岩藤は弟どうしたのかと問ふ。主税は元どりの觀世音を手に入れなばかねてのたくみ……といふのを岩藤はしつと制した。そして求女に觀世音の尊像をこれへ出せと言ひます。求女はやむなく岩藤の手より姫へ尊像を渡した。姫は館へ下向するまで尾上に預ける。尾上はしかとあづかります。別當方で休息と一同が立去つた後で、

『求女さん待たさんせ』

と奥女中は呼び留る。今日はのがさぬさあ〳〵といふ處へ入れ違つて江戸平が出て來ます。求女はその影に隱れて逃げ去る。どこへ行つたと女中達が言ふとがくの鬼面をかむつて、ソレこれぢやと驚かします。わあつと女中達が逃げた後へ主税が出て來て密書を岩藤に手渡ししたいものだといふのを、江戸平が取らうとする。立廻りの上主税は江戸平にあて身を喰はして逃げて去ります。江戸平は氣がついてそれを追つて行く。尾上が出て來て落ちてゐる手紙を拾つて小隱へかくれると求女にもつれて左枝が出て來る。二人は懇仲であります。館では人眼があるし法度きびしいお家の掟、左枝は切ない心を認めた手紙を求女に手渡そうとして爭ふ處へ、不義者見つけたと主税が出て來て大聲で人を呼ぶ。岩藤が出て既に引立てやうとする處へ尾上が出ます左枝が求女に茶の湯の稽古をして貰つてゐると取なしするが主税は聞かない。證據があると艷書を見せるので岩藤も愈々承知しない。

尾上はそれを讀もうと以前に拾つた手紙とすり替えて讀み始めます（その後は暫く御無沙汰いたし候かねてお話し申置候事は都合よろしく候まゝ御安心下されたく候又其許より頼みつかわし候調伏の一儀は……）岩藤始め大いに驚き出した。（毒藥調合させ彼の處まで持參いたすやう申候　間御落手の上御取はからひ願上候……）主税は今更に慌てた。讀まないで勘辨してやれと言ふ。尾上はそれでは名宛だけをと宗光院様まゐる、伊豆の深山より、しかも男の筆跡で寺澤流の書である。岩藤に誰の手跡かと聞く。答えない。伊豆の深山も多い内にまゞ名高きは伊勢木、しがらき天城……やあと軍次兵衛は自分の名を呼ばれて驚きます。あくまで不義としてこの手紙を詮議しやうかといふのを主税は不義者でないと言ひ切る。尾上は在つて益なき手紙と二通とも破り捨てます。流石は中老と岩藤はほつと安心した。

『姫君様、御歸館』

尾上達は行列と共に立去つた。岩藤は尾上を強く憎んだ宗光院にたのまれた。秘書のことまで知られて見れば一層のことゝ奥女中達は思案した。

『入相の鐘、花や散るらん』

と岩藤は櫻の花の散るのを眺めました。

二幕目は試合の場です。眞中二間黑ぬりかまち、上下御簾にて見附金襖といつた舞台である。左枝を始め腰元達が求女を先に桃の枝に短册の結ばれたのを持つて出て來る。咲き揃ふ桃の節句や雛祭でこれから雛の御祝儀にいざ御殿へ上らうと言ふのです。

『姫君様へ桃の献上』

と求女が岩藤に取次を頼みますと、御簾の内から姫君のうるはしい聲が聞える。咲き染めし卯月のけふを數ふれば盛り久しき法の花ふさと歌はれる聲のまゝに御簾はあがる。そこへ今朝來御寺へ代參してゐた尾上が歸つて來ます。三寶へ袈裟をのせて、義高の菩提のため剃髪したいといふ姫君の願望は聞届けられ、七條の袈裟水晶の珠數まで添へて下されと、尊像と共に渡します。姫君は喜んでその旭の尊像は義高より送られたかたみであるとて尾上に預けて折があれば近江國義仲寺へ納めてくれと頼む。岩藤始め奥女中達はそれを引受けた尾上が憎くてならない。拜辭するのが當然とかあつかましいとか、はては岩藤は怒つて尾上を恥かしめます。尾上の親は本町で名高い塚本爲佐吾右衛門といふ御用を勤める金持、その金持の顔が鼻先にブラック、だが御役向きは尾上は中老、岩藤は局、御表なれば用人格です。もし狼籍者が忍び込めば打取る器量がなければ勤らぬ。

『尾上殿、さだめし長刀のひと手心得て御座らうのう』

返事に困る尾上を尻眼に見て、武藝の心得なくその職にあるのは祿盗人ぢや、口惜しくば岩藤と立合つてみいとわめきます。求女は種々とその場を執成しますが、岩藤一味の奥女中達いゝ氣味に思つて、女子同志の立合は面白いの、武藝を知らぬのかとはては手をとり足をとらんばかりです。

『暫く〳〵お待ち下さりませ』

こゝで尾上の忠僕お初の出になります。尾上は驚いて御前ぢや下れといふ、岩藤も又者の來られぬ御殿へ誰が許したと怒る。だがお初は岩藤に願ひがあつて出て來たのだ。主人尾上は町人の娘ながら長刀の一手を私に教へておいてくれたから主人の名代にお初が立合ひたいといふ。岩藤は不審に思ひつゝ打つて堪そうと立合を許す。岩藤の一番弟子桐しま

がお初に立合たがもろくも敗ける皆は一度に打つてかゝるがかなはない。勝つて下らうとするお初に岩藤は自分と立合ふといふ。尾上は止めるがあまりに執拗な岩藤の言葉に止むなくお初は立上つたが元よりお初の敵でない岩藤があつと太刀を落したのでお初が拾つて渡す隙に岩藤はお初を打つた。卑怯ぢやとお初は殘念がつたが身分が違ふ。なほ一手合せをと望むお初を廉外者奴と尾上は叱ります。口でけなして心でほめて……尾上は改めてお初の無禮を岩藤に詫びるのです。姫君は末に似合はぬ手の内とほめる。上巳の刻の時計がなります。姫君は剃髪染衣の用意の佛間へ行く。みなその後に續いて去るのを見送つて、ただ一人お初は可愛らしい姫君、意地の悪い岩藤、且那様に何事もないやうにと心で祈ります。

三幕目は有名な草履打です。金襖後に奥千疊になり戸屋の幕杉戸のこしらへです。ずらりと全部板つきで幕が開く。劍澤彈正が姫君剃髪についてかねて預けてある三寸丁の御朱印を受取りに來てゐる。それを預る尾上が呼び出される。尾上は御朱印を箱へのせて腰元を從へて出て來ます。彈正が箱の中を見て驚きます。その筈御朱印はかげもなく草履がはいつてゐる。尾上はびつくりして草履こそ盜賊のものかと改めると、廊下を通ふ上草履で印は正しくこぼれ松葉です。その草履は岩藤のものと解つて尾上ははてと考へる。岩藤は盜賊の證據のこの草履、それに手がかりある岩藤は盜賊ぢやと尾上の傍へ身をすりよせて大切な御朱印を盜み取つてわしの草履を中へ入れて置いたのはこの岩藤に罪をきせるつもりか尾上は口惜しげに泣く。彈正は威高になつて奥向きは局の差配、岩藤の計ひを見物するといふ。岩藤は

『尾上殿、一寸それへ』

と呼び出しこなたの腹立より盜賊の惡名つけられた岩藤はどうであらう。岩藤が盜んだか自分が盜んで人に汚名をきせるのか。言譯なければ草履の科人、コウ〳〵〳〵と草履で尾上の身體を打すえた。左枚始め腰元達は驅いだが尾上はそれを制した。身に過ちあればこそせつかんを受けるのに品もあらうに草履とはと身をもだへて尾上は口惜しく思つた。岩藤は尾上の倒れるまで打續けた。彈正は御朱印紛失を表へ屆出んと立去らうとして岩藤に、ウヌが斑は見えず共虎の斑は見ゆるたとへ隨分ともにと囀いて行つた。岩藤についてお女中達も奥へ去つた。

『後に尾上は胸せまり、こらへ〳〵し溜め涙一度にわつと……と泣く中老を腰元達はいろいろと慰めます。

『此身に覺えなき事ながら云ひわけたゝぬ御朱印の紛失、コリや尾上が一生のあやまり……

……と思案をきめつゝも口惜しなきに泣くさまを奥女中達がわざ〳〵と覗き見て快げに大聲あげて笑ふのです。

四幕目は長廊下から烏啼辻占の場、それから部屋自害の場の三ばいです。長廊下では奥女中達が伯父御彈上と局岩藤の隱謀に邪魔になる尾上をあゝしてこらしめておけば御殿は下るであらう。その後は岩藤の心のまゝになると喜びつゝ立去ると襖のかげよりお初がそつと立出でます。いまの話を聞いたので尾上へ言つて忠節を立てさせやうと考へてゐる處へ、尾上はしづ〳〵と御殿より下つて來ます。お初は主人の顏色の悪さを案じる。尾上は何氣なく案じなくてもよいと言ひつゝお初の直

す草履を無念そうに見入る。お初はそれと心づいて不審げに尾上を見る。尾上はさとられじと静々と立去るのを、お初はなほも心配げに考へて主人の居なくなつたのを知らぬ有様です。

尾上の部屋ではお初がいろ〳〵支度をします。お召替をといへば此まゝでよいといふ。夕飯の仕度をといふとまだほしうないと言ふ。案じるお初に尾上は持病のつかえが起つたのだと言ひます。お初は衣桁にかけたかい巻を着せて背後から擦りつゝ頻りと慰める。お初は召使でも武士の娘でした。町人の娘の尾上がお初を使ふのも時節です。だがお初は尾上の親から恩を受けてゐる。お初は尾上の氣の結ぼれをほどさうと歌舞伎や操りの話まで持出します。尾上は忠臣蔵の師直の憎々しさを思ひ出すのを、お初は鹽谷の短慮をいましめるのです。お初は七輪に薬をかけてゐる内に尾上は文箱に書面を入れて使の用意をする。お初は薬の出來たのを持つて出て、文箱を見て不服顔である。尾上は急に父母に用事が出來た。と親里への使を命じます。お初は幾度か躊躇しますが女の主ぢやと侮るかとまで言はれてみれば往かずには居られぬ。はては使に行かねば暇を出すと急かれて、張つぐらより生木綿の在所染の紋付を着て、行きともなく思ひつゝ觀音様や鬼子母神に主人の身を祈つて立出でやうとするのを尾上は呼び止めて主従は三世ぢやと言ふ。お初はなほも澁々と立去る。あとで尾上はお初の忠義を喜びながら、父母の恩を謝して、あの文を見た時の父母の歎きをしのびつゝも女でも武家奉公をする身が草履で面を打たれた不面目さに決心をして、一遍の經陀羅尼を唱へて最後を淨めやうと佛間に入ります。入相の鐘が聞える。

一面の練塀、眞中に燈籠が見える。即ち足利家の裏門口です。仲間可内が提灯を持つて出て來る後よりお初が走つて出る。可内は泣き出しそうな日和だとか提灯の火が消えたら六道の辻で迷ふであらうなどといやな事を頻りに言ふ。はては提灯の火を消して南無阿彌陀佛、脈が上つた。無常の風だといふ。そこへ烏の夜啼きです。お初はいよ〳〵辻占のよくないことに胸を痛める。醫師の養仙が八平に導かれて出る。これも死に近い病人の噂さをする。お初はます〳〵使に行きたくない。

一層文箱を開けて見やうかとも思つたが封を破つてはとひかえる。ではと歩きかゝると草履の鼻緒が切れた。この時、主税と江戸平が御朱印を奪ひ合つて出て來る。そこで燈籠を小立に三人がもつれる。すると文箱の紐が解けて草履と書置が出るのを三人が月光に見る

『こりやこれ草履』と江戸平が不審がれば、

『書置のこと』と主税は驚く。

『こりやこうしてはいられぬわい』

とお初は草履と書置をもつて一散に走る。

尾上は既に自害して失つたあとへお初が歸つて來る。

『おつ旦那様……』呼べど答へません。のど笛のくさりを思ひのまゝ掻き切つて尾上は死んでゐます。魂はまだ家の棟にうろついて岩藤に草履で打たれたことを口惜しく思つてゐるに違ひない。武士の娘のお初はうつぷんを晴そうとかねてから決心してゐた。お初にはあとに殘つた尾上の兩親の歎きが思はれた。お初は文箱より御前御披露と書いて岩藤らの惡事の段々を認めたものを見出した。また意恨の草履を手に握りしめた。奥から『御歌詰の刻限でございます』拍子木の音と共にふれ

る聲が聞えて來ます。ともしびの光りさへいとゞ淋しい長局、お初は御披露書を手拭で包んでこしに卷き、恨みの草履を片手に、また片手には血汐のしたたる尾上の懐劍を握つてしのびやかに出る。蛙の聲が聞えて來ます。初花生りの藤の花を見て、

『藤い、岩藤をまつこの通り……』

と斬りおとしてお初は一散に駈けてゆく。雨の音がばら〳〵と聞えて來ます。

大詰は奥庭の場です。忍びの拵へで源吾が出て來て礫を投げる。岩藤は紺の蛇の目傘をさして出て來ます。命け通り彼の品を乾の隅へ埋めておいたといふのを岩藤は大儀であつたと喜ぶ。蛙の音が急に止みます。岩藤は不審がる眼の前へお初が現れる。岩藤は始めは驚いたがお初と聞いて大かと思ふたと笑ふ。

お初は主人が持病の癇がさし込んで心がつかぬ。もしもの事があつては心細いから岩藤に尾上の部屋まで來てくれと頼む。岩藤は藥を飲ませと言ふのをお初は聞きもせず、岩藤のもつてゐるお守りを水に寫して呑ませたいと迫る。そのお守りとは元どりの親世音だと言はれて岩藤はびつくりします。それでは朋輩のよしみで部屋まで見舞ひに行かうと一度は言つてみたが、俄かに頭痛だとてことわる

『その頭痛には私がよいお守りを持つております』

とて以前の草履を岩藤の頭へのせます。岩藤は大いに怒り出す。尾上が持病だとて構ふものか、それに不素女のくせに試合には敗れを取らしたな。尾上は御朱印を紛失させたのみか姫君より預つた元どりの親世音も大方人に盗れて言譯がないので自害して死んだのを病氣と言ひ立てる岩藤に姫君の御前を取なしてほしいと頼むのか。草履を持つて來たのは尾上が仕返しをしに來たのか。と岩藤はお初を散々に打ちすえて突はなし、はては懐劍で斬つけます。お初は逃げつゝ落ちてゐた傘で打留ると内に隠してあつた尊像が落ちる。

『こりや正しく元どりの尊像』

とお初が喜べば岩藤はこれをやつてはと取りにかゝる。

『これ取らうばかりにそなたの自由になつてゐた。さあこれからは主人尾上が最後の恨み覺悟しや』

とお初は勇を鼓して斬りつける。とゞ岩藤を斬り倒して草履で打ちまくりつゝ、

『主人尾上が恨みの草履、思ひ知つたか』

と尾上の恨みを晴して所つとする處へ、腰元の伏家、關谷、梅ケ枝、山吹などが手雪洞をものて出て來る。狼籍者動くまいとお初を圍むと、求女が出て來ます。

『女にまれな初が働き、主人尾上が仇敵局岩藤を討取つたるは天晴れ〳〵』

とほめる。お初は披露書と尊像を差出して

『主人尾上が認めおいたる此の願文御前御披露、まつた元取の尊像、請共お受取下さりませう』

と渡します。求女はそれを受取つて、

『尊像無事に手に入りしもその方の働き、今日より二代の尾上と改めむ。家名相續疑附有難く頂戴致せ』

『はつ、身にあまりし御主人の名跡ありがたく頂戴仕ります。尚この上とも御前御披露……』

とお初が疑附をいたゞいてゐると、忍びの源吾がやつと斬つてかゝる。それをお初がぼんと投げて、

『お願ひ申しあげます』

求女が扇を振りかざしてちよん〳〵〳〵と目出度く幕はしまつてゆく。

（中座彌生興行上演）

# しばみもの　のがたり　戀飛脚大和往來

平一平

大塚克三畫

金にもの云わせた田舎大盡が、新町の曲輪でも名の通つてゐる井筒屋の表座敷に陣取つて、女郎や仲居や大鼓持、禿などを引つつけての大散財のなかばです。

他所の茶屋でも騒いでゐるらしい遊樂のさんざめきが聞えて來ます。はなやかな遊廓の夜です。

『梅川はどうした……早やう呼んでくれ〳〵』と亦しても大盡がせき立てます。まもなく梅川は、濃艶な牡丹のやうな風姿を現わしました。大盡はこゝより奥の方が落着くと云ふので梅川にも來る樣にと一同を連れてヤボな姿を奥へ消してしまひました。後に内儀のおゐんが梅川の思案らしい青ざめた顔色を見て『どこど氣分が悪いかへ……』と心配そうに問ひます。今の梅川には忠兵衛の事で胸が一杯になつてゐるのです。

『忠兵衛さんが身請の手附濟んで、田舎の相談も消えて嬉しやと思ふ内、跡金も出來ぬ上、手附の日限も今日限り、僞り云ふて當座逃がれ、その中へあの意地悪るの八右衛門が、此間から身請するとて、持てはやす情なさにまた癪が胸に……推量して下さんせいなア……』『さいなア、樣子を聞けば忠兵衛さんは養子とやら、固い母御さんの手前もあり、金の才覺出來ぬ時は突き詰めた男氣な御方、ひよつとした事があらうかと、最眞に思ふ心から……』全く、二人の案じ合つてゐる話で知れる通り忠兵衛は梅川を田舎の客が身請すると聞いて手附の金を五十両置いて行つたまゝ、此々十日餘りと云ふもの顔を見せないのです。

奥で騒いでゐる唄聲が梅川のやるせない心をよけいいらだたせます。

久振に堂島へとどける五百両の金に懷を温めて、霜夜の寒さを忘れて、氣輕に家を出た忠兵衛は、北の方へ行く筈が何日もの習慣から、自然に南へ向いて、二町三町と梅川の長い黑髪に

引かれる樣に何つの間にか、ハッと氣の附いた時には井筒屋の店先まで來てゐました。そつと裡をのぞくと、梅川が火箸を玩んだり疊算などして忠兵衞を待つてゐます。

『川とおゑんが、疊算置いてゐるさうな、うつかりとも入り憎い、あの疊算は誰を待つてゐるのであらうおれぢやと思ふて、ほか〳〵行つて十日も逢はぬその間に、御時節柄で、金持ちの八右衞門は乘り替えて今日おれを呼びに來たのはすつぽりと退いてくれといふやうな事ぢやないかしらん』

今の忠兵衞には、身請の金の後金二百五十両はとても出來樣あてがないのです。その金のつまりから自然、ひがみも出てくるのでした。

いつたんはあきらめた樣に元の道へ戻りましたが、

『イヤ〳〵さうでもあるまい、貧すれば鈍すると、大きな間違ひが出來るものぢや、ちつとやそつとはお粗末ながら、梶原源太はおれかしらん』と思ひなほして『おゑん〳〵』とそつと裡へ忠兵衞は聲をかけました。忠兵衞の聲を聞いた二人は飛び立つばかりに、忠樣と駈け出樣としました、其處で折り惡く奥から遣り手のおかんが、梅川を呼びに來ました。而して梅川は折角こがれてゐた忠兵衞に顔も合さず無理におかんに奥の座敷へ連れて行かれて終ひました。

後におゑんは、萬事を呑込んで、先づ、

『ようお出でたなァ―』と這入りかねる忠兵衞を氣安く迎へ、その上に裏口の切戸から離れへと、戀こがれてゐる若い二人の首尾を自分の事の樣に、忠兵衞の耳元で囁くといそ〳〵と奥へ馳け入ります。いきなお内儀です。忠兵衞も喜んで裏口へ廻ります。

道具は廻つて奥の離れ座敷へ、飛び石、植込、石燈籠など粹なつくり、上手に中二階が見えます、その座敷から先つきの客の騒が聞えて來ます、おゑんは梅川の手をとつて出て來ると、其處の座敷へ待し、庭へ下り切り戸をあけて、忠兵衞を引入れ梅川に向ひ、

『コレ川樣、役に立たぬ事云はずと、とつくり相談して、忠兵衞樣も合點かえ……』と二人にしつかり駄目をおし、粹をきかして奥へ入ります。

十日餘りに逢瀬のなかつた二人は、しつかりと手を取り合ひ何にから云つてよいのかたゞ嬉しさにわく〳〵してゐるのみです、定めし握りしめた手を二人は一生離したくなかつた事でせう。忠兵衞はおゑんの心盡しを腹の底から感謝をしました。大事な用のあるにもかゝわらず梅川の口から出るのは矢張り愚痴が先きでした。忠兵衞はおゑんの云つた、無理な事よりもと、

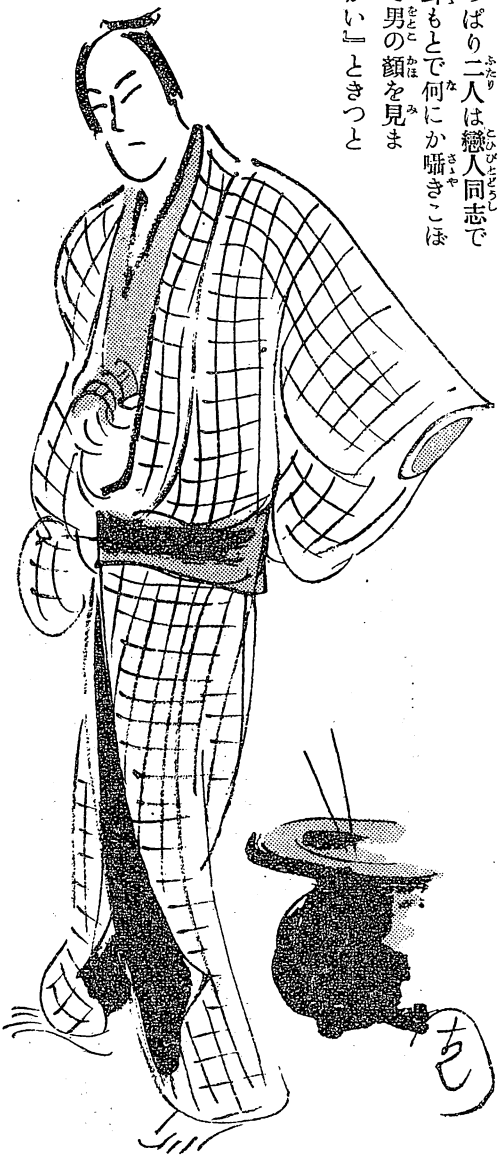
『アノ是々……』と梅川の云ふとするのをおさえて、

『今もおゑんが云ふたではないか、いつまでも埒の明かぬ事を云はず、どうならどう、斯うなら斯うときつぱり話しをせいと云ふたいやないか、お前のやうなそんな廻り遠い事を云はずコ

レ忠さん、あんたはお金も出來ぬゆゑ、八さんの方へ行きますと云ふたりや早わかりじや、と身請けの金の出來ぬひがみ心から直も梅川の心を引いて見ました。うらめしさうに忠兵衛の顔を見る海川の瞳には玉の露が光つて見えます。時も時、二階から三勝の淨瑠璃が聞えます。

『あの唄を聽かしやんせ、外の男に添ふ心なら、なんの斯うした苦勞をしませうぞいなァ―』と、梅川はこらえてゐた涙の顔を男の膝に伏しました。だが結局は思ひ合つての果の口説です胸のわだかまりがそういつまでも取れずにおりませう、お互ひにわかつて見ればやつぱり二人は戀人同志です。梅川は忠兵衛の耳もとで何にか囁きこぼれる樣な笑をうかべて男の顏を見ました、『何にをそこ所かい』ときつと云ふ忠兵衛の顏を氣のせいか何んとなく浮々してゐる樣です。梅川は男の言葉にとんちやくなく、忠兵衛の手をとりいそ〳〵と奥へ入ります。

道具は廻つて元の表座敷へかへります、其處に居合した仲居や禿などが日參がよかつたの島邊山が面白かつたのと話合つて奥へ去ります、と後へ槌屋治右衛門が來かゝりおゑんと梅川を呼び出し梅川の身請の後金の出來ぬからは海川は八右衛門の方へ行つて貰ふと云ひ放ちますので二人は驚き、梅川はいろ〳〵と一寸逃れに忠樣も今宵思ひがけない大金が手に入つた故最う少しの間と賴みますので、其處は四年前忠兵衛との仲を知つてゐます治右衛門も同じ身請さすならと待つ事になります、其處へ金貸しの由兵衛が治右衛門をたづねて來て、



『おゝ治右衛門どのか……これ受判した金はどうして下んすぞ世話した金の日限を延ばしては、どうも銀主へ口がきかれぬ、それで前方から念を入れておいたに、今日の明日のと云ふてござるはちと御人體にも似合ひませぬわいの』と金の催促、その上出來ねば金のかたに梅川を連れて行くなどと云ひますので、治右衛門も腹を立てます。二人の立上ろうとする所へ、八右衛門がぬつと入つて來て、そのまゝだまつて上手へ行き大あぐらまゝ、サア約束通り梅川の身の代二百五十両改めて受取りやと小判を出しかけました、あまりに無人の振舞ひです。

『二百五十両、さ……て有難い事もない、そうして何んぢや、わが遊ぶ茶屋でもないに、女子あるじと悔つて、案内もせず座敷へ踏ん込むは、なんとぶしつけぢやあるまいか、この治右衛門が世話やいてゐることは誰れ知らぬ者はない、そんならおれが妾とも、女房とも何方からいつても主がありや、貴樣方に踏みつけさす事はおれがならぬ……金はいらぬ持つて去にや』と八右衛門の態度に腹を立てた治右衛門がきつぱりときめつけます。とそばにゐた由兵衛は又梅川を八右衛門に身請して貰つてその金のうちからこつちへ返して呉れるか但し梅川をかたに貰ふかとせめ付けます、八右衛門も口を入れて、どちらもようせぬはむさいぞよと云ひますので更らに、廓は勿論大阪中で名を賣るこの治右衛門、人に賴まれたによつて無理も云ふ、身の爲にむさい事

する治右衛門ぢやない』と云返しました、

『ウム、人に賴まれた』さてはと八右衛門は、何か、ならず者の忠兵衛に賴まれたか、ァゝ治右衛門悪い合點ぢやぞや、尤も千両二千両は取扱ふやうなれど、ありや皆人の物ぢや、ハテ金に一夜の宿貸す飛脚ぢや手金と云ふては家屋敷家財かけて二十五貫目に足らぬ身代それに、ァゝ二百五十両

盗みせう事は知らず、逆様にしてふるうたら鼻血は出やうが、金は出ぬ、さし當つてその手附に渡した五十両、どこから出たと思しめす、おれが所へ來る江戸爲替中でくすねた盗み物、その尻が割れて催促すりや、とこほえ廻つて手を合せ佛のやうなわれ等を騙し渡しもせぬ金に受取りさせ、横に寢ぬ大がたり、あの上は親の勘當、追つけ俵の着物を着やうぞや、と口ぎたなく惡口をきゝます、あまりの事に一同もたゞ八右衞門をながめてゐるばつかりで口もきけない樣ですが、たまりかねたおゐんが、

『コレ八樣、いとほしなけに忠樣の日頃の氣質は知つてゐる、そんな心の人樣ぢやない……』腹が立つてゐるのは聲が震ふてゐるのでも知れます。が二階で聞いてゐる忠兵衞の心はにえかえりそうです、無念想さに幾度か懷の金へ手をかけます、投げつけて存分云つてやり度いが、その金はお屋敷へおさめる金で封印を切れば命のないのは知れた事です、梅川も唇をかんで涙をのんでゐます。そんな事にはいさい構わず、尙も八右衞門はしたり顔で、

『なんとどうぢや、友達さへ騙る忠兵衞、もうあれからは、巾着切りか家尻切り、さうでなくば女郎の衣裳を盗むか借るか、片小髮を剃り落され、大門口に晒されて友達までの面汚しもう梅川もよい加減に思ひ切れ、治右衞門も相手になりやんな、爰の内にも客せぬがよい、盗みせうも知れんぞや、どこぞでは火をつけをろう』と、段々大聲にしやべり續けます、聞いてゐる梅川は身を震るわせて泣いてゐます。我慢に我慢をしてぢつとこらゑてゐた忠兵衞も、元來が短氣の肝癪持ちです、たう〳〵我れを忘れて八右衞門の前へ走り出てしまひました。

『八右衞門……』震えをおびたうわづつた聲です。

『全盛を張る廓で、忠兵衞の身代の柵おろし忝ひ……八右衞門渡さぬ金に何んで受取りかいた、成程一旦われが金を借りんではない、そりや互ひの男づくで一禮云ふた其上で五十両は返したぞよ、サア盗みするの火をつけるのと、わりやひの口でかかした、引裂いてもくれる奴なれど、場所が場所ゆへ料簡する、こりや盗まいでも騙らいでも、大和からたつた今、持つて來た三百両、これ見ておけ……』最う忠兵衞の血は逆上して、すべてを投げ出してたゞ男の意氣地のみが遂ひに、

『百両、二百両……』と弱き男の弱き反抗は封印切の大膽をあへてしてしまひました、最う地獄の上の一足飛びです、震ふえる指をもれて小判はざら〳〵と疊の上に流れました、思ひ掛けない忠兵衞の出現と態度に、氣をのまれた八右衞門は落ちた上包みをそつと拾ふてあらためてゐて、確かに御用金と、役所を差して走りさりました。

後に一同は、こきみよしと思ひます。

『サア先達つての五十両都合二百両……』と後金の二百両を渡し八右衞門の面當てにこれから直ぐ連れて行き度いと忠兵衞は

心も空にして急き立てるのです。治右衛門は由兵衛を連れ、おゑんは一同を連れ、梅川の札を取りに月行亭の所へ出て行きます。そうした皆の顔には嬉しさの色があふれてゐます。

だが、忠兵衛の顔色はかゑつて青ざめ、無暗と梅川をせき立てゝそわ〳〵としたその態度に、梅川の心にも、ふと不安の影がさしました。

『四年此方曲輪へ來て門出の譯も知つたお前なんでその樣に急がしやんす』と、聞かずにおられなくなりました。

思わず忠兵衛はぢつと、梅川の顔を見詰めました。

『急がねばならぬ、道が遠い』

何んとなく氣がかりな言葉です

『そりや又どこへ、行くのぢやぞいなァ、と梅川の聲もせき込んで來ます。

『今の小判はお屋敷の爲替金、封印切つたればもう忠兵衛がこの首は、おれがものではないやい、絶望的に投げる樣に云ふ忠兵衛の聲は、最う覺悟をきめたものか、少しの震さえおびてはゐませんでした。

若しや……と案じてゐた事を、こうまではつきりと忠兵衛の口から聞かされては、いかな梅川でも驚かずには居られませんが世の中に忠兵衛一人を男と思つてゐる程の梅川です。

『大事の殿御をわし故に、ひよんな事をさせました、勘忍して下さんせ、死んでくれとは勿體ない、わしや禮云ふて死にまする、――それは悲しうなけれども、どんな在所へなりと連れて行つてせめてもの三日なりと、女房よ、こちの人よと云ふた上で、どうぞ殺して下さんせいなア』と、梅川は自分の爲に忠兵衛の命まで投出しての心意地に今更ら深く男が思われて來るのでした。

『そりや道理ぢや、母やお詫訪へ云ひ譯のたゝずみ所もない身の上、コレ爰に五十兩この金のある内に逃げ隱れて、それから後が命の切れ目』

二人の心がこれ程はつきりお互に解つた事はどれ程の喜びだつた事でせう。

心規めた所へ、おゑんが門出の勝手近いがよいと西口へ札を廻したと云つて來ます。仲居達は口々にうらやましがります。二人の心は、彼女等の思ひもかけぬ喜びにおののいてゐるのです。

『嬉しいやら、悲しいやら、推量して下さんせ、皆々まめでゐさんせえな』

つとめて嬉しそうにしてゐる梅川の姿に、誰れにも心づかない寂しい影がありました。

やがて二人は一同に別れをつけて……。さめれば冥途の旅の大和路へ――曲輪の騷ぎを後に忠兵衛は梅川の手をしつかりと握りしめて……もののけにつかれたやうに花道をさして…(完)

中座彌生興行歌詞と鸚鵡石

# 勸進帳

（鸚鵡石）

辨　夫れつら〳〵おもんみれば、大恩教主の秋の月は涅槃の雲にかくれ、生死長夜の夢驚かすべき人もなし、爰に中頃の帝がおはします御名を聖武皇帝と申し奉り最愛の婦人に別れ戀慕の情止み難く涕泣の御涙乾く時なし、故に主從の爲、盧遮那佛を建立仕給ふ然るに去壽永の頃燃えて終ぬ、斯程の靈場絶えなん事を歎き、俊乘坊澄源勅命を蒙つて無常の官門に涙を落し上下の親族を進めて斯の靈場を再建せんと諸國に勸進す、一紙半錢奉財の輩は現世にては無比の樂にほこり、來世にては數千蓮華の上に座せん、歸命稽首、敬白。

富　天も響けと讀上げたる。

辨　如何に候、勸進帳聽聞の上は疑ひあるべからずさりながら事のついでに問ひ申さん、世に佛徒の姿樣々あり、中に山伏はいかめしき姿にて佛門修業いぶかしけれ、これにも謂あるや如何に、

辨　其の由來いと易し、夫修驗の法といつぱ胎藏、金剛の兩部を旨とし、嶮山惡所を踏み開き世に害

---

浪花座三月興行狂言の梗概

故九條武子夫人作
田中總一郎氏舞臺監督

# 洛北の秋

一幕

尊王佐幕に宛然鼎の沸くが如く血醒い風が至る處に吹いてゐる德川の末期、こゝは上加茂の森に近い洛北の片ほとり比叡の山いつか時雨れて落葉の音も寂しく、小座敷の觀音の厨司、土間の接待の茶釜の工合みるから奥床しいも道理、彦根藩に名ある武士の未亡人蓮月尼が雛僧西念とのみの侘しい草庵である供を歸して唯獨り草庵を訪づれたのは京の遊女浮舟とて長州の侍の危急を救つた時詠んだ和歌が同じ勤王心に燃えてゐる蓮月尼の耳に入つてから親子の樣な交はりをしてゐたのである。その浮舟の口からお暇乞と聞いて遺の尼も顏色を變へた。浮舟の話によればふとした事で男と戀し合つてから初めて女の操といふものを知ると一時も廓に居るのが怖ろしくなつたので明日の夕方男と廓を拔け出す積りで

をなす惡獸毒蛇を退治して現世愛民の慈悲をたれ或は難業苦行の功を積み惡靈亡魂を成佛得脫せる日月晴明天下泰平の祈禱を修す故に内には忍辱慈悲の德を納め表は降魔の相を顯し惡鬼外道を威伏せり、是佛神の兩部にして百八の珠數に佛道の利益を顯す。

富　して又袈裟を身にまとひ佛徒の形になりながら額に戴く兜巾は如何に。

辨　則ち兜巾篠掛は武士の甲冑に等しく腰には彌陀の利劍を帶し手には釋迦の金剛杖にて大地を突いて踏開き高山絶所を縱横せり。

富　寺僧は錫杖を携へるに山伏修驗の金剛杖に五體を固むる謂はなんと。

辨　こともおろかや、金剛杖は天竺檀特山の神人阿羅々仙人の持ち給ひし靈杖にて胎藏金剛の功德を籠り釋尊未だ翟曇沙彌と申せし時阿羅々仙人に給仕して苦行仕給ひ功積り仙人其の信力强勢を感じ翟曇沙彌を改めて照普比丘と名付けり。

富　シテ又、修劍に傳はりしは。

辨　阿羅々仙人より照普に授く金剛杖は斯る靈杖なれば我相役の行者之を以て山野を經歷し夫より世々に之を傳ふ。

---

はあるが、その男は會津の侍故自分の胸に燃えてゐる勤王の念に濟まぬと思ひ乍らもどうにもならず二人となら刺されても本望だと泣伏す姿に感動した蓮月尼は清い戀愛の前には凡てが洗ひ清められる故たゞ慕地に戀に精進する樣にと悟してゐる。人の氣配、庄屋が柿を持つて來たので浮舟は一間へ隱れる陶器の士弄りをしてゐる蓮月の傍では庄屋は後妻に逃げられて急に今迄の慾心が怖ろしくなつてみると後妻の爲めに捨てた娘の事も思出され生きてゐれば廿二三と涙ぐみ乍ら悄然と歸つて行く『ア、一目逢ひたかつた』と飛出る浮舟は蓮月尼から正直な戀はやがて佛に救われると聞て初めて大きな心になつた外では子供等が頑是なく遊んでゐる。

# 傾城阿波の鳴戸

## ――玉造住家の場――

よしあしを、何と浪花の町はづれ、玉造に身を隱す阿波の十郎兵衞本名隱し銀十郎と表は浪人内証は人はそれ共白浪の夜の拝の道ならぬ、身の行末ぞ是非もなき――こゝは玉造の十郎兵衞の住家である。

# 釣女（歌詞）

抑是は猿楽の昔よりして其業の可笑といひし狂言師名に大蔵や鷺流の容をうつす釣女。

あんの山からこんの山へとんで出たるは、なんぢやろぞ、うなひにふつふと二つ細うて長うてりんと刎ねたちやつとすいした。

大名　さらば参詣を致さう、サア〳〵来い〳〵、イヤ誠に尊い事でムる、先づ鈴の緒に取り付いてグワラン〳〵〳〵、如何に申し候。

我れこの年まで無事なり。

○三郎殿の利益にて定まる妻を授け玉へ。

授け玉へと一心こめて伏拝む。

○扨てまづ祈願をこめたればやがてよき妻を授かる事であらう。ヤイ太郎冠者、汝も拝め。

太郎　畏つて御座るグワラン〳〵〳〵いかに木比寿三郎どのへ申上候。

我れも定まる妻はなし、似合相應美しき妻をお授け〳〵と三拝九拝したりける。

大名　又しても爰なたわけものめが、イヤこれは悟十郎兵衛が借金返濟の才覺に出掛けた守思女房お弓が受取つた一通の書狀讀んでみれば良人をはじめ仲間の者の吟味が掛つた故立退けとの報知、盗賊衒となり果てゝも御家の爲に國次の刀詮議する夫婦が命どうぞ良人の命助けて給へと心に神佛を祈る折しも哀れな聲に那智の御詠歌鈴うち振りつゝ十歳に満たぬいぢらしの女の子が、順禮姿で門邊に立つのでお弓はその國詣の懐しく、若干の報謝をして國は何處名は何と、問ふうちに圖らずも我子おつるとと分り飛立つ思ひ、これが尋ぬる母とも知らぬおつるの口から數々の悲しい詞、いつそ名乗らうかとも思ふが今の我身の難儀が子に及ぶが不憫と切ない心を鬼にして歸したが、恩愛の子の唄ふ悲しい聲引入れられるやうな鈴の音のだん〳〵遠去かり行くを聞いては身も世もなく、お弓はすぐその跡を追つて出る、すでにその日も入相の金の工面のならぬ十郎兵衛が、途中で悪者に窘められるおつるを我子と知らで連れ戻り、いろ〳〵訊くうちに小判を所持すると知つてその金あらば返濟する金の足にもなろかとおつるをすかし宥めつ出さそうと頼むうちに過失つて十郎兵衛の手でおつるは息絶へる。吃驚仰天折しも門口に

つた木比壽どのは不斷から釣竿を持たせらるゝに依つて此の針で妻を釣れといふ事で有らふ、有難い有難い、去らばこれにてよき妻を釣らふ〳〵。

〈釣ふ〳〵神の敎への釣針を、おろし見目よき妻を釣うよ〳〵針をおろせば不思議やな。

〈釣るよ〳〵釣るものは何に〳〵鯛に鯉に惠方棚に撞鐘信田の森の狐にあらぬ釣針を、さけておろして三十二相揃ふたよい妻を釣ふよ、お嬶さんを釣うよ。

〈おゝ當るぞ〳〵どつこいめたと引上れば、被衣目深にかつぎし女。

〈被衣をとればコハ如何に河豚にひとしき醜女ゆへ是れこつちを向かんせエ、何んぢやいな、思へば深い戀の淵、沈む我が身を釣り糸に、結んだ緣の西の宮、蛭子設けて二世三世、かわらぬ色は棹竹の末葉榮へゆく女夫中、放れはせじと取りすがる

〈月もろ共に舞ひの袖、女蝶男蝶の中もよく、遠く鳴尾の沖の石、堅いちぎりは住吉の千代に八千代をかけはしや、千秋萬歲の千箱の玉を奉る目出度さよ。

---

お弓の足音に死骸へ蒲團を冠せて素知らぬ顏、お弓からおつるが來た事を聞きさてはと驚き死骸を見て夫婦の者は互に悲嘆に暮れる、やがておつるの懷中から取出した書狀は、おつると共に順禮に出た母が旅先で敢なくなつての書置、詮議する國次の刀は郡兵衞が盜取つておれば早速歸國せよとあり、つゞいておつるの事が細々と書いてあり、遲延つたら褒めてやつてくれとあるに夫婦は涙を新たにしたが斯くては果てじとついに此の假住居を立退く事とはなるお馴染の十郎兵衞住家の一段の一くさり——。

## 花の吉野山（竹本連中 長唄連中）

正行閑居の庵にて面賣り所作などあるうち、慕うて辨の內侍の供をして、衞士又五郎（實は塚本狐）が參ります。正行それと察したが、わざと大內四季の行事など尋ねて試され雪に印した足跡から化體を見現はされるといふ。三ツ面所作や連歌のみやび、見る目美くしう。觸るゝ感じのやわらかき所作事です。

# 乘合船惠方萬歳（歌詞）

（常盤津連中）

賑ひは花のお江戸の隅田川、月の都も及びなき、景色を爰に都鳥、いざこさなしの乘合と、浮いた同士の渡し守。

筑波根の、此面彼面と口眞似に、問はず語りの庵崎の、横に素顏の富士額、蓮葉者でも惡性は、觀音樣へ願込めて。

裸參りの子飼から背中に臍の出仕事を、たゝき大工の供かせぎそんなお方と添はうなら、ほんに嬉し燗酒白酒とその御ひいきを山川に競べやうなき有難さ。

富士の白雪は朝日でとける、解けたがどうしたへ娘島田は根でとける、ヤレ、ヨイ〳〵、よい評判で賣りかける。

そも番匠の始りは敲き大工のこちとらが聞いても上の空仕事嘘をつきのみ曲尺を、使ひ馴れたる友達と、直ぐに裏釘かへして後は、ほんに辛氣な溝かんな互に二世と墨さしてかわらぬなかを此頃きけば、お前の手斧また新店に廻し挽、慳くや節木

---

河竹默阿彌翁作

# 新古演劇十種の内 戻り橋

（常磐津連中）

王化洽き洛中に此程より惡鬼棲むとて賴光朝臣内裏の警衛に上る。今日しも渡邊源次綱、君命を受け一條大宮よりの歸るさ卯の花咲いた堀川のほとり、戻り橋にさしかゝつて女性に出逢ふ。これこそ年終る惡鬼、戀にかまえて陷れんとしたが見顯はされて、物凄き妖魔の相と化し、綱を中空に引あげる、綱は勇氣凛々、片腕切つて北野の廻廊に落ち、惡鬼はむらがる雲にかくれ、光を放つて消失せるといふ古今に名高き戻り橋の一さし。

# 信州川中島

――輝虎配膳の場――

村上義淸の中言に依つて武田上杉兩家不和となり初度の戰ひに長尾輝虎勝利を失ひしは全く武田方に

の性悪と。

〈春風や黑い羽織に小脇差さして、ゆらり〳〵と船場へおりやる、アイヤ甚だ酩酊、時に景氣は未明の事に限りやすね、白晝は埃滿々として野暮ものたつぷコレ恐るべきだね、跡を慕ふてなまめて、こへ〴〵サアサヤツトヤナ。

〈空には歸る雁の聲、先月の月末か今月の月初めか木え往の菜飯の田樂で、朝飯とこてえやしたすると未明だから豆腐が一夜水中に御逗留や直平とこたへてどろんとけし棹てふものにてヨイ早や只中へ出でにける。

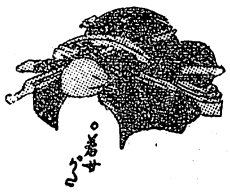
〈海上遙かに見渡せば、五色いろどる寶船、よい乘合とわせられても、乘りおくれたは不審しな芝居を一寸立見して、ツイおそなる御無禮と足を早めて來りける。

〈皷おツとり聲つくろい、ヤンリヤ目出度ヤナア、鶴は千年の名鳥なり、龜は萬年の御壽命保つ鶴にも勝れ龜にも增す今日此のお家を長者のしんと祝へ榮へましんまする。

---

は山本勘助を軍師とせし爲めである。勘助と直江山城守は兄弟なれば輝虎は直江に圖りて勘助を隨身せしめんとする。輝虎は常に短慮强ければ直江が『その短氣を愼みて迎へられねば應じる者なし、今日女房唐衣を以て勘助の母越路を招待すべければ禮を厚うして饗應したまへ』と言上したので輝虎もその詞に服す。越路は遙々勘助の女房お勝とて吃りなれど琴書に達せし女に附添はれて來たので輝虎は、衣冠直衣に服改め魚鳥野菜の美味なるを調へし本膳を進めると越路は却つて仰山な饗應は神前の御供へ同樣に不興にも足にて膳部を蹴返したので輝虎は見るより激怒する。直江は其の短慮をこそ愼み給へと止める。お勝は琴の唄にて母の無禮を免し給へと律に調べて搔き口說くに輝虎もそゞろ哀れを催し心の撓むを見て、直江は母を女共に伴はせて我館へ連れ歸らしむといふ、輝虎配膳の一卷。

× · × × × × ×



# 私の役々に就て

澤村宗十郎

私は一體、効年の時には、多く當大阪で藝道修業を致して居りました爲め、東京俳優としては大阪と云ふ所は大推拜者の一人であります。

こうした關係で、私が上阪致しました節は、成績も殊の外によく、是れも皆樣の御同情に依る所と、心から嬉んでいる次第なので御座います、昨年の二月、久々で悴訥升の改名を兼ねまして、お目見得致しました節、鴈治郎丈をわづらはして改名口上を述べて頂き、お蔭を持ちまして大入の盛況で歸京致しましたが、亦々本年も年中行事の如く、先月上阪お目通り致し明年も當年同樣、御目見得出來る事と、樂しんで居る次第で御座います。

殊に二月興行は、近來まれに見る大入で、白井社長は申迄もなく、出演者一同いかばかりか、有難い仕合とぞんじて居ります、右の好成績の内に前興行に打ちおさめ、當三月興行も引續き中座に出演致す樣なわけで、二ケ月を續けて出演致します等とは、近頃の記錄破りで御座いまして、御贔屓樣の御尊顏を亦々拜顏出來るかと、心から嬉びをる樣なわけで御座います。

さて當興行一番目は、鏡山とて幸四郎丈の岩藤、福助丈の尾上、私のお初と云ふ配役ですが、是れは皆適所の役々と存じます私から申上げますと誠に可笑な言葉で御座いますが、慥に皆樣の御氣に入る事と思ひます。

只私のお初は、江戸仕入のお初で御座いまして、かうした時代劇は大阪の長所で、的にうまく射當りませうか、どうでせうか、演出方法に苦心をしております。

なまじいに、こちらの型を調べてやるよりは、江戸式の物たりない位の、さつくりした、その儘のお初で勤めさして頂かうと思ひます、それにはお目高い御當地の事とて、御非難の御聲も御座りませうと思ひますが、そこはどうか、應ようの御見物を願ひたいと思ひます。

先年帝劇で、鏡山上演の折、梅幸丈の岩藤、故宗之助の尾上

私のお初で一度勤めましたきり、是迄一度も勤めません樣なわけでも、尤も未熟な私の事で、皆樣の御滿足を得ると云ふ期待はないのです、只簡單に、お飽きのない程度で、まとまつた物を御目にかけ樣と、苦心を致して居りますのです、今回は時間の關係で、二幕目の竹刀打の場を拔いて有りますが、お初の仕所は、勿論尾上部屋の場で、尾上が自害してからの場面であつて、其の場は昔の名優の型と、自身の工夫と、それに故秀調丈の型も多少見覺へてある所は加えて演出致すつもりで御座いますが、あゝした氣持の場面の事で御座いますから、成るべく在來の型をくづさづ、一生懸命に勸めますゆゑ、どうぞ前申上げた通り、お見にくい所は、お許しを願ひます。

中幕釣女は、御承知の通り河竹默阿彌さんの傑作で、私は先年當地でも一度上演致した事も御座いますが、此の太郎冠者の役に付ては、ハヤ皆樣にも定評ある事と存じます。

私は在來の踊りの型に、自分丈けの工風を取り入れまして、演じますわけで、狂言の内にも自然と、可笑味の加る樣にと、工風をこらして踊ります積りです、是れには長三郎丈の醜女、悴訥升の美女、右團次丈がわざ〳〵大名につき合つてくれる筈ですから、きつと好評の事と思ひます。

幕切れの派手に、舞ながらにして、幕を引きつけると云ふのは、私の珍型なのです、どこまでも可笑味のある踊りとして、御目にかけたいと思ふのです。

さて大切の乘合船惠方萬歲で御座いますが、是れは勿論、松尾太夫さんの得意の語り物で、ツイ昨年の四月帝劇で、私の才藏で、勘彌丈の萬歲で演じた斗りで御座いますが、今回は當座の皆樣が、乘合の客人につき合つて下されるので、一段と光彩をば加える事と存じます。

今度は幸四郎丈の萬歲に、私の才藏と云ふ配役で、つとめさせて頂きまするが、御存じの通り、可笑味の舞踊である所からおのづと萬歲や、才藏の氣分を出したいと、幸四郎丈とも相談して、在來の型に、尙一層の新味を加えまして、二人で幕切まで、面白、おかしく踊りぬき、そうして皆樣のお笑の内に打出したいと云ふ仕組みなので御座いますが、うまく御意に叶ひます事やら。

只今二月興行に幸四郎丈と男女道成寺を踊り、閉幕のお目通りに供へましたが、今回も亦々、同じ幸四郎丈と舞踊劇に出場して、閉幕の御意を伺ふ等は、何かの因緣で御座いませう、何卒二月興行の大入と同樣に、當三月興行も、大入滿員の盛況を以て、江戸へ鼻高々と自まん咄しの出來まする樣、御引立の程を一重にお願ひ申す次第なので御座います。

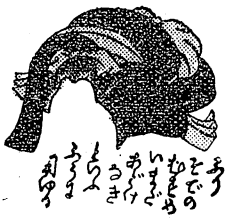
# 宗十郎のお初

大村嘉代子

鏡山といふ狂言は、度々出さうで居て、割合に近年の東京の大舞臺には出ない。宗十郎のお初もちよつと聞くと當り藝の一つであるやうにきこえるが、私には初見參のやうな氣がする。一體鏡山の岩藤は五代目澤村宗十郎の當り藝の一つになつてゐる。と云つて今の宗十郎には岩藤は適役でない。鏡山が出るとすれば、尾上かお初にまはる人である。

尾上といふ役は顔をあげないで演るといふ程の難役、顔で表情をしないとすれば、姿で感情をあらはして行かなければならない。

宗十郎の形は踊りで練りあげ、きたへあげられた形である。踊りをおのづから巧みに利用して舞臺の形を美しくつける。形で感情を出すことの巧みな人である。お初の、寂しいうちに熱情的なあのあはれさを、しみ〴〵と宗十郎は、見る人の心に殘すことであらう。



# 幸四郎の勸進帳

三宅周太郎

雜誌『道頓堀』から、幸四郎の『勸進帳』に就いて何か書けとの事である。この求めに對して、私は決して適當な回答者ではない。が、少しだけ云つて見たい考へはある。

大正六年十一月の帝劇の『勸進帳』當時であつた。この年の

五月に私は『三田文學』へ本名で處女作的論文を發表した。と、帝劇のY氏の注目を得て、それ以來二三年の間は、毎月帝劇の初日を見る案内を受けた。未だ三田の文科の學生だつた私は、この知遇はかなり光榮であつた。毎月東京のあらゆる芝居を見て廻るのに、觀劇費の不足勝ちだつた私は、かうして帝劇だけは一等席でゆつくり見る事を得て喜びは大きかつたのである。

で、右の十一月の帝劇の初日も、私は帝劇の芝居を見に行つてゐた。それは九代目團十郎の十五年祭に當る紀念的追善興行であつた。一方、歌舞伎座でも大合同のその興行があつた。歌舞伎座は段四郎、羽左衛門の『勸進帳』、帝劇は幸四郎、梅幸？のそれであつた。

幕間になると廊下で故田村成義翁を見かけた。氏は私の常に尊敬する老人であつたので、未だ正式の紹介を得てはゐなかつたが、私はよくその顏を知つてゐた。そこへ又松竹の顧問の某氏が見えた。私がその人を捕へて一寸挨拶した。すると氏は私を見て『今度の幸四郎の辨慶は巧いでせう』と云はれる。まだ知識の乏しい私ではあつたが、さう云はれて初めて安心した。と云ふのはその時の幸四郎の辨慶は、それ迄に旣に數度外々で見てゐた出來に對して、隨分巧かつたからだ。そして私はそれを自分の思ひ違ひか、氣の迷ひかでさう見たのではないかと恐れてゐたからである。が、その劇壇の權威で私の學ぶ所の多かつた某氏のやうな先輩が、今度はいゝでせうと云はれたのだ。私は試驗に及第したやうな心地で、自分の批評眼の外れてゐなかつたのを嬉しく感じた。

その某氏の云はれる所によると、その時は特に田村翁が初日を見に來られた。そして翁でさへ、幸四郎が今度は特に巧いのをほめてゐられたさうだ。尤も、翁として稽古中に多少の指導的注意位は與へられてゐたのではあらうが。

が、兎に角あの時の辨慶はよかつた。梅幸の富樫は當時竹の屋主人が『朝日』紙でほめられはしたが、私は梅幸のそれは、部分的にきまり方の鮮かなのを認める外は感心出來なかつた。併し、それと反對に幸四郎の方は堂々と手に入つた出來であつた。

それ以來でも、幸四郎の辨慶は何度見た事であらう。恐らく十回位は見たと思ふ。が、不思議な事は、幸四郎の辨慶は巧かつたり、まづかつたりする。右の六年の演出はよかつた。が、その後度々やつた中、例へば、大正十四年一月の帝劇の『勸進帳』などは惡かつた。宗十郎の富樫、勸彌の義經、揃つて惡かつた。そして辨慶の難は、餘りに芝居化した點であつた。一體『勸進帳』は最初富樫の『斯樣に候ふ者は』の白廻しが示すやうに、幾分の『能』の加味がある筈の芝居だ。それがその時に限つて變に說明の分子の多い芝居『勸進帳』に偏してしまつたのである。尤も、これは私だけの意見でなく、東京の各新聞の劇評家さへ、これを非難してゐた。

後、間もなく同年三月、歌舞伎座で左團次の富樫で又『勸進帳』をやつた。が、流石にこの時は前の非難を思つて、妙な芝

居氣分偏重にはならなかつた。先づ無難な辨慶になつた。それから去年の四月、帝劇で又『勸進帳』を勘彌の富樫でやつた。これも十四年三月の演出に似て無難であつた。

以上の話のやうに巧かつたのは、田村翁さへ『今度はいゝ』と許された六年十一月の辨慶であつた。そしてまづかつたのは十四年一月の辨慶であつた。かう云ふ所謂箱に這入つたものでありながら、巧かつたり、まづかつたりしてゐる。今更ながら芝居と云ふものゝむつかしさを思ふ。

幸四郎のこの何度やつたか、そして私さへ一體何度見たか分らぬ位度々の辨慶は、初役は云ふ迄もなく明治三十九年六月である。歌舞伎座で羽左衛門初役の『助六』と共に、當時の高麗藏でこれを演じたのが最初である。所が、故三木竹二氏は雜誌『歌舞伎』で明細な劇評を書いてゐられる。その結論だけを紹介すると。

『要するに高麗藏は持前の容貌と音量がある上に、團十郎の白廻しと主な科とを覺えて書寫しにしたから、團十郎に似てゐると云ふのが五分の强味で高評を得たのだ。が、細かく分折すると、高麗藏自身の工夫になつた所は語りの內の二三寫實掛つた科で、これは無論落第、(中略)尤も、最近の猿之助(故段四郎)に比ぶれば、前半は柄と白廻しとに於て優り、後半は味と藝とに於て劣つてゐる。

但し、これは名評で幸四郎の辨慶は今日でもこれが當はまる。比較的いゝのは前半だ。後半は我々の知る範圍では段四郎が、正に三木氏の評のやうにすぐれてゐたと思ふ。羽左衛門の辨慶も亦幸四郎と同じく前半の方がいゝのである。自然、幸四郎が將來よりよくすべきは後半だと思ふ。

併し、この後半のよかつた段四郎も、『馬蹄も見えぬ』の件の後の石投げの見得にツケを二度入れさせて物議を醸したと覺えてゐる。勸進帳にツケ入りの見得は一つとは既定の約束であつた。それを段四郎が右の見得を際立たせるためか、二度ツケを打たせたのである。これは團十郎通の古老の前通に、段四郎の辨慶が緞帳臭いと云はれた理由であつた。幸四郎にはかう云ふ事はない筈である。

尤も、幸四郎は大體にかう云ふ手のこんだものは必ずしも適當でない。その團十郎寫しにも考慮の餘地がある。が、柄と調子で行く『國姓爺』風のものは却つてすぐれてゐる。私に更に一言を許されるなら、鴈治郎、幸四郎の『勸進帳』より、二人の芝居では却つて鴈治郎の甘輝、幸四郎の和藤內と云つたもの、方が兩優共に長所を發揮すると思ふ位である。だが、それは百も承知だ。が、『勸進帳』程、呼び物にはならないと云ふやうな議論は、私のこの意見とは自ら別問題であるのを知つてゐて頂きたい。

# そこばく勸進帳

竹内勝太郎

天保十一年三月河原崎座で七世團十郎が始めて歌舞伎十八番の『勸進帳』を上演した時、觀世清孝が見物して思はず失笑したと云ふことは有名な話になつてゐる。がこれは獨り清孝ばかりでなく、多少ともお能の心得のある人々は『勸進帳』を『安宅』に比較し、或は道成寺、船辨慶、紅葉狩、土蜘等をそれぞれ引較べていづれも歌舞伎は能樂に及ばぬと云ふのが常である

傳統的に芝居よりもお能の方が優れてゐると見るのは一種の迷信として論外であるが、之れは各自その立場を異にするものでそれを同列に論ずるのが土臺まちがひである。即ち能樂の構造が舞踊的であるに反して歌舞伎のそれは劇的である。舞踊的の場合は何時もシテ役一人が舞臺を統一してしまつて他は悉くその影になつてしまう。反對に劇的であれば必らずシテとワキとこの二人の對立を以て舞臺が組立てられてゐる。シテ役一人が働いてゐる時でも何等かの形で之れを見てゐるワキ役を豫想する。

一つは統一的であり、他は對立的である。

そこに能樂と歌舞伎との違ひがある。

○

『勸進帳』にしてもそうだ。『安宅』の方には能樂として珍らしい程澤山の人物が出る。がそれは凡て刺身のツマに過ぎない要はシテの辨慶一人の藝につきてしまふ。『勸進帳』は反つてそれよりも人物は尠いが、舞臺はなんと云つても辨慶富樫の對立である。從つて全篇の見處もシテワキ問答及び勸進帳讀み上げの條で、何れもシテ役一人の藝ではない。殊にシテワキの問答は『安宅』の方にはなくて、反つてその一部とも思はれる部分がシテツレのカケ合ひになり、殆ど辨慶の獨語の形に終つてゐるのを見ても、能樂と歌舞伎との立前の違ふことがはつきりするであらう。

此の點が明かになれば元々能樂から出たと云ひ條『勸進帳』

が決して所謂本行の模倣に終るべきものでないことは贅言を要さない。のみならず徒らに能樂の上品を擧げて、歌舞伎の持つ固有の美しさに目を閉ぢ耳をふさぐのは愚である。

○

之れは然しひとり我々若輩の書生論のみでなく、大先輩の言葉にも立派にその意が見へてゐる。明治二十三年六月新富座上演の際に於ける當時の大通二六連の評の一節に、

『額の拵へも却て粗漏かと思はれ、眼隈も無く、衣裳も是迄見た物は申分有升んが、大口は萠黄色の錦で有たが立派にて何んだかいやらしく、ヤハリ白の方が品格が有て能う厶り升た』

とあり、同じ時の竹の屋氏の評には

『只惡くなつたのは此勸進帳出る度毎に本行に近くなる事なり能がかり烈しくなると芝居は上品にならず、却つて下卑て來るなり、必ず〳〵能につかうとせず、能を離れて芝居にてせらるべし。』

それから次ぎの二十六年六月歌舞伎座上演の折に竹の屋氏の評に曰く、

『今度は團十郎も思ひを善路に飜へして演劇は演劇、能樂は能樂の妙味あり、眞似ては損だと眞理を發揮し、一の谷壇の浦合戰物語より舞も花美やかに睨も澤山ツケも入りて大芝居に演られしは評者も嬉しくて大叫に唸りたり。』云々

兩者とも口を揃へて私の考を立派に裏書してくれてゐると思ふ。

○

蓋し一人立ち本位の、舞踊を主體とした能樂『安宅』の本質は幽玄であり、二人對立で主客相尅を主體とした歌舞伎『勸進帳』のそれは典麗である。

彼は理想主義的象徵主義であり、これは現實主義的象徵主義であるとも云へやう。『安宅』は何處までも藝術至上の理想主義を以て終始し、『勸進帳』は明かに劇としての現實化を忘れてゐない。そこに非常な相違がある。然も表現の樣式に於いては双方とも所謂寫實主義ではなくて、飽くまでも形式の確立した直接的な象徵主義的行き方をして居る。そこに一脈の彼我の相通ずる點がある。

○

中座彌生興行の『勸進帳』は幸四郎の辨慶、鴈治郎の富樫、宗十郎の義經と當代一流の役處を網羅し、現在では之れ以上の舞臺は恐らく望めまい。それに就いては今更何も云ひたいことはないが最近の記憶をあげると、昨冬京都南座の顔見世で同じ幸四郎鴈治郎に大阪福助の義經で『勸進帳』を演じた時の私の觀劇ノートにこう云ふ一節がある。

『四天王は頗る平凡だつたが、花道の出で、義經のそばを通る時、そのうちの二人は義經に禮をし、他の二人はしなかつた。

僅か四人の仕方にこの不揃ひは大きに見苦しい。之れは勿論どちらかに統一すべきものだと思ふ。元より禮をせなくてはならぬものでもなし禮をして悪い譯でもない。』

今度は多分こんな些細な缺點も匡正されてゐるとだらうと期待してゐる。（二月二十日）

# 勸進帳の辨慶に就いて

松本幸四郎

今度中座に於て久々に歌舞伎十八番『勸進帳』を勤めまするに師匠（九代目團十郎）の辨慶に扮しました時、私は十一歳で弟子入りを致しましたので、此『勸進帳』に初めて出ましたのは明治廿年の四月井上邸に於て天覽の時に四天王の龜井六郎に扮したのが十九歳の年で、夫れから同六月新富座で中幕に『勸進帳』が出ましたが、此時も矢張り天覽の時と同じ役割で其後同廿三年六月歌舞伎、同廿六年五月新富座の時には後見を勤めて居りました。また同三十三年四月歌舞伎座の時は、富樫（五代目菊五郎）義經（福助今の歌右衛門）四天王（家橘、猿糸、松助（現存）と私の（染五郎時代）で、師匠の辨慶は悉く見覺えておきましたが、最初廿三年とこの三十三年が最期の時には餘程異つて居りまして段々と本行に近づいて參りました。

道々の『ヤーレ暫く御待ち候へ』の處なども段々晩年になるに從つて四天王を壓するやうに怒鳴らずに聲の力が強くなつたので御座います。祈りの處は少しも替りませんが、勸進帳を讀み上げる件りに多少の改訂を加へた點がありました。それは何處かと言へば、本行に基くやうになつたので御座いまして『茲に中頃の帝おはしますおんなを聖武帝と申し奉り』のおんなが おみなと直り『戀慕の情やみ難くかはく時なし』が『涕泣眼に荒く涙玉を貫く思ひを善途に飜し』と改め、又『かるが故に』を唯だ『故にじやうじ菩提のため』となり、『斯程の靈場』が『かゝる靈場』となり『往時壽承の頃』が往時壽永の頃となり『無情のくわんもんに涙を落し』が『涙を流し』になり『數千

蓮華の上に坐せん事』が『紫摩黄金の臺に坐せん事』となり『歸命頂禮稽首敬つて白す』が『歸命稽首敬つて白す』となつたので御座います。夫れから『天も響けと讀み上げたり』の處で始めは見得をして居りましたが、晩年には眼玉を天地に見開き不動の姿になりました。夫れから『其由來いと安し』の頭へ『ホオ、其由來』と附け加へ、又、『内には忍辱慈悲』の『忍辱』を削つて『内には慈悲の德を納め』として此處に何處までも優和な顔をして『表に降摩の相を顯はし』を強く言つて顔附きも強く致しました『瞿曇沙彌と申せし時』を『申せしをり』と改め又『我宗祖役の行者』を『役のそう角』と言ひ『山野を經歷』を『山野を跋渉』と言ひ『是れぞ案山子の弓に等しく』を『是ぞ案山子の弓に似たれど』と改め又、九字の眞言中『臨兵鬪者皆陳列前』を『皆陳列前行』といつた時もありました『百拜頓首恐み〳〵謹んで白す』を『畏み〳〵』と、直しました。『人が人に似たとは』の處は少し笑みを含んで言ひ、また『ナニ判官殿に似たる强力奴』を眞面目に驚いたやうな顔で言つて居りました。夫れから『思へば憎くし〳〵』の處を『思へば憎し、ム、……憎し〳〵』で『イデもの見せん』と爪立つて地團駄研踏む件りも後には段々落附いて演つて居りました。富樫が這入つてからの『正しく主君を打つ狀の』を『打擲』とし『そら恐ろしく千斤をも上げる某腕も』のうでを『腕』と直したこともあります『一期の涙ぞ』の處は唯だお辭儀をして居りましたが漸次に義經の顔を差し覗き乍ら、頭を段々下げる樣に演つて居りましたから、私も現今では然ういふ工合ひに演つて居りますが、大層此方が主從の釣合がよろしゆう御座います。何役でも同じ事ですが『勸進帳』の辨慶ほど足の先から頭の頂邊まで緊張し切つた役はまあ少いと言つても宜いでせう。私等はこの役を演ずる時などは十日餘り精進して體を拵らへてかゝります。それから長唄、三味線、囃子等が、初めて掛かり一操、一合、一調子が濟むと、先づよかつたと安心する、と同時に舞臺へ出る私も、花道で『やあれ暫らく御待候へ』の白科が濟むと、ヤレ今日もまづよかつた！とほつとするといふ次第でムいます。

此狂言は我邦演劇中最高權威を持つたもので、一度天覽の榮を忝ふした事もあり、いふまでもなく歌舞伎十八番の隨一に位するもので初代團十郎が演じたは、元祿十五年午二月二日より江戸堺町、中村勘三郎座で、其時の名題『梶茫齡泉寛關武藏星合十二段』作者は三升屋兵庫、是れは團十郎の作名で自ら脚色したもの、續いて四代目が一度、七代目（後ち海老壽老人）が三度、八代目が一度、九代目が十九度にて歿後市川家の承諾を得て、幸四郎に依つて屢々上演された、今日迄に富樫、義經の配役を演したるは（富樫）鳫治郎羽左衛門、左團治、梅幸、吉右衛門、宗十郎、勘彌等（義經）鳫治郎、延若、歌右衛門、菊五郎、女寅、三升、德三郎（先代）等、七代目團十郎の海老藏が江戸お構ひ以後には勸むるものゝ無かりしを八代目は孝心深く大阪に居する父を尋ねんと愈々上阪のお名殘りとして嘉永二年三月河原崎座にて初役の辨慶を勸めて來阪して自殺せしが、當時中芝居に於て『勸進帳』を演じたるは阪地に於ける最初にて此時同時に剃髮し坊主頭へ兜巾を當て舞台を勸めしが、その興行の大入大繁昌を自ら祝した左の如きを揮毫す。

牡丹の根分も芽出度つづき一世一代入道して勸進帳
有難や役者のわざもすみ硯ふでも坊主に成田屋白猿

と詠じたりと言ふ（三浦おいろ記）

# 『封印切り』問答

高原慶三

△……今月は鴈治郎が『封印切』を出すそうですね

○……二月の實盛は珍しがられ、期待されて、果して成績も上々だつたが、こんどの『封印切』はタコが出來るほどやつてゐるから珍しがられぬ點からして狂言の立テ方は平々凡々、決して成功とはいへないね

△……いやしくも松竹の機關雜誌『道頓堀』誌上にそんな不平をいつてもらつたら困ります。內輪から火を出すやうなものですから……

○……いや、すまなかつた、實は僕のやうな芝居中毒患者にはどうも新奇なものを欲しるのでね、昔、鴈治郎が延若の忠兵衞を向ふに廻して近松の『冥途の飛脚』の八右衞門をやつたことがあるが、あんな火の出るやうな向上的(アンビヤンス)な芝居がモウ一度見たいと思ふのだよ、松竹も一つ冒險的に鴈治郎の利右衞門、福助の忠兵衞、長三郎の新七、魁車の梅川、扇雀のおとくで紀海音の『傾城三度笠』でも演らさないかな!!鴈治郎の年輩といひ、長三郎の近來の進境からいつてもこの新七は屹度大阪中を唸らすことを僕は太鼓の判を押しても請合ておくよ、お父さん一つ倅兄弟のために引立役に利右衞門をやつてくれないかね、

△……モシ〳〵そう勝手な注文ばかり仰有ては困ります、とにかく鴈治郎の『封印切』についてお話をうかゞひたいのです貴下の御意見はそのまゝ鴈治郎と白井社長にお傳へすることだけはいたします。

○……ウン判つた〳〵、それではそも〳〵この忠兵衞の『封印切』を扱つた淨瑠璃は近松の『冥途の飛脚』が忠兵衞死後の翌年寶永八年に書卸されたのが最初で、海音の『傾城三度笠』はその後三年目正德三年の作で、現在芝居になつてゐる『戀飛脚大和往來』の臺本となつたのは菅專助の作で、これらは皆操淨瑠璃である。

△……オヤ〳〵、柄にない考證が始まりましたね、そんなことは東京でなら伊原青々園先生か渥美淸太郎先生、大阪でなら木谷蓬吟先生、京都でなら高谷伸先生の領分で、畑違ひです

よ。

○……冷かしちやいけない。……それから、歌舞伎になつた最初は寶永八年卽ち……『冥途の飛脚』の書卸と同年だね……京の都萬太夫座の三月狂言に『傾城九品淨土』が出たのが最初で、專助の『戀飛脚大和往來』が、今日傳はる形式で舞臺に上せられたのは安永九年の十月京都四條の芝居で淺尾爲十郎、澤村國太郎尾上新七が演つたのが最初、脚色者は多分並木五瓶か奈河篤助といふことだ。

△……大へん詳しいものですね、いつの間にそんな學者になつたのです？

○……やかましい、これは全部劇聖關根默庵先生の『藝苑講談』中の梅川忠兵衞の傳說の中から拜借したものだ。

△……多分そんなことだらうと思ひました。

○……オヤ〳〵、とう〳〵ネタを白狀して了つたな、だが『藝苑講談』はいゝ本だ。梅川忠兵衞の正體もチャーンと明かにしてゐる、二月に浪花座で我童が演つた大森痴雪先生御作の『後の梅川』中にも京の客が飛脚屋となつてゐたが、傳說にも京の祇園へ仕替へてから飛脚屋の大和屋五兵衞と馴染み、又西陣へ仕替へて三度目の深間客と飛脚屋だつたので、遂に未恐しくなつて近江の矢走で出家して梅川尼と名のつたとあるが、さすがに大森先生はそれらの典據によられたものとひそかに敬服したものだ。とにかく梅川を知る上には『藝苑講談』を是非一讀する必要がある。入用ならいつでも見せて上げるよ。

△……御深切は忝なうございますが、それより先きがいそがしうございます、せかねばならぬ道が遠いです。

○……洒落るなよ、さて本論に入つて鴈治郎の忠兵衞だが、花道の出に以前は手拭を折り重ねて頭にのせたものだ。延若もこの式と思ふが……右袖を胸に、左を懷手で『梶原源太は俺か知ら』はおきまり通りだが、これで滿場を唸らせるのはさすがに上方式二枚目の總本山だよ。

△……それから舞臺へ來て、井筒屋の仲居おえんを呼びだすのですね。

○……そうだ。こんどのおえんは誰か知らぬが、いつ見てもよいのは魁車だね『吉田屋』のおきさといひ、かうした粹な年增な廓女は魁車に限るよ。初菊なんかでベタ〳〵してるのと役者の格がちがつて見えるね。

△……初め吉、末は凶、三世相ですね。

○……文句をいふな、さて、それから裏座敷になるのだが、この頃は鴈治郎はすつかり數奇屋の道具でやつてるが、昔は船板塀の切戸口で逢引さ、反吐大盡といふ三枚目を活躍させたものだよ、裏座敷の運びはまづおえんが梅川を誘ひ入れて、切戸の栓を拔く『あゝならあゝ、かうならかう』と、梅川との會話はいつもながら笑はせるが、そこへ忠兵衞が暗がりを手探りに飛石を傳つてくる、こゝは鴈治郎の寫實藝の絕頂だよ、それから數奇屋の潛りから身體を入れて、梅川とおえん

の話を暗がりに聞いて、喜んだり、怒つたり、せい〴〵當込むだ後、二人の肩をたゝく、思ひ出すのは雀右衛門の梅川だつた、如何にも頼み少い身を一心におえんに縋つてゐて、忠兵衛と二人になつてもオド〳〵して、ほんとに忍び逢ふ果敢なさが現れてゐたね。

△……大へん色つぽくなりましたな。

○……それから道具が廻つて、もとの井筒屋の表さ、こんどは八右衛門を誰がやるのか知ら？卯三郎は死んだし、中車が來なければ市藏か、まさか幸四郎ぢや一寸困るがね。

△……わかりませんが、誰がよかつたでせう？

○……一ばん印象に殘つてゐるのは卯三郎の八右衛門……これはあの顔で白く塗つたゞけでも印象に殘るのは當り前だが、皮肉で、いやがらせなところは却々よかつた、忠兵衛が如何にも封印切るのは尤もだと思はせた。忠兵衛を焦らすことでは一ばん巧かつたな『彼奴の親父は大和の新口村の水呑百姓で喰ふや喰はずならまだえゝが、喰はなんだり、喰はずの日が多い』といふ意味の言葉は何時も見物を吹出させたものだつた。中車は實着らしくて、嫌味のないのが疵だ、市藏は愛嬌が妨げだつた。

△……封印を切るについて鴈治郎忠兵衛はいろ〳〵演り方を變へたそうですな。

○……四十年も五十年も古いことは知らぬが、二十年程前からの記憶をいふと、初めは立ち身で懐中から封印を切つてバラ撒いたらしいが、その後八右衛門と競り合ふ内に、火鉢の縁に偶然當つて紙が破れたといふ風にやつたが、これは偶發的原因だ、解釋ちがひだつたといふので相當非難があつた、その後自發的に意地張りに切るのは賛成だが、最近では火箸で封を破つてゐるのはモウ一つ地味でいけない。あれはやはり手で切つてバラ撒くところに悲壯な華さがあるのではあるまいか、こんどはどういふ風にやるか、大に期待してゐる次第だ

△……封印を破つて後、梅川と忠兵衛が二人きりになるところは一寸いゝ場景ですね。

○……左樣、あの華さ激しさの後の獨吟のうらさみしい情景は棄て難い。こゝは梅川の當テ場で福助なんかもやはりあの人のさみしい柄がよく役つた、雀右衛門もたゞオド〳〵してすべてを忠兵衛にまかし切つてる女になり切つてたのは未だに思ひ出される。

△……引込みはどうです。

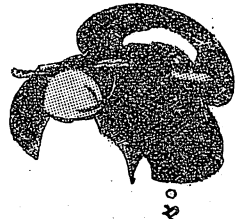
○……引込みも鴈治郎は相當變つたことをやつたが、初めは梅川の手をひいて、宙足を踏むで這入つたが、この頃では、梅川を先へ這を入らせて、おえんと二人切りで幕にして、引込みはひとりで、羽織の紐を結びながら宙足を踏むで這入るやうにしてゐる、あれも理屈はとにかく、梅川と二人で這入る方が情味があるやうに思へるが、君はどう思ふ？

△……サー、何ともいへませんが、とにかくこんど見た上で意

見を申上げませう。

○……それもそうだ。それでは僕も見た上のことゝしやう。

△……いろ〳〵お話有難うございました、ではこれで失禮いたします。



# 鴈の『梅忠』考

鐘芳堂主人

鴈治郎といふ人の癖で、癖といふと工夫と研究を重ねやうとする人に對して甚だ語弊がある、善惡ともに如何なる型のきまつたものでも上演の度毎に工夫を替へて見ねば氣の濟まないが此の人の癖といへば癖である。それで今度の封印切にしても勿論また新案が出るに違ひないが、一昨年十一月東京の歌舞伎座で上演したのが最近のものだから、その時のことを見てみると本年久しぶりの東上ではあり東京といふ土地に合はす爲に、ずつと大甘な行き方をした方が却つて大阪の芝居らしい色が出るだらうといふので、さういふ心持ちを根本にして萬事の演出をやつてゐたたとへば返しの茶の間の場でもおゑんと梅川が話してゐる後にそつと隱れてゐる。背中を叩いて驚かしたり、或ひは梅川にすねて切戸を一度外へ出てしまつて、おゑんがその戸を開けると、切戸に凭れてゐたといふ心持で、戸にすかされて入つて來るやうな科があつたり、いろ〳〵と動きを多くして客を喜ばしてゐた。ところが此人の特質である二枚目俳優らしいあの柔かい姿態が、かうなると、いよ〳〵十二分に發展するわけで、その演出の理窟よりも、先づいゝ形に醉はされてしまふやうなことになるいつもいふことだが、鴈治郎の芝居からはもう理窟を受ける必要がない。あながち東京に限らず、大阪でもやつぱり、かういつた風の演出が萬人に向くのではなからうかと思はれる。それは、ひとつは鴈治郎といふ人の藝が年と共老熟の域に入つてくるから追々生まな嫌味が無くなつてくるのだから、寧ろ際どい處まで演りすぎても、減多に脫線をする憂ひはない。なまなか澁い演出だとか何とか云つて、凝つては思案に能はぬよりは、觀客側にとつては、どれだけ助かるかわからない。前半の封印切や引込みの型などはもう定評もありきまつてしまつてゐるから此上の變りやうはないと思ふ。

# 世阿彌の云ふ批判と鴈治郎の梅忠

高安吸江

今から四百八十五年前（嘉吉三）八十一歳で逝いた世阿彌は能樂の祖觀阿彌（一九九三―二〇四四）の子であるが日本が有つ一大藝術家で此道を完成した人である。彼は嘗に觀世太夫として名人の譽を得たのみならず、同時に能樂そのものゝ創作家として曲節はもとよりテキストさへ彼自身に書いたので、今日行はれて居る二百餘番の謠曲中彼の筆になつた曲はかなり澤山ある。彼は丁度獨逸の大音樂家リヒヤード、ワグナーの樣に詩人と音樂家並に作曲家とを兼ね同時に俳優であつたのである。

當時の能樂は今日のそれの如く限られた少數の愛好者のみが味ひ得る、狹い範圍のものでなく寧劇と同じく大衆的であるが唯その原始的形式をもつて居ると考へるべきものである。それで今に傳はつて居る世阿彌の遺著は、劇界關係者にとつて一大寶典と云つても過褒でない位に價値のあるものであるが、私は今その一なる覺習條々の中から批判に關する條を抄出しよう。

抑能批判と云ひて、人の好みまち〳〵なり。然れば萬人の心に合はん事、左右なくあり難し。さりながら天下に押し出だされん達人を以て本とすべし。

此れは尤なことで標準を達人にとるに就ては誰しも異存はあるまい。然しさて達人とは如何。その標準はどうかとなると中々むつかしい問題である。世子は先づ能の出來榮えをよく見別け、其成績の良否が何に原因するかを熟慮すべきを說き、更に能の出來に見、聞、心の三ツの別ある事を述べて居る。

見とは華美ですべて面白く、始から一同感歎するもので目きゝは云ふに及ばず、さほど能を知らぬ人までも皆々面白いと思ふのである。聞から出來る能とは、始からしみ〴〵として、やがてしとやかに面白いものである。田舍目利などはさほどに思はぬが、名人が演ると自然內心から種々の風情が出て一層面白くなる中位の役者では注意しないと後がダレるが、それをダレない樣には努力するのを見物に悟られてはいけない。見物には唯面白くなつて行くとばかり思はせておくのが仕手の秘事故

實である。

心から出て來る能とは無心の能とも云ひ、名人上手の演るもので、さして是といふ程でない曲の、寂しい中に何か知ら見る人の胸に響く或ものがある。是を冷えた曲とも云ふが、此能の位は中加減な目利でも見分けること難く、まして田舍目利などは思ひも寄らぬ事だ形のない姿、影のない所が妙體で、能にはあるゆる處に此妙所はあるが、さて何處が然うだと云はうとしても的確に攫み得ない。此妙所を持つものは名人であるが、又生得此の面影を初心の時から持て居るものもある。其仕手らは知らぬが、目利が此れを見出し、一般の見衆は唯何となく面白いと見るばかりである。『さあ此處をするぞ』と演者が自覺しないから妙所といふのである。

上述諸種の能柄を識別することによつて其批判の標準を造れといふのが世子の意であるらしい。彼は又批評家に就いて次の如く云て居る。

目利ばかりで能を知らぬ人もあり、能は知つて居るが目の利かぬ者もある。此兩方を兼ね備へた人が善い見手と稱すべきだ上手の不出來と下手の出來とを標準として批判してはならぬ。見物の面白がる樣を心得てする仕手には利益がある。演者の心を知り分けて能を見る見手は、眞に能を理解した見手である。批判に云ふ『てぎはを忘れて、能を見よ。能を忘れて、仕手を見よ。仕手を忘れて心を見よ。心を忘れて能を知れ』と。

此能の字の代に藝とか劇とかの字を置き換ふればよいのである。それに今日とちがつて世子の時代には、演者對見衆の外に專問的批評家があつた譯でないから、右に云ふ批判は一般見衆乃至所謂見巧者か又は演者各自を意味するのであるが、今日の劇評家も此等世子の言を服膺すべきである。

一體劇評家は一方見衆の側に立つて其の代表者となり、且彼等を指導すべき任務をもつて居ると共に、他方俳優に向ては友人として之を補佐し、父兄として之を監督せなければならぬ。いつも親戚故舊の心を有つて彼等に接し、其間に決して敵意があつてはならぬ。今の梅若兄弟が（萬三郎か六郎か何れか忘れたが）まだ若かつた時、熊坂か何かで長刀の使ひ方が拙かつた爲め棒振りだと評されたのを、父實が激怒した事があつた。實生九郎にも是に似たことがあつて大に憤慨し、『それなら評者自身演じて見るがよい』と叫んだ處が、『其の取口を評した爲めに常陸山と取組まねばならぬ義務があるか』とさん〳〵冷評された、此れ等はお互に言分はあるとしても、評者の方に理解と友情とを缺いたことも否定出來まい。

併し又俳優の側から見て、『素人の癖に』の一言で總てを片付けて行く頑冥な樂天家程斯道を毒するものはあるまい。義太夫其他の音曲家には今日まだ大分此類の人が居る樣だが、悲慘なその衰微の狀を見れば思半に過ぎるものがある。幸に我が劇界では東京はもとより、氣の永い此の大阪でも昨今若い人々が新しい時代の空氣に觸れるべく眼覺め、批評家や一般見衆との接觸融合に努めるべく發奮したのについて、我々は衷心から慶

び、且此等の新人諸君にべ意を表するものである。

身を立てんと思はゞ、孝悌の道を先ずべし。祿を求めんと思はゞ、道に適ひたる藝能を勤べし。人の知らずして俸祿を與ふる人なきは、我學文藝能の足らぬ故也と思ひ悲むべし。辱められまじきと思はゞ、禮義を專とし我身を遜り人を尊び人を先にして我身を後にすべし。人の我に隨ふ體なるを見て我を用ゆると思ひ悅びてほこり高ぶるは淺間敷也。人若我事を何にてもうくる樣に見ゆれば、是我を弄ひ物にしてなぶると心得、少しも是に乘るべからず。速なる者は堅からず、早く走るものは跌くものと心得、いつまでも我藝能の熟するを待つ事專要也。園に生る花は早く開けども、又其萎むことも速也。谷に生る松は歲々に伸ること僅なりと雖、雪霜にもいたむことなくして常盤の色をたがへず。

（大藏流狂言十三世彌右衞門虎明遺書—萬治二）

こゝまで書いた時に飛報があつて、成駒屋が三月に梅忠を演ると聞いた。傍に居た人は『又か』と云ふ。併しよく考へると大正以來鴈治郎の忠兵衞は僅かに二回（五年六月、八年二月、十一年正月）である。十數年に三度演じて人から又かと云はれる程深い印象を與へて居つたことになる。忠兵衞の見處としては先づ新町橋の羽織落し、是は何故かまだやつて居ない。茶屋では花道の梶原源太云々から、離座敷の痴話、眼目の封切印に幕切のせかねばならぬ遠い道の悶えまで、磨きに磨き上げ洗練しきつた生粹の大阪藝の標本とも云ふべきものである。是は丁度前に一寸述べた世阿彌の所謂見より出で來る能にあたるもので、始めから『やがて座敷も色めいて、舞歌曲風面白くて、見物の上下感聲を出だして、はで〳〵しく見えたる當座』である世子は猶此れに關し注意して曰く

餘りに能出で來て何とするも面白き程に、見手の心浮立つ所にて、諸人の目心際なくなりて、能少しく紛るゝ相あり。爲手も心逸りして、風情を盡す所にて、見手の心、爲手の心際なくなりて、善き所の境紛れて、能の向きけてうになる方へ行きて、惡くなる相あり。之を能の出來過ぎる病とす。かやうなる時は能を少し控えて、風情粧を少な〳〵と抱へて、見物の人の目心を休めて、際をあらせ、息を吐かせて、面白き所を靜に見すれば、なほ面白き感出で、いよ〳〵能情强になりて番數に從ひて感風盡きすべからず。

流石に名人鴈治郎君は此の邊の呼吸を充分に呑込で居るであらうから、定めて傑作の一記錄を作ることであらう。重次郎、若狹之助、伴右衞門、內藏之助、土屋主稅に實盛などゝ近來標本的作品の續出する折柄、今又こゝに此の封印切を其中に算入し得るに至つたのは、我々歌舞伎愛好者にとつて誠に同慶のことゝ思ふ。

# 『暫』から『勸進帳』へ

入江來布

大阪ではじめての『暫』が、道頓堀に異常な人氣を集めて、一しきり芝居好きはこれ沙汰で持ちきりであつた。これは、大阪に珍らしい歌舞伎十八番ものを見るといふ好奇心に投じただけの事ではなく、永い間、それとは氣付かずに、人々が待つて居た芝居の觸感的部面の而も十分に極度に發展したものに直面したからであらうと思ふ。

大阪の人は、芝居といふと直ぐに『筋』といふことを聯想するほど脚色の修理に重きを置くことに習慣づけられてゐる、以前はそれでもその修理といふものが舞臺の上での修理、卽ち言ひ換へれば芝居らしい修理といふ點で滿足もし陶醉もしてゐたので、まだ〳〵そこに芝居らしいゆとり、卽ち舞臺の上の餘裕が存せられて居たが、それが近頃だん〳〵押し詰つて、その上に、純藝術的脚本の純理的影響とでもいふべきものを受けて、何がなしに理づめに、或ひは哲理があるらしく、また如何にも人間味、人世觀でもあるらしく仕組まれるやうになつて、其結果遂には人々が漸くその自然らしくて、實は核心に無理のかくされた一種の重苦しい暗鬱な芝居に行詰りを覺えて來た、その反動に、全く理窟を拔いた芝居らしい芝居、外形だけ――と言つては語弊があるが、兎も角も形ち、色彩、配合に於て明るくて、華やかで、温かくて、賑かで、さうして大きい舞臺を觀たいといふ欲求が、それと意識されずに人々の胸裡に澎湃して居たのである。恰もよし、さういふ欲求が無意識に漲つてゐる所へ、全くその欲求にぴつたりと合致する『暫』がやつて來たのであるから人氣が一時に湧き立つたのも當然である。

併し、この『暫』も、その濫觴から、今日へまでの沿革をきいて見ると、何回も行き詰つてその度に當季々々の趣向をさし換へ今日の形式のものになつたのであつて、兎も角も、斯ういふ無內容の、色だけ、形だけ、氣分だけで見せやうとする印象的な大舞臺は、立て續けにそれ計りを繰り返すと直ぐ飽きられて了つて、却つて反動を早く招き易い素質を持つて居るものである。

だから、暗い芝居に、ねばり氣の多い芝居に行詰つて、偶々

『誓』の大空のやうな明るさに接した大阪の見物も、若しこの調子に陶醉し過ぎると、又たちまちに、その無内容に物足らなさを感じて今度はまたその反動で、以前以上の濃厚さ、執拗さ暗鬱さに還らうとするかも知れない。斯ういふ時に、意識的にか、無意識的にか知らないけれども、二月興行の『誓』の次へ三月『勸進帳』の出たことは、最も程よい一種の同性的で緩和的な轉換策として要領を得た並べ方と稱してよいと思ふのである。

『勸進帳』は、丁度、右に言つた二つの傾向の兩方の特長をどちらも兼ね備へて、芝居としての色々の要素を一通り抱擁して居て、内容には芝居的修理を持つて居り、形ちの上では明るく華やかな樂劇體を成してゐる、さうして涙もあり、人情味も豐かで、見物をしんみりとさせる力が充分にある、能の本格から來る品位と落ちつきのある一方に、世話に碎けた一面も持つてゐる、さうしてその世話に碎け方が丁度よい程度のところに踏み止まつてゐる、またその歌の詞が見物に親しみが多くて、芝居を見ながら、音樂をきゝながら、見物も一所になつて唄つて居る。この點に於て所謂舞臺と見物との親炙式であり、また樂劇としての要素にも適つてゐる、さうしてその文句にはなか〳〵情味的なものが含まれてゐる。それがまた見物、同時に樂劇中の唱和者を恍惚郷へ誘ひ入れるに充分な魅力をもつて居るのである。『誓』を見て、次ぎに『勸進帳』を見ることは急激な反動を柔らげて、なごやかに次ぎの明るさを待つに相應しい緩和であると思ふのである。

この前、中座で『勸進帳』を見たのは、關東大地震の直ぐあとの大正十三年の一月で、丁度もう四年になる。その時の役割は高麗屋の辨慶に成駒屋の富樫、歌右衛門の判官に、新升、升藏、瓢右衛門、鰕十郎の四天王、箱登羅、齋五郎、錦四郎の番卒といふ顔ぶれであつたが、もうあのじつと落ちついて居た義經の歌右衛門は見る事が出來ない、龜井の六郎であつた新升も鎌倉へ往つて了つた。

『勸進帳』では、無論辨慶が中心であるが、事實それ以上にこの芝居に重要な契機を握つてゐるのは富樫である。辨慶は中軸になつて大きくこの芝居を廻すのであるが、富樫はそこへ能には見ないところの芝居味をさし加へる重要な役目がある、そのさし加へた芝居味の匙加減一つで、芝居の『勸進帳』が能の『安宅』以外の獨自の値打を出すか出さないかゞ決し、まだ辨慶と富樫との意氣がぴつたり合ふか合はぬかゞ決まるのである。辨慶は引つきりなしに次から次へといろ〳〵の型を見せて行く、元祿見得であるとか、不動の見得であるとか、また延年の舞であるとか、本格的に、ぐん〳〵と押して行く、それをじつと見てゐながら、そのきちんときまつた型の展開の中へ、一脈の芝居氣分、言ひ換へると人情味ともいふものを漂はせて行つて、能の『安宅』を芝居の『勸進帳』たらしめるのが富樫の心の配り方にあるのである、だから『勸進帳』を見るには、どうしても富樫役者に大きな注意を拂はねばならぬのである。

されば と謂つて辨慶は型ばかり運べば役目がすみ、人情味が無くても宜しいといふのではない、無論辨慶にも十二分の人情味が必要である、が併し辨慶が型のうちに含蓄すべき人情味と、富樫が所謂『はら』で持つ人情味とは舞台上の約束が全くちがふのであるから、ます〳〵富樫の『はら』といふものがむつかしいのである。見物もこの邊をよく味はふと一層『勸進帳』の舞台が趣味深くなつてくる。

もう一つ見物がそのつもりで味ひたいことは、『勸進帳』にはいろ〳〵の劇的要素が程よく綜合されて居るといふ點である、先づ總體としては基調として能の古典的な味ひを大きく流動させてゐる、さうしてそれに芝居的の人情味をからませてゐる、即ち芝居としての筋がよく通つてゐる、この點が『筋』のない『暫』とは全く趣きを異にしてゐる所である。即ち無理でなしに見物をほろりとさせるものがある。義經の薄倖、辨慶の忠節、富樫の義氣、さういふものが所謂芝居的の感奮興起を無理なく見物に注ぎ入れてくれる、『萎れかゝりし鬼あざみ、霜に露おくばかり』なる辨慶には實際ほろりとせぬ見物はあるまい、此の邊が即ち能の『安宅』を直譯したゞけではない獨自の妙所の存する所である。

次には音樂と舞踊とが這入つてゐる、長唄としての『勸進帳』は素人が考へるほどそんなに重いものぢやありませんとよく玄人は言ふが私はそこがいゝのだと思ふ、それが舞台に活用せられてあれだけ大きくまた見物によく味解される所以だらうと思ふ。それだけに、この味ひを本當に肚に入れて唄へば、長唄の中でも相當に重要なものであるが、技巧の方ばかりに重きを置かるゝ玄人衆には却つて輕んぜらるゝ傾きがある、そこは一つ考へて貰ひたいと思ふ、また素唄ひの場合と芝居の地として其要素となる場合の違いをも考へて貰ひたい。それから舞台に於ても一わたり種々の形相が取り入れられてゐる、大きい型から世話に碎けるまで自由自在に變展して行く、さうしてよく所作事の或るものに見るやうな無理に取つて付けたやうな所がなくて圓滑に推移して行く、この點も見逃せない、即ち樂劇的の味ひを渾和してゐるのである。『勸進帳』は日本樂劇として見て興味を覺えるものがある。歌詞にも『ついに泣かぬ辨慶も』の條りや『鎧にそひし釉袂』のところや『あら恥しの我が心』のあたりなどなか〳〵情味たつぷりである。先づ茲にはさういふ長所を擧げて『勸進帳』禮讃を試みたのであるが、それ等の諸點を味ひながら見物すると一層面白さが加はるだらうと思ふのである。

四年前の時の幸四郎の辨慶は、その以前のときよりも餘程情味が豐富になつたといふ評判であつた、これは丈の練熟と年齡とが恰も辨慶としての好適の『時』となつたからであらうと思ふ。その後四星霜、さらに一層の練熟が加はつた事と思はれるどれほどの圓熟が舞台の上の辨慶に働きかけるであらうか、此の點も氣をつけて味ひたい。

『勸進帳』は、能の直系であるから、それが脫化して『安宅の關』になつたといふ樣にも普通なら思へるが事實はさ、ではなくて、『安宅の關』は近松門左衞門の『粲靜胎内捃』（能の二人靜とは關係なく三人靜の意なりと竹の屋主人の說）の四段目義經道行の條りを脚色したもので『勸進帳』とは全く別の系統のものである。辨慶を中心にこの二つの系統が並び流れて居ることもまた興味あることではないか。

（三年二月）

# 道頓堀見物

山口小豐山

東男の内氣の小生は、餘り遠旅に馴れぬ悲しさ、西の都の大阪へ、商賣冥利に官費の旅行、イヤモウ十年一と昔とは明治時代の詞で當今は一年一と昔の時代とて、花の都の變り果てた事、見る物、聞く物華やかならぬはなく、殊更らに道頓堀の賑やかな事、眼もさむる計りの賑かさ、四座軒を並べて是れが亦皆大入なんざは、さすが芝居國丈けの事あり、なんて決して大阪の芝居道をほめるわけでなく、愚頭から出た眞の告白である。

東京の芝居道に育つた小生等には、咄しに聞いた昔の江戸三座にかくやあらうとつくゞ思ふ事があるのである　草履ばきやくつばきで、その儘芝居に這入つてしまふ東京の劇場と違ひ、昔に變らぬ送り迎いのある奥ゆかしさ、第一前茶屋のあるのが何んといえぬ程心嬉しい、仲居さんに送られて、木戸をくぐる見物衆は、さぞ好い氣持であらうと思ふ、見てゐる小生等は、只人樣の事でも嬉しいのであるから。

辨天座の文樂、大阪名物の一つ丈けあつて、東京では聞かれぬ物である、津太夫氏の美音、聞く度に好い心持ちに成り、歸る家路を忘れる計り、永く〳〵、大阪名物の一つとして置きたいのである。

辨天座を出た小生、千日前の賑さをよそに、角座の新聲劇を見ると大入滿員、金を出して見るなら、無理にでも這入つて見るが、ロハ客では無理にいえず、仕方なく〳〵千日前に足を向けると、是れは亦大いした賑さ、足でもふまれて傷でも拵らへては、生みの親にすまず、小生出勤中の中座の前を素通りに、浪花座に參詣して見れば「後の梅川」の開演中、兩雛段にまします客の美しさ、三月のお雛を見る如く、さすが大阪色街の美人連丈けあつて、身に心もうつとりする計り。

俗に云ふ芝居裏、難波新地を一と廻りすれば、そのなまめかしさ、男と生れた甲斐には、永く〳〵此の大阪の住人と成つて、爰等邊りの御婦人の、情人と成つて暮らしたいなんて、凡人の悲しさに、つまらぬ事を思ひ出し、やうやく中座に樂屋入をする。

總て感心された小生、東京と違つて大阪の方々の行屆いた仕打には、心から感心、せられた、勿論稽古の段取から、初日の整頓した事、責任者の注意の仕方、親切で行き屆いてゐるには驚ろく、白井祐長さんが、舞臺稽古に見物して、某優に一言のセリフの訂正をしてゐた樣だが、その熱心さは又驚く、自然その爲めに、好い芝居を見せられるわけにて、物事は總て斯くありたいと思ふ。

元よりあこがれてゐた大坂も殊に、此の道頓堀の一隅に商賣をして、よるは河向ひに枕を置き、長きねむりにつく等は、有難過ぎて泪がこぼれる、永遠に西の人と成り歡樂の街の道頓堀に夜も晝も暮したいと思ふのである（完）

（中座作者部屋にて）

# 「實盛」と「暫」の印象

## 「實盛」斷想

西田眞三郎

一布引一の實盛物語は全く立派な出來ばえでした。鴈治郎の實盛と聞いたゞけで、その舞臺にあこがれを持つ人々があつたほどなのには、私は驚かされました。見ないで賞める、評判を賞讃する、さうした人々の言葉に私自身もいつしか魅せられて居たやうです。鴈治郎のそれは十九年ぶりのものだと云ひますが、その初演の頃の成績を以つて、今度の再演の前景氣がついた譯でもありましやうが、何んにしても成駒家萬歳の世界です。成駒家至上主義の道頓堀としては、斯らなくては叶ひますまい。

◇◇

一盛綱一一熊谷一一石切梶原一などに左右出來ない定評を持續して來た鴈治郎の時代味に勝つた藝格、一紙治一や一伊左一さては一椀久一が、時代味を基調として世話に溶けて行く實盛の性根にぴつたり合つたことは不思議でも何んでもないことです。實際「適役」の一語で言つてのけられるほどの程度のものでしやう。瀨尾と共に花道から出て來た時の姿態から映發する役者としての貫祿、あれだけでも成駒家連は隨喜します。たゞ歩いて居る姿の立派さ、そこに藝風ばかりでは得られない尊い貫祿の威容が認められます。これあつてこそ此の狂言が見物をして作者のミステイシズムに浸らしめ、喜劇式に惡落ちしないのだとも考えられます。

◇◇

などに見る艶やかた世話味の藝風、この二つの方面が渾然として融け合つた藝境

先月の本誌に長友富田泰彦君が書かれたやうに全く實盛物語は曾我廼家の喜劇です。眞面目に觀て居ることが既に喜劇です。一手孕村と名付くべし」のあたり、一切つたる腕に白旗持たせ、物は試しと接合せ一たりする實盛は考證家でもあり心理學者でもあります。「御臺は產の惱あり」のくだりで實盛が白旗を吊して拜む、太郎吉が產所を覗くあたりなど全く喜劇の場面です。ところが鴈治郎の舞臺は頗る行儀がいゝ。惡ふざけにふざけない、源家興亡の境に立つ別當實盛その人になり終せてゐます。

◇◇

幸四郎の瀨尾、宗十郎の小萬を配して鴈治郎の實盛は恐らく後世の語り草ともなりませう。その型の如何に就いては、前半の時代味、後半の世話味などゝ言ふ概論的な事は申し分はないことですが、物語のくだりなどに扇子使ひの荒さ以外にもつと肚から氣分を表現する手法が幾分工夫される時があらうと思ひます。私の見た時は、個々の役々に就いてさはありませんが、舞臺全體に幾分だれ氣味があつたのは面白くありません。併しこれ以上の「布引」を望むのは慾が深すぎます。私の好き嫌ひから言へば鴈治郎のものとしては「盛綱」や「熊谷」の方を「實盛」より一段上に據えます。

# 『私は暫く考へる』

前田榮三

かなり汚ない色ばかしを交ぜあはせたカーテンが横の方へ入つてしまうと、いやに細長いまげがのつかつてゐる男（新十郎）が口上を申上げるのである、由來日本の殊に大阪の見物が私語をやめるのには相當の時間を要する、もう〳〵とした煙草のけむりとムチャ〳〵と物を食ふ音と話聲と、ETC、

こうした中に口上を申上げる男はいかにも座つてゐるのは足がいたいと下手へ走りこんでしまつた。

で彼が何を云つたのか不幸？にして聞へない間に世界はカツトバックで昔へもどる。何んと云ふエロティックな華かさがあることだ。

そこには巴里の流行のように赤と黑のいゝ調和がある、ロシア踊の金とみどりがある、昔の

日本人の色に對する考へ方はすてきだ（俺のネクタイのこのみよりよつぽどうまい）

×

へそを出してゐる武士が六人ゐる、これ等の人は皆んな仲のよい協定によつて行動を共にしてゐる、中でもナリタロウと云ふ人が首領らしい、亦この人のポーズがよい。

正面に右へよつたり左へよつたり非常な便利な椅子によつてゐる恐ろしく動くことのきらいな人がへそのの主人だ、時々腹を立てると右手のそでをくるりつとまいて變んな顔をする、まるで下手なピアニストのようにすぐ手を下して妙な顔をしてすましてゐるこれも荒事商賣にふんの遠い生れかして見てゐて面倒そうだ、と云へばずらりとならんでゐる各種の人間のサンプルも皆んな俺のせり山はこれだけ俺のアクティングはこれだけと云つた感じが全體にあるのはどうしたものだらう、これは鎌倉君と云ふあの巨人にも少しある。

×

鎌倉君が出て來てからは益々面白くなる、のんきな探偵小説みたいな場面がつゞく、鎌倉君は花道七三に座りこんで幾人かの見物に永い間お尻を見せてお茶をのんだ。

×

「やつとこさですゝみよつた」と云ひながら入つて行く。

×

でいつたい僕は何を書いて來たのか何が云ひたいのか一寸こゝで考へる。

こうした芝居を見せてくれた努力を私は心から喜ぶものです

實盛や心中物を見るより結構です、松竹の宣傳部が實盛を中心にしないで暫をあつと宣傳してほしいと思ひました、（宣傳しなくとも大抵のお客は「暫」を見たさに來てゐるのですが）殊に阪神在住の西洋人等に方法はいくらでもあります、何時でも御相談にのります。

それにつけても大阪の芝居のたてかたにも普選をやつてはいかゞでせう。

×

私は生れて初めて見た「暫」のよい夢をいつまでも頭の中へしまつて置ませう。宗十郎の不思議な髭、權五郎と云ふ世話のやける人間、へそのの親方。其外コスチユームだ

日本の大きな會社の社員はかくあるべしと長い刄で首をころりと落して亦前のカーテンが下りてくると時間外勞働のような形をした巨人が

け氣になつたエキストラの人々よ。と
これでこのキザな文章に自分自身もこまつたものだとピリヨードを打ちます。

# サフイアいろの「暫」

正岡　蓉

大時代のサムライやお姫さまがヨイ〳〵〳〵としめるコ、ロモチ。

鶴ケ岡八幡宮に一大福帳一つて下世話なリズミカルをもつた大衆ノートを奉納しやうといふコ、ロモチ。

「大いなる風呂敷のなかにて暫一とヤナギダルを待つ迄もなく、あの荒唐にして花やかなる一暫一のいでたち。

いや、それよりも「かゝるところへ鎌倉權五郎景政」と凛とした大薩摩のこゑがひゞいて、トタンに、シヤリンと揚幕がしぼられるあのたまゆらの天地渾沌のアトモスフイア。

まことに、金子洋文は、「暫」をみて、あしたのシバヤはかゝるナンセンスからこそ花ひらくと、先年、夙に喝破したがぼくも、先刻、同感！でアル。

なぜならばあの紅白梅の釣枝のあひだへ、表現派の瓦斯燈を配しても、河内家の武衡が大一番のバラソルをさしても、將た又、「大福帳一をカフエーのかきだしに更へたとしても、この一と幕は、默阿彌のバックへ油繪風の繪畫を以てした、ごとき破綻を、毫も、みざるところ、いかに、あしたのナンセンスを、かくじつにとりれてゐるかゞ、わからうぢりやないか。

さらに「毛抜一もよし。
「象曳」もよからむ。
かゝる三升の定紋から、希くは、チヨコレートソーダの泡を噴かしめよ！
ジヤンコクトーの薔薇を咲かせよ！

ニホンに於けるフエツフエル塔の花嫁花婿はじつに、あの、大和やの加茂次郎義綱と、扇雀の桂の前が、春まだ早きおぼろ月夜の密語にこそある！

さうして、腹黒のシヤシン機から飛出すペリカン鳥の代りに我が「しばらく」尊者は江戸隨一市川荒事骨法の大太刀を佩いて、絢やかにも豪然と幻出あらせられたのデアル！！（終）

# 謂ゆる『次の時代』の集りに就て

大西利夫

『次の時代』の集りといふのは會の名が定まつてゐないので私が假にかう名をよんでゐるだけで、この原稿を書く時もまだきまつてゐないのでやはりこの名をよぶ。要するに若い、未成の俳優たちと外部の人がより集つて、互に刺戟しあひ勵みあつて、近くか遠くか、ともかく來るべき時代の準備をしやうといふのが目的で興したのがこの會である。それは別に既成劇壇への叛旗を飜すわけでもなければ、將來に何かの野心をもつわけでもない若い有爲な俳優たちが、時代と沒交渉にたゞぐづ〳〵してゐてはならないといふだけのことで集まつたのであるが、時機が惡かつたのかよかつたのか、この會は意外に世の反響をうけ種々な非難や攻擊や贊助や激勵や、ぶちこはしやら攪亂やらがわれ〳〵の周圍に渦をまく。非難の聲の中には『次の時代』といふ名目が不穩當である。發起人の顏ぶれにある種の色彩がある。會員の範圍が曖昧である。誰それに案内狀が來て誰それに案内狀が來ない。といつたやうなことを隨所できくのであるが、發起人の一人として私が自ら責任を感じる事も少くない。これらの非難は實は見方考へ方によつてはまことに御尤もなことで、次の時代云々は今ものべた通り暫定的なもので深い意味はないのであるからいくらも辯解の言葉はあるが、その他の事については私自身もいろ〳〵な手落はみとめる。何分草創の際で混雜したと簡單にあやまつてすませてしまへる事もあるが、一寸すませにくい點もないではない。然し唯諸君に諒解してもらひたい事は、この會は決して個人のある野心を滿足させるために出來たものではない事である。この會を何かに利用しやうと思ふ人があつても、われ〳〵は斷じてうけ入れないつもりである。私をはじめ俳優は松竹專屬であり白井松竹社長自ら發起人の一人ではあるが、これは決して松竹の會ではない。松竹には私よりも先輩の大森痴雪君や食滿南北君、日比繁治郎君等關西劇壇の事情に通じた諸君がゐるに拘らず、われ〳〵は故意に發起人の連名からオミットした。それは松竹といふ色彩をどうにかして薄くしやうとするつまらない憚りからで、私個人としてはまことに相すまぬ思をしてゐる。それから、毎日の高原君朝日の松本君、時事の京極君等も發起人であるが、それらの人々は各々の所屬の新聞に一行だつてこの會の提灯をもつてくれたことはない。無論この三人の諸君は將來この會のために盡力される筈であるが、われ〳〵はその新聞が特に好意をもつて俳優の提灯もちをしてくれるとは信じない。公人としての三君は嚴正批判の下には、この會の俳優といへども假借もなくやつつけるだらう。或は一歩進んでこの會員を愛するがために一層こ

つびどくやつつけるかも知れない。その點では寧ろ大阪夕刊の野村氏に感謝する。發會の時の麗々とした記事を見た人は、氏が發起人でない事を怪むだらうか。京極、松本、高原の三君にしても、もしこの會の發起人でなかつたならば、或は當夜の會合について二行や三行の報道を紙面にのせてくれたと信ずる。もしわれ〳〵にある職業意識があつて三君を發起人に加へたのであつたならば、それは恐らく拙の拙なる策ではあるまいか、

それから坪内、豐岡兩君が連名に入つてゐるについて寶塚色彩が云爲せられ、可なり進んだ臆說まで噂の種をまいてゐるやうであるが、そこまでいはれるともはや辯解の言葉はない。兩君の心事まで私の保證の限りではない。唯私たちはこの會をさうした野心をもつて相談しあつたものでない事を堅く信じて疑はないだけである。

かくのべて來て、さて當初の發起人の連名を改めて見渡して見ると、なるほど、發起人として名を連ぬべき人でもれてゐる人々が少くないのに氣がつく、種々な非難や攻擊は要するに名をつらねた人とつらねない人との比較研究によつて起るものと思はれるが、われ〳〵は最初發起人といふ名を、そんな大したものに思つてゐなかつた、單に讀んで字の如き世話方位の輕い意味に取り扱つて、なるべく少數にすることを心がけたのが却つて失敗であつた。やはり世の中は株式募集や寄附金募集のやうに、有名の人を網羅し、發起人で足りなければ贊助人の名でも並べたてた方が無難であつたかも知れない。それだけに眞面目さに缺けてゐると思つたのが却つて物議の種になつたのかも知れない。

案内狀にもれのあつた事には謝罪すべき言葉もない。出したつもりが出てゐず、出さなくてもいゝ所へ出てゐたりして、いろ〳〵誤解をうけた不統一な一例には、案内狀發送に立ちあつてゐた坪内氏の所へ、わざわざその案内狀が屆いて出席の返事をもらつたので木谷氏があつけにとられた事がある。次回から精々注意するつもりである。

ともかく草創の時で、いろ〳〵手落もあり缺點もあらうと思ふが、この際すべての事を水に流して虛心坦懷に將來の關西劇壇のために、これら二代目の人たちを指導していたゞきたいと私は衷心より希望する。この會が生れて唯一の大收穫は、それら若い俳優がほんとうに目ざめやうとしてゐる傾向があり〳〵とわかることである。發會當夜の光景を見られた諸君は御承知でもあらうが、高砂家の御曹子政治郎等は受付に座らされて會費の徵收役を受もつてゐた松島家の御曹子ひとしは食堂に出張してボーイの手傳にパン運びをやつてゐた。事はつまらないが從來の大阪の俳優生活から見れば破天荒な事實である。而もそれを誰が命じたわけでもなく皆自發的にやつた事なのである。しかのみならず、當夜の會合に異常な刺戟をうけた俳優たちは翌々日午前十時から浪花座に集まつて今後の方針について會議を開いたものだ。さうして將來の團結と會員の情誼について堅い決議をしてしまつた。最近の面白い事實は、會員の一人である市川市昇が中座出演中に病氣で倒れた、すると彼等は一人各金廿五錢づゝをもちよつて、俳優側會員總數二十名合計大枚金

五圓也の商品切手を當番幹事中村鴈之助にもたせて見舞につかはした。かういふ事は未だ曾てない事なのであるといへば、彼等の俳優生活なるものがどんなものであるかといふことが略ほ想像出來やうと思ふ。彼等はかくして金廿五錢といふ端た錢が如何に貴く淸く美しく使へるかを知つたやうでもある。われわれの集りはこれで、俳優の生活改善の第一歩を最も有意義に導くことが出來たと信ずる。

かうした若い俳優たちの感激にみちた心もちを、どうかすなほにうけ入れてやつていたゞきたい。われ〳〵はお互に自分たちの勢力爭ひや權威くらべをしてゐる時ではない。將來の劇壇といふものに注目される諸君は、勢こんで飛びこんでくるとり的の頭突を受ける横綱の胸であつてほしいと思ふ。

今日のところで私の最も憂ふる所は、これら若い人々の心に若氣にありがちな無意義な叛逆精神を煽るやうなことになりはすまいかといふ事である。內容よりも形式にかぶれ、徒らに自負の念ばかりが募つて、禮儀を亂り大綱の順逆をあやまるやうなことになつては謂ゆる『次の時代』は滅裂である。それを正しく進ますも邪く陷れるも、一に外部の誘導にまたなければならない事で、折角諸君の御援助を切望する次第である。

（三、二、一九稿）

## 中座彌生興行

中座彌生興行は如月興行より打越の東四大歌舞伎にて、一番目『加賀見山蔦錦繪』花見より奥庭まで四幕、歌舞伎十八番の內『勸進帳』長唄囃連中、淨瑠璃『釣女』常盤津連中二番目『戀飛脚大和往來』封印切、大喜利『乘合船惠方萬歲』常盤津連中、等の稀らしい名狂言揃ひである。その總配役は次の如くである。

富樫左衞門、龜屋忠兵衞（鴈治郎）中老尼上源判官義經、井筒屋おゑん、通人壽仙（福助）大名菜（右團次）谷澤求女、醜女、大工蝶五郎（長三郎）伊勢三郎、船頭德松（政治郎）奥女中桐島、仲居おまさ（成笑）奥女中淺野、仲居おたま（成三郎）奥女中早蕨、仲居おしづ（雀）奥女中撫子、遊女鳴渡瀨（扇）太刀持、遊女喜代川（鴈之助 早枝、龜井六郎、子守お安（吉三郎）槌屋梅川、白酒屋榮吉（魁車）舞妓蔦千代（達雄）大盡猪山（卯十郎）丁稚政吉（政男）關路、仲居おまつ（福万壽）奥女中さつき、大鼓持富八（市昇）町人八兵衞、太鼓持哥女八（右左治）奥女中七浦、太鼓持鶴八（右文治）忍び源吾（齋五郎）番卒軍內、肝入由兵衞（箱登羅）奴江戸平、丹波屋八右衞門（市藏）○召使お初太郎冠者、才藏龜藏（宗十郎）天城軍次兵衞、常陸坊海尊（鰕十郎）上萬、鬱者喜の路（訥升）醫者蓑仙（連舍）奴可久（金五郎）太鼓持長八（淀五郎）奥女中柏木（宇十郎）伏屋（小主水）梅ケ枝（三四郎）太鼓持安八（大七）番卒源內（錦四郎）番卒兵內（升藏）大姫君、片岡八郎、角兵衞獅子（金太郎）平島主稅（扇雀）局岩藤、武藏坊辨慶、槌屋治右衞門、萬歲鶴太夫（幸四郎）

# 菊吾の鏡獅子

S H 生

所屬の樂劇部の他に松竹座ではこれまで可なりいろ〳〵のものを上演して來た。築地小劇場、人形座その他の試演外國人の演技等數へれば隨分多種多樣で近頃亞米利加にかういふ傾向があるといふ。これには映畫ファンの間にいろ〳〵議論があるやうであるが、何にしても一流の映畫を見た上に、特種な場合でなければ見られない之れ等の諸種の演技が紹介されることは惡くはないわけで時間經濟の上から云つても一舉兩得である。こんどの菊吾の鏡獅子の如きもそれだ、一藝妓の舞踊をかうした處へ上演するといふことには可なりに議論もあつたやうであるが松竹座としてもそれ等の紛々たる議論を一切排除して特種な技藝の紹介として敢然としてこれを決行した。また一方菊吾自身としても可なりに煩さい廓のうちの情弊に打ち勝つて聊か健康を損じながらも慣れない大衆對手の舞臺に立つて堂々勤め終せたばかりか引續き神戸名古屋京都の四週間六十回に近い舞臺を勤めることになつてゐるこのことに終始介在してゐた松竹衣裳部長の福井氏は本筋の藝術家も及ばない菊吾の熱心と勇敢さにはほと〳〵動かされたと云つてゐた。

# 盲目の垣のぞき

坪内士行

何も分らずに物を言ふのは盲目の垣のぞきだ。けれども、盲目は蛇におぢない無禮も見當違ひも眞平御免と、まづのつけからお斷り。

課せられた題は「劇評家と俳優」ところが小生、劇評家にも俳優にも、一面の知り合ひは多いながら、垣のぞき以上には一向に深い知り合ひがない。その癖自分自身は、時に俳優の鑑札も受けたし、時に劇評の眞似もする。つひ先日も初めてドクトル荒川氏にお目にかゝつて、昔々學生であつた頃、同氏と故宗之助とが英語で「ジユリヤス・シーザー」を演ぜられたのを散々に批評した文を早稲田文學に載せて貰つた事を思ひ出し「あれが俺の劇評の處女發表であつたわい」などゝ考へながら、荒川氏の白髪を見詰めたものであつたが、然し、この兩刀使ひ亦所謂盲目蛇で、人をおそれない事夥しい物であつたのだ（その代り、人も亦恐れない事甚しい物であつたが）

さう云ふわけで、深くも仕らず、深くも知らね劇評家と俳優とについて、兎に角に筆を取り上げたのは、特に大阪の俳優諸君をけしかけたいからに外ならない東京の雜誌から賴まれたのならこんな事は書くまいが。

元來劇評家の仕事と云ふものは、俳優の藝が砂上の文字の如きと同樣以上に、誠に泡沫の如くにはかなくも賴りないものだ。或米人は「劇評家は自分の見た劇

# 鬘の研究

濱川春江

演劇の進歩、それは私が爰に事新らしく申上げる迄にない事であり升が、觀客眼の向上されて來た事も、驚ろく計りで御座い升が、それ丈けに俳優の演出方法、又は演出補助員の苦心と云う物は、並一通りではなく成つて來ました。

今爰に申上げ樣とする苦心談は、觀客の眼に映じない影の人達の苦心を書こうと云ふのです

先ず最初「鬘」の部から書きませう、觀客が俳優の天窓を見て、形の好い鬘だ、好い鬘だと云われる迄には、鬘屋や、鬘を結い上げる床山師に、どれ位いの苦心が忍ばれているか分りません、一體鬘の毛と云う物は、日本毛と唐毛と二種あつて、總て人髮なのです、唐毛といへば支那人の毛で、是れは多く鬼女の樣な長毛の鬘に用ゆるので、日本毛は普通鬘に用います、此の唐毛は多く支那人の手から買入れるのです、日本毛はすき毛より取るのですが、大阪川口邊か、神戸方面で買ふのが一番安いのです、ですからわざ〳〵東京から買入に來る位いです、たばに成つてゐるのと、皮にはり付けてあるのとあります、それをアンペラに一と包みとして買

について記述する事と、脚本の內容と技巧とを論ずる事と、その劇が見物に與へた印象を記す事と、俳優の技巧を論ずる事との四つ」を指摘した由であるが、第一の、劇の筋を記す、卽、所謂「見たまゝ記」を書く點と、第二の脚本の內容についての批評とを除けば、その時々に消えてなくなる物を相手に論じてゐるわけで、浮世の讀者には殆ど何の印象も影響も與へかねる一時的の批評であり勝ちだ。ペピーの日記やラムやアーチャーの劇評が有名であつても、三木竹二や竹の屋主人の劇評が藝術的であつても、何分相手はもう見る事の出來ぬ俳優なのだから、「はゝあゝ、さうかいな」と思ふだけで、又、斷片的の智識をうる足しにはなつても、一向深い感銘は起らない。そこで兎角近頃の野心ある劇評家は、脚本中心に／＼と突入する。が、これは又文學論になり勝ちで、演劇評でなくなる場合が生ずるかう云ふ劇評の流行した當時、故東儀鐵笛がどうも近頃の劇評家てものはひどい手合が多い。役者のやの字も書かない。劇評をしながら俳優を評しない位なら芝居へ來ない方がいゝ」と憤慨してゐた事があつた。一理はある。が、全く劇評家と云ふものは、完全な劇評家になる事がむづかしいのは勿論であるが、なつても頗るたよりない仕事だから、いよ／＼いゝ劇評家たらんと志す人が少くない第一專門的劇評家であるだけでは中々生活が容易ではない。此處に劇評家に對して世間や俳優側からの攻擊の矢が向けられる弱點は生ずる。

俳優側から劇評家を見ると、（小生だけの憶測であるが）專門劇評家は何のために存在するのか分らぬ場合が非常に多からうと思ふ。と云ふのは、常識判斷からの批評ならば一般見物からの評を統計的に取つた方が餘程參考になるであらうし專門的技術方面からの批評ならば先輩俳優や同輩からの注意の方がずつと有益であらう。脚本の解釋ならば、直接作者から聞くのが遙に早手廻しであるし、演出監督のゐる場合は勿論それに從へばよい、と云ふ次第。自然「劇評家さんたら云ふ方々は、樂屋へ來てガヤ／＼やかましい事を云ふて、そいで御機嫌取らんといれるのです、日本毛は中々安くない物で、一貫目七八十圓位するのです。

大阪では、「かつら清、かつら福」と鬘屋さんがありますが、先づ鬘は何んと云つても東京の「大勝」には及ばない樣です、日本一といつても恥じない事と思ひます、此の大勝で一年に用ゆる毛髮は實に大いした物です、此の毛髮が幾十邊の他の鬘から鬘へと、用ゐられる物であり、せい〳〵二度か三度位いしか用ゐられないのです、それ丈けに鬘では毛髮を大事にする事は並一と通りではありません、一度使用した毛は又元の樣に拔き取つて、よく清洗して日光にあて、再度用ゆる樣にするのです。

さて此の人髮を買入ますと、白毛、赤毛、黑毛、ごま毛等と、よりわけて、一とたばにするのです、いよ／＼狂言も極まり、俳優の役々が極まり升と、作者部屋から附帳と申して、役人替名並に注文を書入れた帳簿を受けとり、それに依つて俳優の頭に、地金を合せるのです、此の地金と云うのは銅製で極くうすく出來てゐて俳優の頭の大小に依つてその頭の形ち通りに地金合してしまふのです、そうして此の地金を鬘屋に持つ歸り、今一度吹き直して形を直しますで是れが仕上ると黑うるしを塗つて火にかけ燒くのです、此の出來上つた地金に、羽二重に毛

たら、新聞で敵取りやはる」者式に見てしまふらしい。流石に昨今はさうではないと思ふが、一時は確にそうであつた。かう云ふ俳優側の僻見を正してやると云ふ事も今の劇評家の責任の一つになつてゐる。勿論今までにとても俳優が信賴する劇評家は多くあつた。故人での代表者は前の三木、饗庭の二人の如きであるが此の二人には進取的な、アップ・ツー・デートな所が少なかつた。まして將來に向つて俳優を指導して行くと云ふ覇氣はなかつた。これからの劇評家は日本の過去や現在を知つてゐるだけでは駄目だ。日本と外國とが距離に於て驚くべく接近して來た近日、外國の過去現在、そして日本の將來を常に考へてゐるのでなくては、指南車的の劇評家として重きをなす事はむつかしからう。

それについては新聞社に向けての垣のぞき式注文がある。聞く所によると（東京は知らず）大阪の各新聞社が劇評家を遇する事は甚だ薄いそうである。その上「惡口を書くと廣告がとれないから」など、云ふ理由の下に、俳優や劇場に對する批評の筆を社の會計方面の人から拘束される事もあるとか。これはもつての外で、昭和の今日、もうそんな事はあるまいと思ふが、こいつは是非ともやめなきやならん又、いやしくも劇評家を置く以上は、劇評家としての體面を保ちうる程度の待遇をするのも、これも當然な事であらう。近頃のカフエーの女給ぢやあるまいし、チツプ目あてゞ動かせるやうな新聞社があるとすれば「その新聞社よ、呪ひあれ！」だ

さてかう盲目滅法に云つておいて、或大阪の俳優が「人樣の批評はつとめて受入れるが、十人十色で、どれを受入れていゝのか取捨選擇に迷ふ」と嘆いてゐるのを聞いた事がある。大阪の劇界が振はないのにさま〴〵の原因や理由はあらうが、俳優の自覺が驚くべき程足らないと云ふ事は、不振の最も大きい原因の一つだと思ふ。左右を見過ぎると云ふよりは、どちらを向いていゝか分らぬ風の俳優が多いらしい。あにそれ慨嘆せざらんと欲するもうべけんや、だ。技術に於ては

の通つているのを「アマノリ」と申すのりで、地金を張りつけるのですが、羽二重に毛を通すと云ふのは、五本位ゐの針で、羽二重の糸目々々に毛髪をさし入れるのです、又みの毛と云つて、羽二重に縫いつけるのもあるのですが、中々是れには、方式作法のある物です。

鬼女の樣な長毛は、頭丈けの分を作り、下方の分は紺甲裏絹に（赤は黑ちりめん）みの毛を段々と縫ゐつけるのです、前に申た樣に、羽二重に毛をさし入れたのは、多くピンの樣な所に用ゆるので、みの毛と申すのは、髪總ての所に用ゐるわけなのです、然し此の毛髪に、赤、白、黑等と色々ある事なので、赤の長毛等に用ゆる赤毛は、その染方に一通や二通りの苦心でなく、大勝邊りでも、此の染方は絶體藥名、並に染料の原料等は秘密にしてゐる位で、此の染方一とつで髪屋の腕前の好揃が分るわけなのです

亦盛綱の樣な役の髪は、ラシヤ張りといつて地金が出來上ると、ラシヤを張りつけるのですがこうして簡單に申上げると、わけなゐのですが、狂言の極りがおそく、その爲めに注文帳の附帳の出るのがおそく成つた場合など、髪屋の苦心と云う物は並一と通りではありません。

此の髪屋で大略の物が出來上り升ると、床山師と云ふ人達の所に、此の髪が廻つて來るので

左團次や六代目や猿之助や勘彌に劣らぬ者がゐるに拘らず、その氣慨、その自覺に至つては到底比較にならぬらしいのは惜しんでも餘りある。延若など覇氣はあり餘る程あると聞くが、恐らくその覇氣は「ハキ違ヒ」のハキではあるまいか。ウンと技術を練り、ウンと新智識を蓄へて、批評の善惡、忠告の取捨選擇に對して一家の見識を保つ所まで藝術家としての根本素養をつくつて貰ひたい。さうすれば、自然周圍に集る友人や贔負の種類も違つて來ようし、片々たる劇評は齒牙にかけずに置いても自ら光りを放ちうるに相違ない。その當然の結果としては、在來のいかさはしい劇評家を恐れ敬遠してゐたとは反對に、今の正しい劇評家とうちとけた友人となり、その人々等の鼻息を窺ふ代りに、その人々等と腹藏ない意見をたゝかはしうる事になる筈だ。劇評家と俳優は最も親しく有益な相互扶助の關係にある朋友であるべきだ。

ついでながら書くが、近頃は劇評の形式もさま〴〵新しい方法が試みられてゐるが、前に云つた小生が「ジユリヤス・シーザー」に試みた樣な讀み物式の劇評もあつていゝと思ふが如何？これは多少紙面はふさぐかも知れぬが、その夜の見物の氣分なり、時にはその細い樣子まで「ホトヽギス」一派式の寫生をして、主觀的批評と入交へて劇評をすゝめて行くやり方で、始終その式ばかりでも閉口するが、たまには又、人さへうれば、例の「浮世風呂」や「浮世床」風の讀み物としても面白がられはすまいかと思ふ。これは劇評家達へ直接によりは、新聞社の主腦者に申したい事なのだ。もつともそんな人達は、こんな文などは讀みはすまい。垣のぞきの文、遂に書き棄ての文となるか、嗚呼。

---

すが、此の床山師の腕の好拙でその鬘の好拙が分明すると云うわけで、責任は床山師にあるのです、その爲めに自然幹部俳優は、腕のよい床山師を自分專用にしてゐるので、大阪に於ける龜井、東京に於ける江波（梅幸）、（宗十郎付）井川（幸四郎付）等は先づ床山師でも代表的の腕の持主でせう。

さてこの鬘を受取つた床山師は、俳優の役々に依てその鬘の形を仕上げるのですが、先月中座で幸四郎が演じた暫の鬘の如き、あれ迄に仕上げるのは餘程の苦心がいつてゐるのです、普通は「みなが」らと云つて、壘に用ゆる「ワラ」を油で形めて、車の形を作るのですけれども、今度は幸四郎丈の注文で、全部を張り子にして拵しらへたのです、亦侍役や町人役其他の鬘は、燒きごてを以て毛髮のくせを直し、追ゐ〴〵に作るのでありますが、これにつゐて面白い話しがあるのです。

私の知人の藝妓が、芝居樂屋見物の折に、床山師の部屋に立寄つて見ると、今云ふ燒ごてゞクセ毛を直してゐた物です、是れを見た藝妓は自分のクセ毛を直す心で、自宅に歸つて燒ごてを持つてクセを直した物です、所がそばから毛髮が根元から切れて、丸坊主と成つてしまつたので驚いてしまつたのですが、死毛と生毛と違

# 劇評家の立場

中井浩水

◇「劇評家の立場」について書けとある、よろしい書かう、その代り四角張つたことの大嫌ひな私にキチンとお行儀をよくしろなどと云はれては困る、第一に膝を崩しての話を許して貰ひ度い。

◇劇評家にもいろ〳〵ある、私は新聞記者である、自分の新聞に毎月所見の芝居の印象をのせてゐる、他所さまは知らず、私の此の印象記は第一が讀者の爲めである。讀者には高級な人達もあらうが、ルビを辿つてよむ女中や下ざまの者も多い、片假名澤山の名評などよりもよんで解り易くてはならない。

◇「今度の芝居はどこが面白いやろ、新聞にどない書いたある」と新聞の評を目安にする御寮人もある。この種の人は大阪にまだ〳〵澤山ある。堅苦しい理屈ぬきで紹介の意味をむねとする。紹介は提灯ではない、松竹案内所のお先きを勤めるのでもなく、松竹宣傳部の通信のお取次ぎをするのでもない。

◇下らないものを下らなしとし、面白きを面白しとなす、わかり易い手引索である、文藝附錄とか何とか廣い欄を貰つていくら長々と書いても好い頁があるのではなく、三面講談下の趣味欄の一部、せい〳〵が四五十行どまり、こんなものを書いてゐる私が果してその如き劇評家であるか我れ乍ら心細い。

◇だから劇評もやつてゐる一新聞記者の偶語として聞いていたゞき度い、況んや興行主を提醒し、俳優を敎へ、脚本をあげつらひ、舞臺裝置がどうのと高漫な

ふのを知らなかつたので、決して燒ごて等を用ゆる物ではないと思います。

そんなわけで、床山師にはこては大事の品なのです、こうして毛並を直して結上げるのですが、是れからが中々の苦心なので、床山師の尤も苦心を用する、角力、だるま返し、しゐたけたぼの文金、車びん、角前髮等と云う結方と成ると年功者でなければ出來ない物なのです。

床山師の座右には、必らず坊主といつて、木製の頭形の物があつて、是れに鬘をのせて、結ゐ上げるわけなのですから、此の坊主は又大事の品なのです、元結、すき油等はどれ位ゐ用ゆるでせうか、江波氏の談に寄ると、床山に元結と、古き油の使用高がわかれば、金が出來るわけですと云つてゐる位で、是れを見ても隨分使用する事がわかりませう、鬘の結上げるは、丸ですき油でかためて仕まふといつてもいゝ位なのですから、油の使用はたいした物です。

只こんな事を申上げると、一朝にして鬘は出來上ると思召すでせうが、前にも云う通り、狂言極りがおそい事や、鬘屋の手違い等があると自然鬘が床山師の手元に廻るのがおくれるわけで、その場合には、夜通し掛つて仕事をするなんて云う事もあるのです、又れらの理由から、幕にさわつて、開幕かおくれ、幕間は延びる、

ことを云ふ柄ではない。

◇いつだつたか某會席上で鴈治郎が私を指し高安博士に曰く「このお方は常は好え人やけど筆を持たせると憎くたらしいことを書やはります」、憎くらしいやうなことを私は書いた記憶がない、そこは八方の成駒家だから何かの愛想か洒落でいつたのかも知れない――が劇評家と俳優との間についてこんな思ひ出も湧く

◇俳優のうちには新聞の劇評をよんで「新聞屋が何を知つて素人の癖に」とせゝら笑ふものもある、「何んぞ怒つてはんねやろ」と氣にするものもある「あの人は△△家がヒイキやよつて褒めてはる」等々、これは俳優と劇評とのみには限るまい、藝術に於いても創作に於いても作家が批評に對する明々白々な眞情はかうした感情が心のどこかの隅には低迷してゐるべき筈だ。

◇仕事の上からわれ〳〵は俳優諸君と心安くなる、十年二十年この仕事をしてゐる間柄から友人のやうに親しい人もあれば顔馴染も多い、いくら親しい人でもその舞臺は別である。拙い藝を見せる時は拙いに相違ない、物さへ云つたことのない、筆生はいけすかない男でもうまい芝居をやれば引付けられる、心安い間柄だから屹度ほめてくれるものと思つてゐられては迷惑する。「中にはそないにいかん處があるなら書かずに云うてくれはつたらよろしいのに」と怨ずる人もある書くのは職業だ仕方がない。

◇俳優にしても劇評をよんで大いに辯じ度い場合もあらう、評す者と評さるゝ者とが互ひに思ふ處を云ひ合ふも亦一興だ、劇評家を見れば「先生」などと立てごかしにして陽に尊敬し陰に「素人の癖に――」を繰返し、褒めてくれる時は「好え人」で貶された時はほろくそに云はれ、恨まれては劇評家も助からない、さうして俳優それ自身も救はれない、淨土双六ではないが「永沈」である。

◇「次の時代の會」といふのが先般堂ビルで催された、私はやむを得ぬ用向きで缺席したが主旨は双手をあげて賛成し心竊かにその壽命を危ぶんだ、なぜかと

---

觀客は知らぬ所から、ヤイ〳〵申される樣ですけれ共、樂屋内は又一と通りのさわぎではありません、今日餘りこうした事はない樣ですけれども、今云う手違いから、絶體ないとは申されないのです。

初日が出てから、俳優に氣に入らねば、又結ゐ直さねば成らず、それも侍役か町人の鬘ならわけもなく出來上りますけれども、六ケ敷い役と成ると又一と苦勞なのです、普通鬘は、毎日水ばけといつて、結上つてゐる鬘に、ほけに水を付け、なでつけて置きますが、それでも三日目か、四日目には必らず結直すわけです、それは俗に云ふ下廻りの鬘はいざ知らず、幹部連の鬘は必らずそうするのです。

只一と口に、あの鬘は好いの、惡るいのと申され升が、觀客の眼に映ずる迄には、中々に苦心が忍ばれてゐるのです。

今回は鬘屋さんの方に重きを置きましたが、號を改めて床山師の結上げの順序や、鬘名を申上げると致しませう。

（二月十八日稿）

云へば大阪でこれ迄俳優を何とかしようとする會はいくらも出來たが大抵夭折してゐる、もう一度なぜだらうと考へて見ると「覺め」「新らしかれ」と有識者が青筋を立てゝも月に一度位の注射では迚も奏効が覺束ない。

◇門閥の光り、特殊な階級制度、壓迫さるゝ生活狀態が常に若い優人の魂を舞臺の内外で脅やかしつゞけてゐる、或は覺め、或は新らしがつてゐては自然他との折合ひが六ケ敷くなる、世間が狹くなる、果ては口が干あがつて仕舞ふ「よろしい、もし君達が喰へなくなつたらこちらで喰はせてやらう、小遣ひもやらう」と云ふ人が出現すればともかく、議論や理屈だけでは腹が大きくならない。

◇古語に曰く――古語どうだか知らぬが「爲さざるに勝る」利くとか利かぬとかいふ藥の注射も根仕事にしてゐるといつかは利いてくる、外から覺めよ、新らしかれの叫びも長い間には自然と若い優人達の腹にこたへてくるの日もあらう。「爲さざるに勝る」しつかりやつて下さい、人間は老少不常だ、夭折するものもあらうが又中には長生きするものもある。

◇今の若い俳優諸君は頭髮もハイカラである、新らしい雜誌もよんでゐる、バーへも行く、酒落れた洋服も着てゐる。一とかどのモボに見える、――見える丈けではチト困る、若い文七とも好んでおつきあひをする、それで覺め、それで新らしければ世話はない。

◇餘談に亘つた、エヽとそこで新聞記者ほど分の惡い商賣はない、遊びに行くとする、少々モテる、その時「この人は△△新聞の人やで」と人の惡い奴が云ひ出すと俄然形勢一變、藝者は忽ち口を噤んで警戒する。心安い俳優と飯をくひに行く、會計一切こちらで支辨して痛い腹を切つてゐても「あの男は俳優に買收された」などといふ奴もある。阿呆臭くなつて仕舞ふ。

◇氣を廻された上に素人が何を知つてと罵られては立つ瀨がない、思ふ方は勝手である。又興行主に對してわれ〳〵は口を酸ぱくするほどにいろんな註文も述

## 八十助丈歡迎句會

（二月二十日夜、新戎橋畔にて）

二月の中座に坂東八十助丈はお父さんの三津五郎丈と共に二年ぶりの顏を見せた、二年前、丈を櫻の宮の畔に迎へて一夕句座を開いて霜夜の感を身にしめた、同好たちは今度また道頓堀の畔朧ろの彩燈を映じた水に八十助丈と竹柴二朔子とを客として會離の思ひを漂はせつゝ二月二十二日の一夜を句作に耽つた。「柳」の題を課し、また維吟を咏じ合せた。（入江來布記）

### 句

わびしさは畫の廊の柳哉　八十助
青柳や釣糸見つめ疏水番　同
文樂の返り初日や春の雨　同
吉田屋の疊廊下や空火桶　同

堂島川

朝霧や灯つけたる河蒸汽　同
夜着きし溫泉町の柳かな　二朔
糸柳に女わびしき眞晝哉　同

た、けれども興行は商賣だ、「損をしたらどうしなはる」と云はれるとその損を引受けますやらおやりなさいとは云へぬ。

◇好いものが果して儲かるか、一流役者の生きた番附のやうな芝居が當るか、そこが水ものである、興行主は思ふ通りやるが好い、こちらは相變らず口を酸ぱくしやう。俳優諸君は覺めようと又眠り直さうと勝手である。こちらには最屆もない、親疎もない、心の鏡に映ずるまゝを讀者に紹介するまでゝある——所謂劇評家にかくあれといふのではない一新聞記者の私としての立場をお答へしただけのこと。

# 私の見た劇評

片岡我童

俳優の立場から劇評に對する感想を述べよとの御注文ですが、餘程前でした、新聞の劇評に對する俳優側の評論集を例へ不定期にでもいゝ刊行仕樣といふ計畫があつた位ですから、劇評、殊に新聞の劇評は私達舞臺に勤めるものにとつて、可成力强い味方であり、又或る時は隨分苦手の敵であるわけです。

先般も「次の時代」といふ會が大江ビルで催ほされ關西の劇文壇の方々を始め各新聞社の方など集まつて、演劇に關する意見の交換會のやうな事が行はれましたが、その席で坪内（士行）さんの「關西の俳優は餘りに新聞社を怖れ過ぎる」といふ意味の御意見に對し新聞社側の一部の方應戰で、激論を闘はされましたが

春の日の三味線箱のほこり哉　同
牛乳の瓶にも霧の氣配哉　同

## 八十助丈歡迎

名をしるのみなりしを遇ひき春寒に　竹路
頃そろ〳〵人のゆきゝの柳哉　同
道頓堀柳四五木の餘寒かな　同
柳長く垂れてゐるなり夜の水　蘇風
春なれや淡き柳を門にして　同
柳いづこ二月の空の美しき　同
春の雪思ひのまゝにゐる夜哉　露舟
暮ぬくゝ月の柳に田の青み　同
枯れ小木は芒交りや木瓜の花　同
靜けさは眼白來てゐる梅の花　同
春寒く夜色に遠き水田かな　一汀
春といふを忘れたやうに柳哉　同
日ざすかと思ふ柳にしぐれけり　同
麥一寸よごれた雪の小寒さよ　同
桑畑へ出るに初めて陽炎へり　卷石
むらさきに湖邊の町の柳哉　同
宗右衛門町夜のそうて來し柳哉　同
やなぎ〳〵雛の祭りの近づけり　同
田の舟の通りしあとの柳かな　同

強ち私達が新聞社を怖れるといふわけでもありませんが、場合に依つて新聞記事が作る虚構？の輿論には隨分惱まされます、そんな場合實際に芝居を見て下すつた方には、その虚實の程も判つていたゞけますが、そんな人々より芝居を見ないで新聞の評判記を賴りにする人達の方が何十倍も幾百倍も多いんですからね。

九代目團十郎さんは何時も「新聞の劇評には頓着せず演るだけの事を一生懸命に演れ」と云つてゐましたが、幾等氣にすまいとしても、餘りに見當脫れの事を書かれると、なか〳〵平氣でも居られません、隨分馬鹿にされた樣な氣持になる事もあります、そんな時に舞臺に出ても好くやれるものぢやありませんから、劇評は何時も、その興行がすんでから纒めて目を通す事にして居ます、極めて眞面目に見て居て下すつて、眞劍にその可否を指摘して戴けば、非常に參考になるんですが、どうもさうしたものが少なく酷いものになると、何時の日の、何の狂言で、誰それは西棧敷とか東棧敷ばかり見てゐたとか、あくびをしたとかといふ樣な種類のものをよく見ますが、劇評もこれまでになれば、遠つくに人身攻擊の域を通り越して、馬鹿々々しいものと云へるでせう。

舞臺へ出て人を顏る見るだけの餘裕が出來れば結構です、人の顏どころか自分の役を離れて自分を視る事が出來れば俳優も大したものでせう。人は知らず、いや恐らく他の人もさうではないかと思ひます。私は何時の場合も劇中の人物その人になるために、演出上のすべての苦心は含まれて居ます、しかも、四十日餘りも稽古をしてゐた昔の芝居と違つて、短日時の間に稽古もソコ〳〵に初日を出さなければならない、近ごろの制度で、とても、舞臺で美人の品定めをする餘裕などある譯がありません。殊に新作物になると、その日その日の舞臺のイキに依つて仕草は勿論調子のメリハリ（高低）まで、十回演れば十色なのが常です。

だから、私は初日が開いて三四日目位には必らず、親籍や家族の者を集めて、それ等の劇評？を聞いて參考にしてゐます、眞劍に見てゐて呉れるだけに、こう

---

そう然と浪速の橋の柳かな　史村
水あらば朧のやうに柳かな　同
そのかみの柳に浪速名所哉　同
炬燵出て見れば淡雪つもるらん　同
一夜とも思はで別れ柳かな　米布
冬雀も立ちまじりゐる柳哉　同
靜浦にたへて柳のかゝり雪　同
春の雪松にあたりて降りつまず　同
雪ふりを遠き世としも朧かな　同

## 松竹座に菊吾の「鏡獅子」を見る

裝ふて牡丹の土に柳かな　同
海近きくるわの中の柳かな　ゆき女
高々と五位はなき行く柳哉　同
淀八幡冬田つゞきて夕かすみ　同

## 高麗屋錦升

彌生狂言とて中座にて加賀見山の岩藤を勤むれば

咲くなかに見らるゝ藤の果報かな
大勢になつて賑はし花の山

客冬京の顏見世に勤めし辨慶を中座の三月狂言に上演して

つら〳〵と勸進帳を讀み上げん
京と浪速を兩掛けとして

した小ちやな私の試みからも随分敎へられる事があります。要は眞面目に見て戴いて、成程と敎へられる樣な評をしていたゞきたいと思ひます。

# 僕の觀劇の態度

京極利行

これは僕だけの態度なのだから、これをもつて他の劇評家諸氏を計る場合のモノサシに應用されては困ることを先づ述べておきたい。

×

劇評だけとは限らないが、總べて人の仕事や藝術を味ひ、又評することは終ひにその人間自身を味ひ、又評することになるのだと此頃の僕は考へて居る。だから、いつでも劇を見る場合は勿論だが、其他創作を讀むとき、美術を眺める場合能樂や音樂、舞踊等を觀賞する場合、斯うした總べての場合に相手と眞劍試合をする心算で居る、樂しんで味ふと云ふ心境の場合は少い。事實、僕はまだ樂しんで物を味へる程に出來た人間だとも考へられないし、僕を出來さす爲には人間相手の眞劍試合の修行以外にはもう方法はないのだとも思つて居る。そして樂んで味ふと云ふ點になつては、人間界のことではなく、自然を眺めて居る場合ほどに樂しみの深いものはないとも考へて居る。だから、本人の心境だけを立場にして眺めたらしい、遊戯氣分の豐富な物は、嫌ひではないが、手はとり合へない、そしてこんなのはことに創作を讀んだ場合に多くぶつかる。然し、眞劍試合をする

## 寄贈雜誌

舞臺評論　實業之大阪
演劇改造　女性
演劇藝術　苦樂
觀劇　歌舞伎
番傘　川柳きやり
日本及び日本人　大阪
會計評論

## 浪花座彌月興行

浪花座彌月興行は純關西大歌舞伎にて晝夜二部興行、晝の部（正午開幕）第一大阪朝日新聞連載・下村悦夫氏原作、鳥江銕也氏脚色『愛憎亂麻』二幕、第二故九條武子夫人作、田中總一郎氏舞臺監督『洛北の秋』一幕、第三『傾城阿波の鳴門』玉造住居の場、第四『花吉野山』竹本連中、長唄連中、夜の部（五時半開幕）第一河竹默阿彌翁作、新古演劇十種の內『戻り橋』常盤津連中、第二『信州川中島』鰕虎配膳の場第三岡鬼太郎氏作、田中總一郎舞臺監督『御存知東男』三幕、淨瑠璃『江戸名所都鳥追』常盤

氣持ちが何時とはなしに樂しんで味ふ氣持に移つて行つて居ることもあるが、これは三味線を主にした既成日本音樂や、既成日本舞踊を觀賞する場合によく體驗することだ（西洋音樂の小品曲を聽いた時にもまゝある）。斯んな時には氣持は寛ろげるが一種の淋しさを自分に覺える。さて眞劍試合するとして、劇の方だけ云へば、どの手でぶつかつても僕の負けに極つた既成大家の種々の傑作にぶつかつた場合には、僕はその大家に堪へられぬ羨望を感じ、同時にぢつとして居られぬ刺激を與へられるのも事實だ。鴈治郎、中車、松助、梅幸、菊五郎、三津五郎伊井、喜多村、五郎一座、澤正一座の統一された演出、演出家の意識の充分に屆いて居る築地一派の仕事、これ等にぶつかつた場合にとりわけて前記のやうな感が深い。（餘談だが西洋音樂で大家の名曲を聽いた時、實業や政治的社會運動方面で働いて居る人の仕事振や言論を眺めた場合にもかうした感の起きてたまらないことがある）。僕も同程度の實力で眞劍試合の出來る相手にぶつかつた時は一番愉快だ、そうしてそんな連中とは修行較べを實行する心算で僕だけは居る。だから大家になり切らぬ二流どこや、若手連中の舞臺を見ることは非常に愉快だ、だが、こつちが眞劍試合で行く心算でも、それに行かぬ連中が多いのは大阪の劇壇に感ずる一つの淋しさだ。次ぎに僭越だが、僕の方が實力の出來て居るやうに思へる相手にもぶつかる場合がないでもない、こんな時には相手が眞劍でさへあるならば、僕もその眞劍さと同じ眞劍さで仕合に立つべきだと考へて居る。

×

以上は僕の底に流れる氣持だが、次ぎに少し、細部に亘つて述べよう。僕は或る俳優が或る役を主演した場合、又助演した場合に、その成績は、その人の現在の實力に伴つてどれだけのものだつたかをとることにして居る。その俳優以外の俳優がより以上に上成績で見せた役であつても、その上成績だつた俳優のをモノサシにして今度の俳優の成績のすべてを評價してやりたくないと思つて居る。上津連中等院本や新作の名劇揃ひでその總配役は左の如し。

浪士安藤鐵馬、女房お弓、長尾彈正蟲虎、座光寺源三郎（我童）龍藏寺浪右衞門、阿波十良兵衞、渡邊源吾綱、大河内善兵衞（壽三郎）孃なぎさ、遊女浮舟、直江妻唐衣（成太郎）蘭溪の娘みゆき（福太郎）村の女おみつ、郎黨右源太、踊り娘丹波與作（市郎）本多重兵衞、同心松田源之進、小間物屋清助、世話人長八（松壽）鍾僧西念、侍子光代、女太夫お八重（我久之助）面賣三作、大和屋娘おその（ひとし）巡禮娘おつる（義直）村の女おつぎ、若菜、踊り子關の小萬（右若）氏家又八、遊人武太六、仲間西助、家主多右衞門（蓮平）巾着勘藏、村の者おさき、町飛脚定助、大和屋彦右衞門、長瀧三十郎（右田三郎）神原主馬、仲間三原、御用聞の平吉（八百藏）風鳥與藏實ハ赤堀軍衞、庄屋作兵衞、中村仲藏、蔦頭定右衞門（丸團次）勘助母越路、母お喜せ（蓮女）小野田蘭溪、楠正行、（巖笑）○立花聞多、仕丁又五郎實ハ塚本狐（右團次）奏者瑠璃幸實ハ黑百合お才、辨の內侍、迎江山城守、羅宇屋長五郎（德三郎）勘助女房おかつ、娘おこよ（扇雀）海野龍馬、此村大吉（橋三郎）高杉晉作、蓮月尼、娘早百合實ハ愛宕山の惡鬼（魁車）

成績だつた俳優のものだモノサシとして顔を出しがちになるのを、出來るだけ消して白紙になつて眺めてやりたいと思つて居る。然し、これはなか〳〵むつかしい事で困つて居る。又俳優の年齢と云ふことも大いに頭に入れて成績を評したいと考へて居る。畸形的天才は別だが、十代の俳優に二十代、三十代の人の成績を又二十代の者に三十代、四十代の人の成績、三十代の人に四十代、五十代と決つしその俳優の現在の年齢代以上の年齢代人としての成績は求めないことにして居るそれよりも、當人が現在の年齢代人として、どの程度まで完全に伸びて居るか、又どの程度の成績を示したか、この方の評價により重きをおいて居る。

×

次ぎに俳優個人々々に就いてではなく、劇そのものに就いてだが、一口に劇と云つても種々のものを見ねばならぬのが現在の僕の境遇だ。だが、僕は種々の劇に對しては、その劇相當のモノサシだと思へるものをそれ〴〵に持つて觀るべきだと考へ、僕だけでは、これこそが正當のモノサシだと自信出來るものだけは、自身にこしらへて出かけた心算で居る。たとへば既成俳優一派の演ずる既成劇へのモノサシを決して演出者の意識が豐富に働いて居る新劇觀賞の場合のモノサシとしては居らない心算だ。又表現派、構成派で行くのが流行物の若い新劇運動者の舞臺を觀賞するモノサシを、其の儘に、リアルを主にした新派一派の舞臺や、既成劇壇に培はれた藝を主にした既成俳優の舞臺を評する時のモノサシに流用して居らない心算だ。以上は評するものとして當然のことだと思ふが、僕はそのモノサシを出來るだけ公平につくる爲めに、常に活きて動きつゝある實社會を眺めつゞけて居ねばならぬのは事實だ、そして劇の國に溺れてしまつては、たとへよい意味で溺れてしまつても、モノサシが狂ひがちになるのではないかとも思つて居る、そしてこの意味では既に出來た人としての自信のあるらしい小山内氏の態度が非常に嬉しい。

## 角座總配役

（志賀廼家淡海一座）

角座彌生興行は志賀廼家淡海久々の歸演で狂言は第一『亭主の汚れ目』一場第二菩喜劇『仇でない仇』二場團三『土手の家』二場第四『桃之臘夜踊人形』三場の新作揃ひだが、『桃之臘夜踊人形』は今秋行はせられる御大典に因、目出度い桃の節句に淡海が得意の咽喉で御大典節を唄ひ一座總出演で踊り拔く華やかな大舞臺である重なる配役左の如し。

浪人榎本左源太、娘お蝶（龜鶴）提灯屋太兵衞（太郎）船頭久七、金太郎（十太郎）伊勢講佐七、仕丁（三樂）右大臣（白石）茅乎女、青年岩田、ねづみ（一雄）兼子の夫市松、父屋（伊吹）伊勢講幸助、仕丁（樂遊）弟子吉五郎、飴屋（又平）卯平娘のゑ（富士野）仙造、天神（紫雪）女房おやす、五人囃子（天光）妻久江小野小町（玉川春江）妹兼子、姉、野々垣伊都子、官女（鶴岡富士子）女給おすみ、官女（如月武子）女中おせん、飴屋の妻（衣川るり子）妹初瀬、小原女（かもめ）元祿女（多景島）喜撰法師（源五郎）親方芳太郎（小次郎）米屋清吉、浮浪人あん公、キューピー（樂太）洗濯屋辰三、浮浪者爲吉（辨慶）町内の金衞、野口卯平（天華）浪人跡部源之亟、瀨川源三郎、左大臣（淡海）

これも公平なモノサシを作りたい一方法だと自分は考へるのだか、僕は、既成劇院本物、世話物、舞踊其他を見る時には、脚本なり、院本なり、又先人大家が演じた場合の型づけなり、その時の名家の批評なりには一通りは眼を通しておくことにして居る。又新劇運動者が上演する飜譯劇、創作劇の場合は勿論だが、既成俳優が新作を上演する場合にも、必ず脚本だけは讀む。そして、新劇運動者の演出の場合、又既成俳優の演出の場合、このどちらの場合にでも、その俳優團を根本にしての僕だけの演出だけは頭で試みてもみる。然しやつぱり先方がより豐富な體驗者だ、僕が頭のなかだけで描く演出よりは、多くの場合は優れたものが見せて貰へる、同時に非常に教へられることも多い。

×

以上は職業意識を離れての僕の態度だ、次ぎに職業人として僕が紙上に發表して居る劇評のことだが、これに就いては、職業人仲間だけの專門的問題になるからこゝでは何にも書きたくない。たゞ新聞讀者に對して、出來だけ親切な觀劇手引草を書きたい方針でありたいと、昨今では態度をそうしたところに定めて居る。だが、これがなか〳〵困難な仕事だ、然し、やつて居る以上、グチだけは云ひたくない、男らしくやつて行くだけだ。

ある識者の間には兎角の議論が釀されて、歌舞伎は滅亡するとか衰退するとかいろいろと豫言めいた斷論も下されましたが、皮肉にも歌舞伎は依然として國劇的玉座の位地に在り、更に年一年と隆盛に趣きつゝあるのであります。が然し如何に確固たる地位を造つて居るとは言へ、現狀維持をもつて滿足することは許されないのであります。私達は茲に、演劇の進展を計るべく、諸家にお願ひして上記の如き御玉稿を得ましたことを此上もなく光榮に思つて居ります。（朝郎生）

## 讀者文藝應募規定

◎原稿締切（毎輯十七日）
◎用紙は必ず官製はがきに限ります。
◎原稿は出來るだけ判りよく認めて下さい。
◎入選者には粗賞を進呈いたします。（但し入選者は改めて、住所氏名を御通知下さい）
◎原稿には姓名の前に住所をお忘れなく。
◎應募原稿は左記へお送り下さい。

大阪市南區久左衛門町
（松竹合名社内）
道頓堀編輯部

## 讀者倶樂部募集

讀者倶樂部は、松竹經營各座の名優と言はず新名題と言はずあるひは劍劇、新劇、新派のあらゆる俳優演劇を各自勝手に選んで公開狀なり批評なり、御自由に投稿して頂きたいのです。

他誌並に口上で言へば紙面提供、さては新進劇評家の引立て策といふところですが私共はそんな面倒なことは言ひませぬ、ただ諸彦と共に歡談一夕、そのお積りで續々御投稿を……

◎應募原稿は
（二十字二十行以内、毎輯十七日締切）

大阪市南區久左衛門町
（松竹合名社内）
道頓堀編輯部

# 「櫻時雨」と吉野太夫

—京都南座彌生興行を見る人の爲めに—

堂本寒星

片岡仁左衞門が新作——と云つても、もう明治時代の作品となつてはゐるが——そのうちで後世にも殘る優れた演出を見せてゐるものに「都一中」「名工柿右衞門」及び「櫻時雨」がある。

就中「櫻時雨」はその最も傑出した舞臺で、原作者高安月郊氏は、人物として三郎兵衞を主人だと斷つてゐるが、彼の灰屋紹由は、一中よりも柿右衞門よりも一段の古淡な風韻を見せ、誠に天下一品と云つても過賞ではないと私は思つてゐる。

『櫻時雨』が始めて脚光を浴びたのは、明治卅八年十二月の南座で、仁左衞門の灰屋紹由、先代吉三郎の三郎兵衞、死んだ中村雀右衞門が芝雀時代の吉野太夫といふ配役であつた、京都では初演以來、實に廿四年振りで、今春の彌生興行に同じ舞臺で上演することゝなつた譯である。

此の灰尾紹由の家は、京洛智惠光院上立賣に在つて、三郎兵衞は後に紹益と號し、吉野太夫と共に櫻川の片ほとり（一說に小川の邊り）に菴を結び、風流閑雅な生活を送るうち、吉野は寛永八年十九才で沒し「一說には寛永廿年八月卅一才で逝く」紹益は元祿四年十一月八十一才沒したとあつて、墓地は北野立本寺にあり、鷹ゲ峯常照寺にもあるが、一つは正妻の墓だとも云はれてゐる。

鳥邊山の絕勝妙見宮に吉野櫻といふ古櫻があつて、初濱當時吉野に扮した芝雀や、作家の月郊氏が、この地を訪づれ、上演記念として、その櫻のもとに吉野太夫の名吟である、

嫵さくらわれは廓の茶たねさえ

と刻した石碑を建てたのが、今も殘されてゐる。

この地は三郎兵衞、吉野が、その昔侘住居をしてゐた風流の跡だと傳えられてゐるのである。

吉野太夫は日本花柳史に江戸の高尾、浪花の夕霧と共に代表的になつてゐる遊女で、本名を德子と呼び、六條坊門（今の五條）の南、西洞院の東に在つた柳町の廓（一に三筋町ともいふ）林與次兵衞家の抱へであつて、寛永時代に於ける三筋町七人衆の隨一と唄はれた名妓であつた。

當時七人衆と云つたのは、林家の吉野、同じく對島、同じく土佐、柏屋の三笠、宮島家の小藤、若女郎家の葛城、永樂屋の初音の七名であつて、別に萬右衞門家の萬戸、同じく淡路、五郎左衞門家の野風、八左衞門の長島の四名を六條の四天王とも云つたが、何れも吉野には光を失つてゐたのである。

尤も吉野の名は六條柳町の前身、二條柳町の廓（萬里小路二條の南北三丁をいふ）時代から、その後身島原の廓（坤廓）となつて寛文延寶に至るまでに十名を數へ、德子の吉野は林家での二世だといはれてゐる。

即ち林家の抱えで、始めて吉野太夫を名乘つたのは禎子いふ女で、未だ萬里小路の廓時代であつたらしく、次が德子、三世が恰子と云つて、正德慶安頃の遊女だと云ふ。

然し吉野太夫の名は、林家以外尙六條上の町の喜多（八左衞門）家、伊藤（吉左衞門）家、中の町の田中（喜三郎）家、高田（七郎右衞門）家、太夫町（島原）の宮島（甚三郎）家にもあつたので、詳しく云ふと喜多家の初代吉野は雄子、二代は雪子、三代は媛子と呼び、伊藤家は珠子、田中家は征子、高田家は榮子、宮島家は悅子といふのが、何れも吉野を名乘つてゐる。

然し要するに吉野太夫の名は德子の二世に依つて天下に響き今に不朽の榮譽を殘してゐるのである。

# 讀者文藝欄

## 俳句　煤蓑選

「雛」

ならびゐて淋しきよその國の雛　汀水
障子紙に強き日あたる雛祭　泰二
思ひ出のいつに消えなん雛祭　清二郎
夕東風に灯ゆらぐ雛坐敷　壺水
お庭まで毛氈敷くや雛祭　清光
佗しさや壁に浸みある雛の軸　一榮
かたくなに兄は座りて雛祭　はつ女
雛祭三日すぎたる渺埃り　同
雛三日踏み荒したる風かな　花香
雛の咎眠たくなりし一人かな　同
桃の花かざしゝ髪や雛祭　銀杏生
雪灯にかんざしゆらぐ雛祭　同
桃の香を慕ひし蝶や雛祭　同
嫁ぐ娘にあとは寂しき雛祭　香園
雛段を仕舞ふ疊や桃花散る　同
紙雛や春になれても里の風　同
ひそとして庵の餡句や雛の軸　白鷺
馬の背に雛の荷つけて戻りけり　同

（賞）

灯火更けて冷たき雛の瞳かな。　同

『芝居雛詠』

春一ト日赤前垂のお茶子かな　一榮
春霞中座の櫓つゝみけり　花香
今日もまた芝居話や春の雨　三つ江
番附の句ふ坐敷や梅の花　清光
見上げたる芝居櫓や春の月　香園

どうしたことか、澤山な投稿が集まつて來るわりに、捨てねばならぬ句が多いは、まことに殘念だがいたし方がない。もう一息といふところをそのままに詠みはなしてあるが、諸家はもう一層の努力をして選者を喜ばしてください。と勝手なことを云つてゐながら次から次へ追はれる原稿の爲めにとうとう選者吟を怠つてしまつて甚だ慚愧に堪えないが一回だけゆるしてください。（選者）

## 次の題

『春の水』『櫻』

## 芝居短歌　山上貞一選

二月の道頓堀　ひとし

千金の歌舞伎の春や暫の元祿見得にうつゝなるかな　ひとし
白桔梗の花は咲けども歸らじとうつろに歌ふ聲ぞ悲しき　ひとし
揚幕の内に聲あり暫くとゆるぎ出でたる高麗屋かな　清二郎
亡き父の昔を語る巴波紋高島屋とよぶ聲のうれしき　清二郎
成駒屋、成駒屋ならではかくまでにとわれ人ともにほめむ實盛　清二郎
たう〳〵と舞ふや三番のふりのよさめでたき御代の色にかゞやく　清二郎

葉子

如月の中の芝居へ徳三郎華者のおりんとなつて出てくる

靜香

豐成のあつきなさけに姫君もしづかにおちゆくひばり山かな

靜香

雪責の中將姫はいたいたし悲しや雪の庭にまろぶも

靜香

馬方となりていとしき三吉は母のたもとをはなしかぬるも

銀杏

春風や浪花の梅の釣枝にイ菱花菱ほゝえみてあり

銀杏

暫と大音聲に呼ばはりし三舛の大紋に心なごみぬ

銀杏

物語り琵琶の湖の波の間に白旗まもる小萬のいさほし

銀杏

浮び出て恨みぞむくはん知盛のげにいさましや卯の花おどし

銀杏

歡樂の夜半に嵐の仇櫻勝四郎ならでわれもはかなし

松之助

おゝうれし〳〵とてにこやかに舞へばのどけし道成寺の庭

實

景政は大太刀ぬいてわめきけりいつ斬りにしや首のころがる

實

人の世の時雨にありき父と子が心晴れゆく京の北山

銀杏生

夕月に白き桔梗の咲きほひて眞間の里には虫ぞ啼くなる

春雨

梅忠とうたはれつるも片羽鳥いまは恥をし賣りて生きゆく

吾朗

兄妹(はらから)をそれともわかずうらみける戀のめしひは悔ひて泣きけり

（賞）

ひとし

君なくてわれ生くべきとひた泣きに小稻が泣きし戀の湖

## 次號課題（短歌）

『三月の道頓堀』

（狂言にても俳優にてもよろし、又新派舊派の別なく隨意隨感のもの）

## 讀者倶樂部

### 暫を見て

京極壺水

幸四郎の權五郎景政相當の貫祿を示してゐる充分に仕こなしてはゐる、が運びに何かしらぎこちないものがあるのは如何してだらう十八番ものと云ふ點に囚はれてゐるのではなからうか。も少し呑氣にやればもつと愉快な芝居になると思ふ。元來今日の暫に莊重味、嚴肅感等を求めるのは、求める方が間違つてゐる、事實に於いて『暫』の演技からこんな感じが受け得られたのは、初代團十郎が山中平九郎を對手に意地を張つて、背水の陣を敷いた時だけであらう、と僕は思ふ。その後毎年顔見世の吉例狂言として演ぜられ、十八番に撰定されてからは、或ひは見物は之を神聖視

するに至つたかは知らぬが、あの内容では餘程の名優が揃ひ、彼等が餘程眞劍に演じなければ、要するに愉快な狂言たるに過ぎぬであらう。勿論それで良いのである。然る上はそれが益々愉快に面白く演ぜられる事が望ましいのである。この意味に於いて、今度の暫はもつと悠暢に樂に演じてほしかつたが兎に角て結構と云はなければならない。役は充分揃つゐる。延若も病後にめげず立派に勤め上げてゐる。宗十郎の總結構だが、もつと間抜けた演出をして欲しかつた。新十郎の腹出、流石に詳しいと見えて立派なもの、がこの人の口上は餘り映えなかつた。魁車の女鮫は一通り器用に出來てゐるが、三津五郎、扇雀以下は先づ〳〵及第と云ふ程度を出でない。

以上暫雜感、要するに面白い芝居である。今後機會ある毎に大阪でも折々は上演して頂き度い。此のせち辛い世の中に於いては一服の清涼劑たる價値は充分ある。即ちもつと超現代的に歌舞伎の最も歌舞伎的なる所を發揮して演じて欲しかつた所以である。

## 如月興行本郷座批評

小泉　阿南

昨年拾一月坊ちやんを上演して大好評を博した猿之助、友右衛門等に松蔦、壽美藏、時藏等が加つて選定宜敷きを得た脚本に全精力を集中し、且料金を安くしたので興行界の厄月と言はれる二月にも拘らず相當の入りを占め、面白い芝居を觀せて居る。

一番目　『洞ケ峠』二幕　雜誌一歌舞伎一

應募脚本で有名な『洞ケ峠』の筒井順慶を軍師島左近の打算的策略の傀儡とし、裏切つた爲めに愛する女を失ふと言ふ筋で友右衛門の順慶は大詰に「俺は何の爲めに戰爭に勝つたのか解らなくなつた」と言ふ臺詞を完全に活かして居る。壽美藏の左近は弱肉强食の戰國時代に於ける利己的な策士らしく、時藏のお妙は戰場迄會ひに行く位惚れて居た男が利の爲めに義を忘れたのを憤慨して斷然男を振り捨てる聰明な理智的な女性として申分がない。

『すみだ川』四幕六場　永井荷風氏の傑作を木村富子夫人が如何に脚色され、壽美藏、松蔦が荷風情緒を奈邊迄表現し得るかと今月興行中最も期待して居たが脚色が不完全で豫想以下の成績だつた序幕から三幕目迄は大體原作の氣分が出て居るが富子夫人の創意になる四幕目は餘りに觀客を甘く見過て居る感があり、又舞臺監督の不注意に依り可惜詩趣溢れる小村雪岱藏伯の舞臺裝置の効果を減じて居る。壽美藏の長吉、松蔦のお糸は熱心な努力に依り原作の人物に成つて居り、友右衛門の蘿月と羽三郎のお濱を見ると彼んな伯父さんや伯母さんが有れば良いなあと思つた。

中幕　『道行夢路駒』一幕　巢林氏の原作丹波與作と關の小萬の千貫松原の道行を清元と竹本の出語りで氣持ち良く見た。特別譽める所も無ければ貶す所も無い。

二番目　『法界坊』三幕　菊五郎や吉右衛門の演出臺本とは隨分違つて居る。吉、菊、猿の順序で愛嬌が減じ茶氣が增す。序幕に於て茶氣滿々として見物を笑はせた猿之助の法界坊は三圍土堤の殺しでは本當の惡人と成り物凄い宙釣りの幽靈と化ける。又菊、吉のかつぼれの引込みに對して喜撰を代用したり、双面で押戻しを演ずるも珍らしい。然し蕎麥を食ふ所が無いのは遺憾だ。友右衛門の甚三、吉之丞の長九郎は上出來時藏のおくみ、龜藏の要助も惡くは無い。（三・二・一一）

×　×　×　×　×

# 芝居俳句

暫　澱江

しばらくは花に見心深めけり

助六

花吹雪傘に積るや仲の町

加賀見山

お局の皆な興がるや花の山

男女道成寺

花咲や寺から里へ押戻し

花盛り供養の鐘を聞く日哉

翁以老

櫻しぐれ

吉野にと花にしぐるゝゆふべ哉

妹脊山

妹山と脊山に架けむ花の山

又五郎狐

花ちらり〳〵靜かや吉野山

業平東下り

言問はん花にこゝろもすみ田川

菅原

ちる櫻花に素氣なき嵐かな

# 洛北の秋

編輯部

『洛北の秋』は故九條武子夫人が蓮月尼五十年忌にあたつて創作されたもので、未定稿のまゝで發表せられたといふが、梅幸初演の時修訂が施されて初刊本に比べると、餘程立優つてゐたといふ。閑寂な洛外の秋を背景として、幕末に於ける洛中の騷亂の餘響をほのかに受けつゝも超然と塵外に住む蓮月尼が、小坊主の西念との短い無邪氣な對話や、遊女浮舟とのしんみりした對話、或は庄屋さんとの眞劍な對話と、これらの三段に分れ老蓮月を中心に閑寂な氣分の横溢したもの、尚、事件の推移や動作の活躍や、心の葛藤や性格の發現が比較的乏しいと言つても、各々の對談のうちに深い同情や尊い信仰や有難い教訓を見出して、觀客は流轉の世相を知り、世の大きな變り目の寂しい秋の眞只中に默然と考へさせられるであらう。殊に何もかも品よく淡くあつさりと現れてゐますから、舊劇ものゝ取りあはせとしては、極端なコントラストをなすもので典雅と沈靜な情趣はこの劇の全面容を蔽ふものである。舞臺は西加茂の神光院で洛北の秋の詩境を寫實的に現し古松老杉のくすんだ背景に雜木や公孫樹の黄ばんだ葉などが映じた趣は、老尼と遊女との對照と共に、劇境と實境の分ちなく觀衆をして深い法悦に浴せしむるのであらう。

蓮月尼臨終の家　（京都西加茂神光院）

# 幕内閑話

大川澱江
日比繁二　共編

ちよつと世の中にすねて、閑人の閑語だなどゝ題を置いたものは、小憎らしいが、何處かのんびりとして、物識りらしい氣の利いたものではない。元來そも〳〵筆者兩人が閑人どころか至つての忙人で、をり〳〵の閑をぬすんで、閑人の眞似をして見やうといふのだから、ロクなものが書ける筈はなく、微塵も皆様のおためになるどころか、あつたら閑つぶしをさせるかもわからない、所詮は舞台へのらぬ幕内のひそ〳〵話、號を逐ふて暫らく續けるつもりであるが、えッくそおもしろくもない、くだらぬ茶言はもう止めろ、とでも半疊が入れば、兩人忽ち消えて無くなるつもりだから、まあ安心しておつき合ひをねがふ。

◇

むかし〳〵その昔、浪花の梨園に名を轟かした尾上多見藏一分や五厘の字明きを爭ふといふ番附面のドまん中に、大手をひろげてのさばりかへり、木つ葉どもは、その名を聞いたゞけでも身慄ひをして縮みあがるといふ名人。九十に近い高齢をもつて最後は時の府知事から免稅の辭令を貰つたといふ名譽の俳優、それが見たところ、五尺にちよつとばかり、案外にも平凡な皺くちや爺さんで、知らぬ人が見れば、これが名優尾上多見藏などとは承知をする筈がない。誰れしもその道に名を揚げるほどのものが有つてゐるところの負けじ魂といふものが、この名譽あるお爺さんの一生を支配したことはいふまでもないことで、半面の愛嬌と半面の負けじ魂が、この人の生涯に幾つかのおもしろい逸話をのこしてゐる。

多見藏爺さんは宗右衛門町の本宅の外に、俗に畑と云つた千日前の東に小ぢんまりとした別宅をもつて、その双方を掛けもちにして住んでゐたが、お爺さんの癖で、この朝夕の道々で、道行く人に愛嬌を賣りながら物賣りの荷をひやかしたりして親方々々と呼ばれるのが無上に嬉しかつた。で家人はこのお爺さんの日頃の性格を心得てゐるので、必ずお爺さんの御機嫌を損じないやうにと、家人は先廻りをして、物賣にお爺さんへ對する時の心得方を吹き込んで置くそんなこと、は御存じのないお爺さん、正月の二日の朝、畑の宅から本宅への歸り道、向ふから威勢のいゝ水菜賣の若者に出喰はした。

『オイ水菜屋ッ』

多見藏は呼びとめた。

水菜賣と多見藏爺さんの間に、先づ普通の賣買の應對がく

りかへされてゐたが、その應對にも次第に爺さんの性癖が現はれて來て、

『その水菜をみんな買ふてやるさかい、負けときや』

なんの不自由もない筈の多見藏爺さんだが、買物は値切るものとの世間の慣はしに、やつぱり從つて可なりひどい値をつけたこれが通常ならば、血の氣の多い水菜屋の若者、

『阿呆らしい』

とかなんとか、荷を擔いでサツサと行つてしまふところだが、こゝでは水菜屋も心得てゐた。

『親方、あんたのこつちや、負けときまつせ』

多見藏爺さんの顏はニコ〳〵頽れた。

『負けとくか、うむえらいやつちや』

多見藏爺さんは、若者の兩の肩に擔がれた一ぱいの水菜と共に意氣揚々と本宅へ引揚げて來て家人に支拂ひを命じた。家人はそつと、値切らね以前の値を、水菜屋に擱ました。

さうかと思ふと、この爺さん案外にも愛嬌がよくて、時々それが脫線する。道端で人に逢ふ。

『イヨ御機嫌さん、ながいことお目にかゝりまへんな、一ぺん遊びに來とくれなはれ、相變らずおたつしやで結構、おうちはどなたもお變りおまへんか』

向ふに物も言はさず立てつゞけに喋る。やう〳〵に双方の挨拶がすんで、ものゝ半町も遠ざかる。多見藏爺さん男衆をふり返つて、

『オイいま逢ふた奴は全體どこの奴ぢやい』

或日多見藏爺さんの寢てゐた本宅へ泥棒が入つた深夜の空氣を撼はして、多見藏爺さんの耳へも家人の騷ぎの物音が聞こえて來た。のこ〳〵と起き上つた多見藏爺さんは床の間に在りあはした鎧兜に身を固めて、長押の槍をもつて臺所まで出て來た、泥棒はとつくの昔、家人の騷ぎにまぎれて逃げ出してゐたが、多見藏爺さん、威容堂々として、家人を睨み、

『泥棒をこゝへ連れて來い』

『ヘイ〳〵泥棒はもう逃げました』

『ナニ逃げた、弱い奴ぢや』

家人漸やく、ほつと安心して

『ヘイ親方の威勢でびつくりしていま逃げて行きました』

◇

明治十九年の三月だつた。

道頓堀の中座では、ちやうど今年のやうに、宗十郎、福助鴈治郎、巖笑、猿之助、珊瑚郎、琥珀郎、松太郎などゝいふ一座で『つゞれの錦』と『加賀見山』を出さうとした。

これには、宗十郎が尾上の役、雀右衛門が岩藤、福助がお初といふ役割で、いつものやうに準備をすゝめてゐたが、雀右衛門が番附の居並びのことからゴテ出して、どうしても讓らない、その言ひ分はかうである、福助が書き出しの位置、

宗十郎が座頭の位置ならば、自分は番附の中へ納めて貰はねば承知が出來ない。といふのである、宗十郎は自身の座頭の位置の隣りの二枚目へ据える、とかういふ双方の言ひ分がどうしても妥協がつかないといふ結果になつた。これはあながち、この時に限つたことではなく、その頃、三榮、大清、尾張屋、錢屋などゝいふ何人もの仕打に分布されてゐた俳優がおの〳〵一家の見識をもつて、勢力爭ひをしてゐたのだから敢てめづらしいことではなく、いつものことであつたが、而し芝居の方にとつて見ると、可なりな煩雜を起してくる。それで結局この話は最後の協調がつかなくて、破談分裂で餘儀なく宗十郎が岩藤をして松太郎といふ中堅どころが尾上を演ることになり、雀右衞門はすぐ、お隣りの右團次一座へ馳ることになつた。

新富座を打上げて來た東京戻りの右團次は、この角座の開場式を受けもつことになり、府知事や當時要職の人々を招待て盛んに氣勢を揚げ、自分が座頭の位置に据り、實川八百藏が書き出し、中軸へ雀右衞門を据えて、一番目に『當千本義經實記』中幕『望月』切『操三番叟』といふ陣立てゞもつて中座の宗十郎一座と對抗することになつた。ところが東京で團十郎一派の活歴かぶれをして來た右團次は、義經ともある武將がべた〳〵と白粉をつけて色男顔をするにも當るまい、かういふ意見をもつてゐて、舞臺へ現はれたところを見ると色黑々たる素顔のまゝに、ちよつぴりと髭を書いて、見物の期待を裏切つた。

『どんなものだ』

と見物を驚かして、さすがは右團次だと唸らす筈であつたその謀はまんまと外れてしまつて、

『なんや、あれが義經か、人を馬鹿にしよる』

見物からは散々な酷評。

右團次、すつかり悄氣てしまつて、遽かに白粉をつけはじめたが、もう遲い、中の芝居の加賀見山の人氣に壓倒されてとう〳〵失敗に終つてしまふ。而しこの失敗の原因について當時の消息通の話によると、芝居といふものゝ最負團體で唯一の勢力をもち、つねにその消長を左右してゐるといふ堂島連中といふのに、その時の右團次は睨まれたといふのである堂島では、

『右團次が道頓堀のまん中で座頭を名乘るのはまだ早い、誰れが許したか知らぬが、生意氣千萬だ』

とかういふので、哀れや、その芝居が倒けたのだとも云つた。

中の芝居に反抗して現はれた雀右衞門の軒昂たる意氣も、東京戻りの新らしい抱負をもつて、從來の歌舞伎習慣から離れやうとして、試みた右團次の新思想も、結局は、そんな風にまだ〳〵世間との調和がとれなくて、あつたら、目出度い筈の開場式興行はめちや〳〵になつてしまつた。（未完）

浪花座三月興行畫の部上演

……故九條武子夫人作……

# 洛北の秋（鸚鵡石）

蓮月　自ら死ぬるといふ時は一面には罪といふべき場合もあり時には又、無二な純一な道とも云へる場合もありまする。死といふもの、嚴かな本質よりも、その行爲にとらはれるといふことは間違ひでござんせう。自分を深く見てそれが純な永遠のものならば、死も又一つの光明道ともなりまする。まあまあよく考へた上でないとかるはづみなことをしてはなりませぬ。

浮舟　蓮月さま、おさとしは胸にしみ込みまする、私はいま、でこんな卑しいつとめの身ゆえ、女の操といふもの、本當のわけもわかりませず、それゆえ戀といふものは花から花へ飽きては變る蝶の遊び、たのしいやうな、はかないものぢやと思ふておりました。町の娘がうぶな心中ばなしなど聞くときは阿呆らしい智慧のない業とさへ笑ふて聞きました程ゆへ、どんな立派なお侍でも厭になつたらしいやれ頭や餓鬼のやうに見え、捨てるのに何んの心殘りはせず……私何といふ淺間しい心で御座んしたのか……。

蓮月　氣は境遇によるといひまして、それは最もと思ひまする廓に居つて眞實魂をもつた人間の愛にはめぐり逢ふこともむつかしゆう御座んせうし、ほんとうの女の心持ちは惠まれませんかいな。

浮舟　なんといふ不幸な返らぬ月日を今日までむざ〳〵汚れた夢を見て暮したので御座んせう。蓮月さまあなた樣が仰言るその人間が本當の魂をもつて私を此の頃呼び活かしてくれるので御座んす。

蓮月　本當の人間の魂の聲が眞實の女の操といふものを解いてくれることがわかりましたかえ。

浮舟　はい……やつとわかりました。わかりました故、一ト時も早う此の境界から逃れ出たいと思ひまする、力がさきにものをいふひきしまつた時節にこんなことを申上げるのは恥かしゆう御座んすけれど何卒聞いて下されませ。

蓮月　いゝえ、そんな遠慮はいらぬこと、この蓮月は埒ない浮世の無駄話にいまとる事は益ない事故厭うておりますが、おまへさんの胸のうちに目を覺したもの、それは人間の生命のなやみで御座んする。昔お釋迦樣ですら、たちがたい愛着には涙をお流しなされたといふこと、聞きませうともお話なされませ。

浮舟　何といふお優しい仰せで御座んせう嬉しゆう存じます。それは此春道中の日で御座んした。今年は私が傘止めの役、其日ばかりは血なまぐさい風も何處へやら、洛中の花は眞さ

かり、酔ふ程なお心で御座んしたが、その晩角屋の座敷に見えた大勢の客衆の中でもまだ三十になるやらず、眼もとの凜としたお侍が御座んしたが、心に殘つた面影とて、たゞそればかり、何處の御藩ともわからず御別れ申しました。その日の花も散りはて若葉になりそめた稲荷祭の宵宮の晩、そのお侍がお一人でお上りなされ、たつて私にときつい御執心でありましたゆえ、なんとなう心がひかされまして、つい言はいでもよい身の上ばなし、お話したほどお情にほだされてしまひました。それは〳〵他人事でない樣なおもひやりのある方で御座んした。

蓮月　廣い世の中に打ちあけて眞實を聞いて貰ふお人に巡り合ふといふことは、神ならぬ奇緣といふもので御座いせう。

浮舟　ほんに奇緣と申すものか、神樣樣佛樣の御引合せのやうな心持ちさへ起りましてどの樣にしみ〴〵と嬉しゆう御座んしたやら、それからと申すもの度重ねての通路に雨の降る夜も降らぬ夜も……どうしたことやら一日逢はねば淋しうて戀しさにこの生命がやせはてはせぬかと思ふ程、若いお人にありがちな惡串戯の一遍もなう會へば逢ふ程眞面目な眞實が。

蓮月　してそれは何處のお侍でござんした。

浮舟　はい、それが……あの……朝敵……會津方のお侍で御座んした。さうと知つた時には私の心がどうにもかうにもゝどりませぬ、あゝ私は斯うして知つた人間の戀ゆえに、罪おそろしい戀心、蓮月さま、例へ明日にも知る人があつて殺されたとて二人ならいとひは致しませぬ、むくろは二つでも魂はひとつ、……おもふております。

蓮月　わかりました。おまへさまのその心をさつしると婆にはよしあしは言へませぬ、ただ〳〵お前さんの前に眞如の世界がひらかれて邊障のない白道が導きかけてゐることを喜びませう。惡鬼毒蛇のやうな群からおまへさんを救ひ出された手にだまつてそなたを渡しお別れ申しませうぞ。

浮舟　とても救はれぬ境界から優曇華の戀を知りめぐりめぐり合ふた二人どうぞお許し下さりませ、はじめの夜からあの清い澄み切つた瞳には吸はれてゆく樣で御座んした。それにしても新たな心の苦しみはこの汚れた體がわれ乍ら痛ましい程あはれにも見えまする、そして身をまかしまする事が、空おそろしい罪の心もちさへいたしまする、女の操といふものがほんとうにわかつて參りました。

蓮月　さうぢや、浮舟さん、操といふものはなか〳〵こみ入つたもの見やうで解方も違ひませうが、眞實といふものから生み出されたものでない限り、それは本當のものではありませぬ、そこから生れた美しい心もちさへあれば、過去の汚れは淨化してゆけるとおもひまする。

芝居物語 ——（岡 鬼太郎氏作）——

# 御存知東男

永松 愿

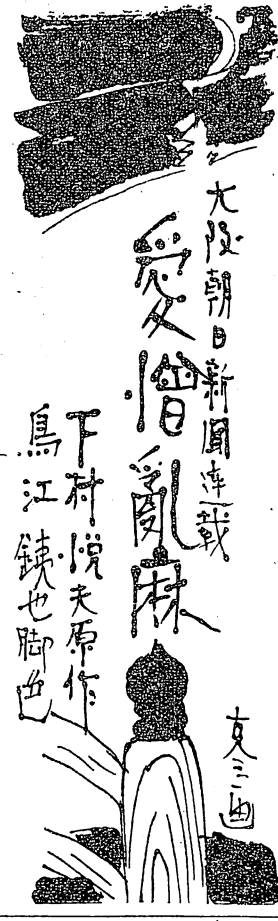
明和の或年八月十八日の夕申刻過ぎの頃、其頃市村座へ出て居て次興行の忠臣藏で定九郎を振られた中村仲藏、何卒立派に勤め度いものと柳島妙見様へ日參して居たが、恰度旬外れの夕立に遭つたので堂裏の茶店へ馳込み、其處に先程から居た羅苧屋、幻の長五郎に煙管を直して貰つて居る。と鬼神組から別れて五人男と謳れて居る中の一人、此村大吉が間近の松の木蔭へ立寄つた。一本杉の紋のついた黑羽二重の袷に白博多の帶しめて蠟鞘の大小を落しざし月代が少し生えた二十七八の凄味のある好い男である。跡追つて來た仲間三平が五人組の一人横井の手紙を渡したのを見れば、僅かの喧嘩に根を持つた猿江町の松平帶刀が横井を襲ふといふので横井はそれを逆襲に出掛けたその置手紙である。それを讀んだ此村がその文を口にくはへ、帶搖り直し尻端折り、跣になつて一散に駈出した。此姿を先程から瞬もせず眺めて居たのは仲藏である。五人男の一人で千五百石の旗本座光寺源三郎は半年前十間川の川邊で幻の長五郎に煙管を直させてゐる處を、長五郎に詞をかけて通つた鳥追の女の事が忘れ兼ね長五郎に頼んだ命賭けての念が屆いた。女は下賤の娘おこよとて、おこよの方でも源三郎の事が忘れ兼ねてゐたので粹な母親お喜世の計で今では日毎に逢瀬を喜ぶ仲である、今日しも茶席風の洒落たお喜世の家の小座敷で彼等が互に此半年の嬉しい仲を喜んでゐる時、庭の植込からひよつくり出て來たのは長五郎である。一つ事が間違へば首仕事の媒人を袖にしてと、彼等に忌味を云ひに來たのであるが、お喜世が出ての執りなしから三百兩の金で向後一切知らぬ顏と、先づお喜世が手附の百兩迯は源三郎が出す事になる。其夜の六ッ半頃竪川筋撞木橋の際で馬喰町の大問屋大和屋彦右衞門が娘おそのが祝言の爲伯母の家に暇乞に連れて行つての歸るさ、泥醉した仲間から迷惑を持掛けられてゐるのを救ひたのは此村大吉である、おそのが落した銀の平打を拾つて逃げんとする仲間を河中に投込む機に平打は橋下の舟へ落ちる舟には座光寺が乘つてゐた。それから二日經つた夕方、馬喰町大和屋では今宵娘おそのの祝言とて大變な混雜である。黑紋付に宗十郎頭巾、大河内善兵衞がヌッと入つて來て、嫁女について主人に面會したいと動かないので主彦右衞門が差向になると、彼は川向の猿江に住む服部四郎右衞門といふものだが弟要人がおそのと夫婦約束し

て證據の品迄取交した。それに此度の嫁入、町人風情に見替へられては武士の一分立たずと書置認め割腹した祝儀の面當に持參した生首と包を差出すので籤から棒と不審る彦右衞門に、取交した證據の品と平打を見せる、それは一昨夜落したものだといへばそれでは首も拾つたといふのかと、責めるので、惡い奴に掛り合つたと諦めた彦右衞門は大河内の云ふなり五百兩の金で萬事を濟ますことにする。外手町の大河内の住居で折柄訪ねて來た此村と大河内が酒を飲みながら今日の大和屋の一件を話し合つてゐる。横井が帶刀方へ切込んで無慘の最期、でも其場へ駈込んで此村が十三人を斬倒し帶刀の首を横井の靈に手向けた上二日目にその首で五百兩はまんざらでもないと喜んでゐる所へ座光寺が來たので、かねて座光寺が賴んでおいた三百兩を手渡す。やがて座光寺が歸つた跡へ御用聞が這寄つたので此村は大河内に何やら囁いて悠々と去る。捕方が亂入した。小梅村おこよの家で此村が座光寺に九州へ落ちろとすゝめる時誰やら垣根に人影が見えたので引ずり出せば幻の長五郎で訴人した事を白狀する。そして匕首で斬てかゝるを座光寺が斬て捨て、今日を刀の取納め其方の聟にならうと云へばおこよは喜ぶ。此村が歸つた後同心長瀨三十郎が來て叮重に奉行役宅まで同道願ひたいと云ふので座光寺は承知したと立上る。おこよは屹と決心して乳の下を突いた。彼は此健氣な死狀に氣を勵まされおこよの鳥追笠を懷しい形見に貰つて立上る。十間川西河岸の妙見堂の境内で、定九郎の扮裝に成功した中村仲藏がお禮の爲と手踊を奉納する、見物の中から大河内善兵衞が飛出して、賤い分際で御直參の侍を生手本にし自贊らしい、而もその侍は無二の友、打懲らしてくれると摑みかゝる所へ御用と十四五人の手先が大河内を取卷いた。彼は今が年貢の納め時、藝人としては見所のある奴、泰平の世にもある勇士の最期覺えて置と事もなげに腹掻切つて力ある聲で笑ひながら落入る。

# 蓮月尼遺作展

彌生興行畫の部に上演される洛北の秋に因んだ遺作展覽會が、佛敎婦人聯合會後援、松竹宣傳部主催のもとに浪花座の二階に於て開催されて居ります。品々は『洛北の秋』の作者であつて一代の佳人九條武子夫人の遺作、及び戲曲の主人公蓮月尼の遺品（畫軸、書軸、額、短册、色紙）等合せて百點餘り、期日は同狂言開演中であります。

（浪花座三月興行上演）




## 序幕の一

### 京都三條料亭ことぶき

舞　臺

平舞臺、料亭ことぶきの大廣間、正面は欄干、加茂川を隔てゝ向ふは柳の土手、京の町、東山など望まれるよき所上手寄りに床の間、下手は廊下廣間に燭臺數箇。

元治元年の早春

賑やかな合方にて幕あくと、舞臺には舞妓三人金扇をひるがへしつゝ踊りを踊つてゐる、よき所に壬生浪人組頭風鳥典藏實は赤堀軍衛（三十代袴羽織、大たぶさ）盃を持ち乍ら悦に入つてゐる、つゞいて浪士氏家又八（三十代）本多孫八、清野逸平太、森田政之進、竹山重兵衛（いづれも三十格好）袴着流しにて居流れてゐる、藝者米八、梅春、三味を持ち、琴勇、秀野がそれ〴〵酌をしてゐる仲居お安お計など控えてゐる。

舞妓の踊りがすむと、皆捨ぜりふよろしく酒をのむ。

近くの三下りの散財囃しが流れてゐる。

典藏　瑠璃幸はまだ參らぬか、何を致し居る

今夜は馬鹿におそい樣ではないか。

藝者米八　瑠璃幸姐はん、もうすぐ來やはりますえ。

藝者梅香　旦那はん、さつきから瑠璃幸姐はんの事ばつかり云ふて、わてら何人來てゐても役に立ちまへんのどすエな。

典藏　（盃をあげ乍ら）其方らの樣な女には用はないのぢや、拙者は瑠璃幸さへゐればそれでいゝのだ。

藝者琴勇　へーン、きつい氣の旦那はん、瑠璃幸姐はんだけが藝子はんでわてら選ひまんのか。

藝者秀野　そらな、美しい顏の江戸辯の瑠璃幸姐はんとは違ひますよつてになア。

藝者米八　まあ、瑠璃幸姐はんの來やはる迄わてらで辛抱しといとくれやす、そこでもう一杯どうどす（と酌をする）

典藏　うむ、つげ〳〵（と酒をのむ）

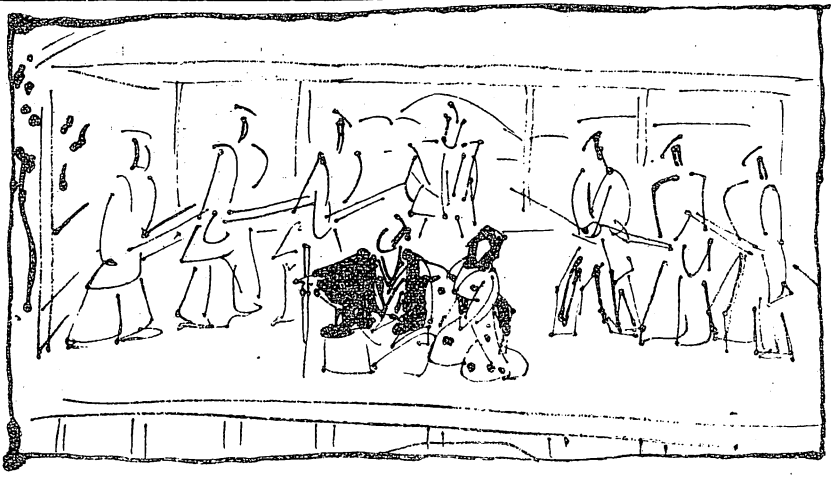
この時、下手廊下より新撰組隊士神原主馬成田軍兵の二人が出る。

神原　風鳥殿、只今立歸りました。

典藏　御兩所御苦勞でござつた。

成田　最早時刻でござるぞ。

典藏　よろしい、然らば女共を遠ざけて一應これにて折合せを致さう、これ女共こゝにて拙者等相談致す事があれば、一同退つてよかろうぞ。



藝者米八　そんなら階下へおりてゐませう。

同　梅香　御ゆつくりとなされませ。

典藏　用がすんだらまた呼ぶ程に暫らく階下にさがつておれ。

女共一同捨ゼリフにて廣間より下手廊下に出で去る。

浪士たちは立つて四邊りを見廻し典藏を中心に圓座を作る。

神原　今宵、長州浪士高杉晋作、吉田大次郎安藤鐵馬、肥後浪士宮部鼎藏その他の者二十數名、三條池田屋に會合何事か密議を凝らし居りますれば隊長近藤勇殿は土方歳三殿を始め手勢八十餘人に會津桑名の藩士と共に一齊にこれを襲ふことに相成つた、いづれも御用意あつて早く四條河原に集まられたい。

典藏　すりやいよ〳〵一網折盡に彼等浪士たちを襲擊する事となつたか。

氏家　勤王と稱し近頃長州浪士の振舞は言語に絶して居ります、是非この際彼等の一味を根こそぎやつゝけてしまはねばなりません。

本多　長州藩は幕命に反き伏見に兵を布いて尹宮邸に發砲なすなど許し難い近頃の動靜

清野　大政が幕府に委ねられてゐる今日これに敵對するものは皆朝敵だ。

森田　今夜はその朝敵共の素ッ首をあげるのか、今から何だか腕が鳴る樣。

竹山　早く池田屋へ斬り込まう、今日此頃は一日として手を空しくすると肩が凝る樣な氣が致す。

成田　隊長はお待兼ね、風島氏早くこゝを打上げて參らう。

典藏　しかし御兩所、その池田屋斬込みの前に捕者等に於て爲すべき事がムる。

神原　何、池田屋斬込の前に爲すべき事とは……

典藏　それ三條蛸藥師に塾を開いてゐる小野田蘭溪と申す和漢の學に達せる老人を御存知か。

神原　うむ、小野田蘭溪、彼奴もひそかに勤王の志士共に相呼應して幕府に怨みを抱く者とか聞き及んでゐる。

典藏　されば、その小野田蘭溪の塾を捕者等は襲ふて、蘭溪一家の者を引捉へ吃度吟味を致したならば、所謂勤王の浪士共の姓名が悉く判明致すであらうと存じて居るが如何であらう。

氏家　既に風鳥殿の指圖を仰ぎ今夜のうちには小野田の塾を襲はんと計畫致し居る所でござつた。

成田　成程、それはよい御計畫でござる。

曲藏　神原成田の御兩所はこの事を新撰組隊長近藤氏に御傳言下され、少々人數をこちらの方へ廻していただく樣お願ひ下さるまいか。

成田　承知仕つた、では風鳥氏は小野田蘭溪の塾を襲はれるか、してもし蘭溪の居ない場合如何なされる御所存で御座るな。

典藏　蘭溪奴不在なれば彼の一人娘深雪を拙者等の手に奪ひ取り、蘭溪の人質として留おく心算でござる。

氏家　深雪とは仲々の美人と聞き及ぶが風鳥殿はその娘をどこで見染められたか近頃では餘程御熱心の樣子。

神原　然らば風鳥殿は蘭溪には用が無くてその娘を奪ふのが第一目的でござるかな。

典藏　左樣な譯でもござらぬが……

氏家　（何かに氣づき）シッ、いづれもお鎭まり召されい、あまり拙者等の話し聲が高くてもしや隣り座敷に如何なる人物がこの事を洩れ聞いてゐやうも知れぬ（と思ひ入れ）拙者一つこの場で首途の祝ひに一差し舞はう（と大刀を持ち立上る）

典藏　何、氏家がいつもの劍舞か。

氏家　今宵は新撰組の池田屋斬込み、拙者らの蘭溪塾斬込みの前祝ひ（と大刀を拔いて劍舞を舞ふ）

典藏は『鞭聲肅々』と詩吟する。

よき所にて氏家は大刀をサッと上手小間の障子に斬り込む、中にて『無禮者……』と云ふ聲。

一同はハッとして上手へ身構へる。

上手より勤王志士海野龍馬（二十七八、袴、着流し浪人體）出る、手には何か風呂敷包みをさげてゐる。

龍馬　いづれの御仁かは存ぜぬが理不盡にも拙者の座敷へ刄を向けられしは如何なる理由あつて爲されたぞ、ちと無禮ではござらぬか。

氏家　無禮呼ばりは苦々しい事だ、拙者等のこの會合の席とは障子一重の隣り座敷、何か貴殿は聞いたであらふ。

龍馬　聞くまいとしても洩れる貴殿等のその話し聲、池田屋の勤王黨を全滅さすとか小野田蘭溪一家を襲ふとか、いや物騷な御相談に花が咲いてゐた樣だ。

典藏　何、すりや貴樣はこの場の事を殘らず聞いたか。

龍馬　いかにも。

氏家　して貴樣は何者だ。

龍馬　熊野の浪士、海野龍馬、天朝に心を寄せる志士でござる（と前へ出る）

一同『何ッ！』と氣負ひ龍馬を圍む

龍馬　諸君、まづ靜かに聞き給へ、おそれ多くも吾天朝におかせられてはその昔源頼朝鎌倉幕府を開いて以來、北條、足利、織田、豐臣と天下の政權は武家方の掌中に握られてしまつた、その後を享けた德川も、三百年の久しき間この皇土を吾物顔に專有し、剩へ近年に至つて吾國體を傷つけるが如き數々の失政はどうぢや、黑船渡來におびやかされて紅毛人の爲に港を開くさへ吾國の恥辱なるに、上下を舉げてその信賴を失ひ、今や大政は天朝に奉還すべき時節に逢着してゐる、かゝる四圍の事情に陷入れるも知らず未だ甘んじて政權にかぢりつき諸國に起る尊王の氣勢に周章狼狽、池田屋に會合の志士や勤王學者蘭溪先生を襲ふて

何にならうぞ、笑止な事ぢや。

典藏　うむ、云はせておけば言語道斷、貴樣は幕府をのゝしつたな。

龍馬　のゝしつたのではない、有體に申した迄ぢや。

典藏　何だと、もう一度その暴言を吐いて見よ、許しはせぬぞ。

龍馬　望みとあらば何度にても申上げん、德川幕府は頭に血がのぼつて足元の危ないのも知らぬ白痴の骨頂だ。

典藏　何……

氏家　風鳥殿、門出の血祭りに此奴を斬つて捨てませう、それ！

典藏　よし、やつゝけろ！（と拔刀）

一同も拔刀、ズラリと龍馬をかこんで刀をつきつける。

龍馬　（動ぜず）美事斬るか、貴樣等こそ吾天誅の刃に首の飛ばぬ用心致せ。

典藏　何を！（と斬りかゝる）

龍馬は典藏をすかして拔刀、一同龍馬にかゝる。

この所へ上手より江戸藝者瑠璃幸（三十四五、仇ッぽい女）來り中に入る。

瑠璃幸　（龍馬をかばひ）まあ〳〵待つて下さいまし。

龍馬　オッ、其方は。

典藏　瑠璃幸ではないか。

瑠璃幸　風鳥の旦那、どうも遲くなつてすみません、私の來やうが遲いからつてそんな野暮に凄く光る物を拔いて何の眞似をしてゐらつしやるんですね、この海野樣は私の可愛い男、日頃の御贔屓甲斐に免じて今夜の所は私に任せ、刀を引いて下さいまし。

典藏　女の貴樣が出る幕ではない、退け〳〵

龍馬　正義の刃に彼等の素ッ首をあげてやるのだ、瑠璃幸退け〳〵。

瑠璃幸　いや退きません、こゝは人の浮れ遊ぶ三條の料理屋、血を流す所ぢやありません、風鳥さん、氏家さん始め皆さん、どうぞこの場は私に任せて引いて下さい。

典藏　どうしても退かぬと云ふのか。

瑠璃幸　海野樣を殺すのなら私を先に斬つて下さい、海野樣は私の男、さ、風鳥さん私からスッパリとやつて下さいまし。（とこなし）

典藏　何、この海野は其方の男とな、日頃あれ程拙者が寵愛致してやつたに拘らず情夫を持つてゐやうとは今迄知らなかつた。貴樣の男と云ふからは尙更助けおく事は罷りならぬ、

瑠璃幸　それぢやどうしても斬ると仰有いますか。

典藏　うむ、くどい！　海野龍馬覺悟！

龍馬　望む所だ…　參れ。

典藏　それ、各々！

一同は龍馬にかゝる、よろしく立廻り、瑠璃幸は後へ退きハラ〳〵してゐる。

と龍馬はよろしく斬り結び浪士一同を下手廊下へ追ふて入る。典藏も入る。

瑠璃幸一人となり。

海野樣、龍馬樣！　しつかり負けない樣に（と行きかけんとして龍馬の風呂敷包みにつまづき）おやこんな所へこんな荷物、これは一體何だらう（と中を開く、と中から一つの古鏡が出る）これは古い鏡！（と思ひ入れ）

この時、一同を追ひ散らして龍馬歸

つて來る、瑠璃幸が古鏡を取出してゐるのを見てビツクリし。

龍馬　瑠璃幸、それを見てはならぬ）と瑠璃幸の手より古鏡をもぎとる）

瑠璃幸　オツ、龍馬樣。

龍馬　卑怯にも彼等はいづれへか逃げて行つた、拙者一人で彼等の五人十人を叩ツ斬るに何の雜作もない事だ（と刀を鞘におさめる）

瑠璃幸　龍馬樣、その鏡は一體なんでございます、どうして私が見ては惡いのでございます。

龍馬　いや何でもない、これには少し深い譯があつて誰にも見せられぬ品ぢや。

瑠璃幸　オヤ、深い譯？　へーン、さうですかい、この京の地にあなたがのぼつて來られてから、ふとした事が緣となり夫婦も同樣に暮してゐる私にも云へない事なんですか、あゝあ、お武家樣といふものは薄情なものですね。

龍馬　薄情で云はぬのではないが、これは祖先傳來の吾家の寶物、そなたにも遂ぞこれ迄見せたこともなかつたが、今日はこれを道具屋に預けて一時金の工面をつけ樣と思つてこゝへ來てゐたのだ。

瑠璃幸　エッ、何ですつて、それぢやその鏡はあなたのお家の寶物、それを道具屋に渡して金を借るとは、何故そのやうな事をなされます。

この邊りより廊下の所へ典藏と氏家が忍んで來る。

龍馬　瑠璃幸、いかにそなたの世話を受けて居やうとも拙者は武士、女の世話を受けていつまでも暮してはゐられぬ、拙者は熊野の藩士だが先祖は豐臣家に由緣のある海野幸綱といふ者、この古鏡はその先祖が當時豐臣家の總大將眞田幸村公より讓られた貴重な品、この鏡に書かれた文字の呪文を解けば、吾が故郷熊野地佐野村の山中と紀州九龍島の某所にかくされてある金銀財寶の在所が判るのぢや、この鏡を一時抵當において道具屋に金を借り、長州や肥後の勤王の同志の連判に是非にも加はりたいと思つてゐる、またこの鏡の呪文を解いて二ケ所の財寶を掘り出し、天朝のために拙者はおつくしする覺悟ぢや。

瑠璃幸　あなたが勤王のお侍と云ふことはよく存じて居ります、しかしその樣な大事な品を何も道具屋風情の手に預けて金を借る事もありますまい、お金なら私がこしらへませう、そしてそのお金とは一體どの位御入用でございます。

龍馬　何から何までそなたの世話になつては相すまぬ。

瑠璃幸　まあ水臭い龍馬樣、私やお前の女房ぢやありませんか（と龍馬に倚る）

廊下の二人いま〳〵しさうな顏をする。

龍馬　面目ないが同志への目見得の金、十兩ばかり都合してはくれまいか。

瑠璃幸　よろしうございますとも、まあ私に任しておいて下さいまし。

龍馬　瑠璃幸、何から何までかたじけない。

この時典藏、氏家拔刀にて突入する

典藏　海野！　覺悟！

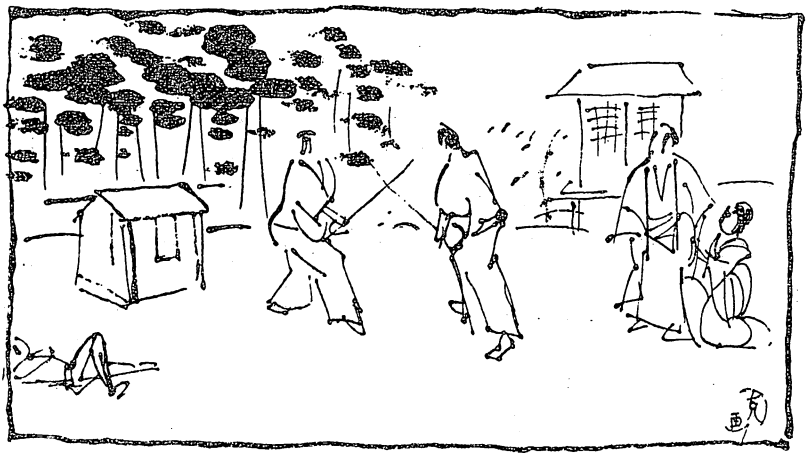
氏家　エイ！

龍馬はハツとして片手に古鏡を持ち片手にて早くも拔刀構へる。

瑠璃幸　龍馬樣！　危ない、早くこゝを。

龍馬　そなたこそこの場を早く。

典藏　兩人共、この風鳥が命をもらつた、覺



悟せい。

と典藏は瑠璃幸に、氏家は龍馬にかゝる。

瑠璃幸は手近の燭臺をとつてよろしく典藏の刄を受け流し逃げ廻る、この間に燭臺は皆倒れて廣間は暗くなる、一同暗中の探りとなる、と龍馬はコツソリと廊下へ出て逃げる、氏家追ふ、典藏もつゞいて追ふて入る瑠璃幸暗い中を探りつゝ何かにつまづき倒れんとする。

瑠璃幸　龍馬様、龍馬様（と何事かうなづき）さうだ（と懐中より紫ちりめんの頭巾を出しすつぽりと頭からかぶり裾からげをする）

外にはいつしかみぞれが降つてゐる近くに三下りのさんざい囃し流れてゐる。

――暗　轉――

## 序幕の二

### 智恩院山内の地藏堂

舞　臺

平舞臺、樹々の繁れる智恩院山内正面は木立、上手よりに小さき地藏堂あり、堂の裏側に道通ず、上手より下手へ舞臺前面道となる、すべて深夜の景、常夜燈が寂しく木の間がくれに見えてゐる。

前場のつゞきの時刻

七つを報ずる寺の鐘の音にて幕あく

と初め舞臺は空虛、みぞれが降つてゐる。

突然、正面の道よりバタ〳〵と巾着切勘藏（五十すぎ、白髮交りの町人拵、縞の袷着）逃げ來り、何かにつまづいて倒れる。

とこれを追つて同じ道から海賊龍造寺浪右衞門（混血兒三十代、浪に千鳥の模樣ある船方風の着附赤毛）出で來る。

浪右　待て！　待たねヱか！

と勘藏に追ひつく。

勘藏は必死となつて逃げんとする。

浪右衞門はよろしく勘藏を組み伏せ馬のりとなる。

勘藏　許しとくんね、許しとくんね。

浪右　この期に及んで許してくれもないもんだ、俺らの懐ろを掠め様なんて太え野郎だ　このおひぼれ奴！（と勘藏の首をしめる）

勘藏　（苦しげに）痛え〳〵放しとくんねエ　ゆるめとくんねエ、俺が悪かつた、全く見損ひました。

浪右　何だ、見損つた、當り前よ、手前たちの様な小泥坊に懐ろのものを取られる様な俺らぢやねエんだ、金が欲しけりや欲しいと云つて見ろ、十兩や二十兩の端た金なら呉れてやらあ。

勘藏　ヘイ、おそれ入りやす。

浪右　どうだ、欲しいか、金の面が見てえか！　黄金の色が拜みてエか。

勘藏　ヘイ〳〵いえ、もう金は欲しいとは思ひませんから、命だけはお助けを……

浪右　何だいくぢのねエ事を云ふな、金が欲しいのは人間誰でも持つてる慾だ、さあ金の面ア見せてやる、黄金の色を拜ませてやるぞ！（と片手を懐ろに入れ小判をつかみ出し一枚づゝ勘藏の顔へ投げつける）さ、一兩だ！　二兩だ！　三兩！

勘藏　（もがき乍ら）痛え！　アッ、痛い！

浪右　（尙小判を投げつゞける）四兩！　五兩！　六兩！　それこれで皆んな併せて十兩だ！　と小判三枚一緒に投げつけ、勘藏を向ふへつきやる）

勘藏は下手へコロ〳〵と轉び、起きあがる。

勘藏　且那！　ど、どうぞ御勘辨を（と兩手をついて平伏する）

浪右　やい老爺！　手前はまだこの商賣は新米だな。

勘藏　ヘイ、この間から開業した所で……

浪右　それ迄は何をやつてゐたんだ。

勘藏　江戸の兩國邊りの掛小屋へ虎や大蛇の見世物をかけてゐました所此數年來の世の中の騒ぎにとう〳〵その見世物もたゝんで終ひ、上方へ流れて來やしたが、する事もなく遂惡い事を初めました。

浪右　ぢやあ手前は江戸者か、見ればもう頭に霜をいたゞく年格好、そんないゝ年をして悖も娘もゐねエのか。

勘藏　ヘイ、娘が一人居りましたが、十五の時に手放して今はどこにゐるやらさつぱり行方も知れません、且那、どうぞ今夜の所はこのまゝお見逃しを願ひやす、後生一生の御願ひです。

浪右　心亂するな、助けてやらあ、さ、その小判を拾つて行きねエ。

勘藏　エッ、こんなに澤山、それはあんまり勿體なふムいます。

浪右　巾等切のくせしやがつて遠慮もねエもんだ、ぐづ〳〵云はずと取つて行け。

勘藏　ヘイ、さうですかい（と不思議さうに浪右衛門を見乍ら小判を拾ひあつめ押いたゞいて懐中にしまふ）

浪右　オイ、老爺、手前も昔は見世物の一つも持つてゐたゞけあつて案外氣の輕さうな奴だ、また話相手にでもなつてやらうから俺の所へ遊びに來い、三條四國屋といふ宿屋にゐる龍神丸の船方と云つてたづねて來い、いつでも逢つてやるぞ。

勘藏　ハイ、ありがたうございます、このお禮にやきつと上ります、ぢやあ御免なすつておくんなせエ。

浪右　氣をつけて行きねエよ。

勘藏は下手へ去る。

浪右衛門じつと見送る。

浪右　金！天下の廻りもの、盗んだ金とも知らねエで老爺はよろこんで行きやがつた……でもまあ小判で人間の面ア張ると云ふことア今夜が初めて、氣味のいゝものだ、ウフウフ……（笑ふ）

この邊りより浪右衛門の背後に捕方數名道ひ寄る。

浪右　どれ！　そろ〳〵と行くとしやう。

行きかける途端、捕方一同『浪右衛門御用！』『御用！』とかゝる。

浪右　（キッとなり）ホッ葉共、また來やがつたな！（と七首を拔く）

それ！　と捕方一同は浪右衛門にかゝる。

浪右衛門よろしくあしらふ事、立廻りの最中に一方の血路を開いて下手へ逃げ去る。

捕方追ふて入る。

と上手より一挺の駕、數人の黑裝束の浪士たちがかついで出る、前幕の本多が先頭に立つてゐる。

上手奥にて『オーイ、待て！　待て！』と近づく聲。

駕は下手へ行かふとする時、上手より熊野浪士立花聞多（二十五六の若侍、大たぶさ、袴大小）來る。

聞多　その駕待て！

本多　何だと！　邪魔立致すか。

聞多　刀にかけてもその駕はやらぬぞ。

本多　それ面倒だ、片づけてしまへ。

浪士たち駕をおいて拔刀、聞多に斬りかゝる、聞多も拔刀よろしく立廻り、浪士たち叶はじと見てそれ〴〵四散す、聞多は逃げる浪士たちを追はんとして駕に近づく。

深雪　どの〳〵。

聞多　駕のたれをあげる。

駕の中には氣絶せる學者小野田蘭溪の娘深雪（十八九、美しい娘の高島田もくづれ、口には猿ぐつわ、赤い扱帶にて後手に縛されてゐる）がうなだれてゐる。

聞多は刀を鞘におさめ駕より深雪を出して、扱帶を解き、猿ぐつわをはづし活を入れる。

深雪　（氣がつき）アレッ……と逃げんとする。

聞多　（深雪をおさへ）深雪どの、拙者でござる、立花聞多でござるぞ。

深雪　オッ、あなたは聞多樣。

聞多　もう怪しい者は拙者が追ひ散らしてムる、御安堵召されい、したが何故にこの樣な狼藉を致し居りましたな。

深雪　ハイ、突然邸へ闖入して參りましたあの浪士たち、父蘭溪が不在と見て父の身替りに私を人質に連れて行かうとしたのでございます、あの人たちは壬生浪士らしうございます。

聞多　フーム、すりや幕府方の廻し者でござつたか、拙者が折よく蘭溪先生をお訪ね申さなかつたらあなたは、あの浪士たちに連れ去られてしまふ所でした、かうして拙者が來た上はもう心配はござらぬ、さあ父上もさぞ心配してゐられるであらう、拙者がお送り申さう。

深雪　ハイ、ありがたうございます。

この時、風音と共に下手より以前の浪士海野龍馬拔刀着物をズタ〳〵にされ髪ふり亂し、片手に風呂敷包みを抱えて、餘程深傷を負つてゐるらしくよろける樣に走り來り行きす

ぎ様としてふと聞多を見て立停る。

龍馬　武士と見てお願ひ申す、拙者只今危難に瀕し居りますればお助け下され。

聞多　（ジッと龍馬を見て）さう云ふ貴殿は海野龍馬ではないか。

龍馬　吾名を知るそこもとは……（と相手を見る）

聞多　拙者でござる、海野氏、立花聞多ぢや！

龍馬　オッ、立花氏か。

聞多　海野氏！

龍馬　久しぶりでござるのふ、貴殿とは江戸の千葉周作先生の道場でお別れ申してからもう三年にもなる、たつしやで何よりだ。

聞多　貴殿もたつしやで、と申したいが見れば餘程の深傷を負ふてゐる様子、一體これはどう致されたな。

龍馬　新撰組の浪士の一味に追はれて拙者は一人向ふは多勢、思はぬ不覺をとり乍らこゝ迄逃げて參つた、立花氏、貴殿を男と見かけての頼みがあるが聞いてはくれまいか

聞多　頼みとは何だ。

龍馬　外でもない、こゝこの品を當分お預りが願ひたい、これは拙者の祖先傳來の貴重なる品、このまゝ曲者たちを向ふに廻し斬死するのはいと安いこと乍ら、この品を向ふへ渡しては拙者一代の不覺はもとより、吾等勤王の同志の大業成就の妨げにもなる事なれば。

聞多　承知いたした、拙者命にかけてもこの品はお預り申す。

龍馬　頼む、頼む（龍馬は片手の品を聞多に渡す）

この時バラ〳〵と下手より以前の氏家又八、抜刀にて清野、竹山、森田等を從へて來る。

又八　海野龍馬待て！

龍馬　ム、、參つたか、さあ來い（と身構へる）

この間に聞多は深雪を地藏堂のかげにかくし抜刀にて出る。

聞多　海野氏、助太刀申すぞ。

龍馬　立花氏、貴殿はこの場を早く落ちてくれい。

聞多　いやこのまゝ貴殿を見捨てゝは參られぬ、何條壬生浪人の五人、十人、拙者一人で倒して見せう、いざ參れ。

又八　ちよこ才な、それ兩人をばらしてしまへ。

一同エッ、オッと龍馬と聞多にかゝる、よろしく立廻り、と龍馬は上手へ行きかけ。

龍馬　立花氏、お願ひ申すぞ！

と去る。

浪士一同龍馬を追ふて上手へ入る。

又八と聞多は激しく斬り結ぶ。

聞多の片手には龍馬の預けた品が抱えられてゐる。

地藏堂のかげより深雪出る。

深雪　アレッ、聞多様！

風鳥典藏現はれ、深雪を無理に連れ去らうとする。

轉瞬！　聞多は又八を斬る、又八は倒れる。

聞多飛鳥の如く典藏にかゝる。

聞多　曲者、待て！

典藏　（抜刀）何を小癪な！

と二三合渡り合ひ、顔を見合ふ。

聞多　（ビックリする）オッ、貴様は親の敵赤堀軍衛ではないか。

典藏　オッ、貴様は立花富右衛門の小童か、

よい所で出會つた！　返り討だ！　覺悟せい。

聞多　ウム、不倶戴天の父の仇、故郷熊野をはる〳〵とこの京の地を尋ね探してゐた所だ、いざ參れ！

典藏　參れ！

兩人の立廻り、深雪は絶えずハラハラと右往左往してゐる。

以前の浪右衞門下手より出て木立にかくれ勝負を見てゐる。

とこの時、上手より清野と森田拔刀にて來る。

清野　オッ、風鳥氏か。

森田　典藏殿か、御助勢申す。

典藏　彼奴の手の品を早く。

清野　心得申した。

三人一度に聞多にかゝる、聞多は典藏に激しく斬りかけて行く途端海野より預れる品を落す、清野これを拾ひすばやく花道へ逃げる。

聞多　と森田もつゞいて入る。

オッ、あの品を！（と追はんとする）

典藏は聞多を向激しく斬りかけるを聞多は典藏にかまわず花道に行きかけ、よろしく立廻り、典藏はよきすきを見計ひ花道へ一散に入る。

聞多　（追ひ乍ら）卑怯々々（と叫ぶ）

深雪聞多を追ふて行き。

深雪　聞多様！

聞多　（典藏を追はんとして）深雪どの（と立どまり兩方に心惹かれる體）

この時、浪右衞門づか〳〵と出て來り。

浪右　お嬢御は俺が確かにあづかりませう、お前さんは今の侍を一時も早く追かけて、目出たく敵をおうちなせエ。

聞多　さう云ふ其方は……

浪右　いえ、決して怪しいもんぢやございません、御心配なくお行きなせエ。

聞多　然らば通りがゝりのお人、エの嬢御をしかとお預け申すぞ（と花道へ一散に入る）

深雪　聞多様！（と追はんとする）

浪右　（とめて）これさお嬢さん、俺がお前さんを送つてあげやせう……（と下手を見て）やッ、向ふに人影、こりや面倒だ、お嬢さん、あの人影をやり過す間、この地藏堂に暫らくかくれて居りませう。

深雪　聞多様にお怪我がなければよいがなア

浪右　さゝさ、早く〳〵。

浪右衞門は深雪を促して地藏堂の中に入る。

と夜がらすの聲、みぞれ止んでゐる立花聞多の許婚椰枝（二十位、田舍育ちに似合はぬ美人、旅姿）杖をついて何か苦しさうに出る。

と、椰枝のうしろよりお高祖頭布の女、實は前幕の瑠璃幸が傘を持ちついて出る。

瑠璃幸　（椰枝に聲をかける）旅のお女中、ちよいとお待ちなさいまし。

椰枝　ハイ、私でございますか。

瑠璃幸　さうさ、さつきからついて來ましたが、この夜更け、しかも往來も絶えた智恩院の山内を若いお女中の一人歩き、それにお前さんは大變何か苦しさうにしてゐなさるが、どこか悪いんですかい。

椰枝　ハイ、先程から俄かの腹痛に歩きかねて居りまする（と腹をおさへ苦しす體）

瑠璃幸　それやいけませんね、どれ〳〵私がちよつとさすつてあげませう（と椰枝の後

ろに寄る

揶枝　（その場にかゞみ）御親切にありがたうございます、アイタタ、アイタ（と苦しむ）

瑠璃幸　（背中から前へ手を廻しさすり乍ら）お前さんはこれからどこへ行きなさるんで

椰枝　ハイ、建仁寺とやら云ふ所へ参らうと思ひまして。

瑠璃幸　何、建仁寺？　建仁寺なら方向違ひだ、こつちへ來ちやとんでもない淋しい所へ出てしまひますよ、建仁寺のどこへ行きなさるんですね。

揶枝　ハイ、靈福院と云ふ末寺の離座敷にゐる人をたづねて参るのでございます。

瑠璃幸　おやさうですかい（とふと揶枝の懐中に手をさし込み思入れ）しかしこんなに夜が更けてこれから行くには道も物騒だし何なら私が送つてあげませう。

椰枝　ハイ、ありがたうございます。

瑠璃幸　見ればどこか遠い所から來たお方の樣子、一體お國はどちらなんで……

椰枝　ハイ、紀州熊野在佐野村からはる〳〵京へのぼつて來たのでございます。

瑠璃幸　たつたお一人で。

椰枝　ハイ。

瑠璃幸　そりやまあ御奇特な……熊野と云へば海山越えた遠い所ぢやござんせんか、そして京へはいつ入つて來られましたね。

椰枝　今朝大阪で船から下りますとすぐ伏見通ひの三十石に乘りまして、今日の日暮にこちらについたのでございます。

瑠璃幸　ぢや、さぞ疲れておいでなさるだらう、何はともあれ、近頃の京の町は夜になると勤王とか佐幕とか各所のお侍たちが彼方の辻、此方の往來で淒いものを抜いては斬つたはつゝたの大騒ぎ、それ今夜はこの邊にも何だかそのお侍たちがウロ〳〵してゐた樣子、さあ〳〵怪我のないうちに早く明るい町へ出て行きませう。

椰枝　左樣なればお言葉に甘へまして御一所にお供させていたゞきます、アイタツ、アイタタ（と苦しむ）

瑠璃幸　あゝこりやいけない、さあしつかりおしなさいよ、しつかりなさいよ（とさすり乍ら椰枝の懐中より胴卷を奪ひ取り立上る）

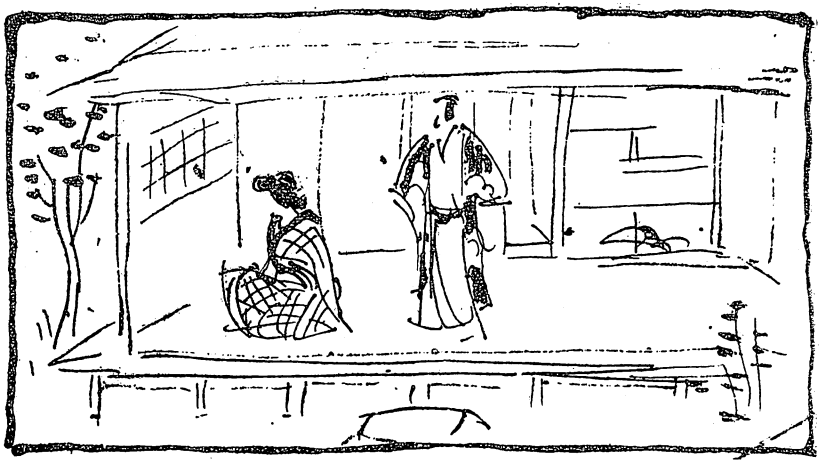
椰枝　（それと氣づきビックリして）ア、もシツ、あなた！　アイタタ（と半ば苦しみ）親切に見せかけて私の懐ろのものを掠めるなどとはあんまりです、その胴卷を取られては私困ります、どうぞそれはお返しなすつて下さいまし（すがる）

瑠璃幸　旅のお女中、そんなに大きな聲をお立てになつちやいけません、かうして持つた所は小判で十兩二十兩はずつしりと入つてゐさうなこの胴卷、私にや今夜少し入用があつて金の才覺に詰つてゐる所、お前と逢つたのも何かの因緣、この金は當分私に貸してもらひますよ。

椰枝　待つて下さい、遠い旅の空で尋ねる人の家は判らず道に迷ふてゐる者をこの上金を取られては尚更困ります、どうぞ、そればつかりはお返しを願ります、どうぞ〳〵（とすがりつく）

瑠璃幸　（椰枝をはらひのけ）うるさいね、私を誰だとお思ひだい、私や黒百合のお才といふ江戸ぢやお栫ひの身の、金箱つきの女だよ、小娘の懐ろをねらふなんざあ少し私のする仕事でもないけれど、今夜は可愛い男に貢ぐ金に困つてゐる所だから、少しの間この胴卷は貸し下されで貰つて行くよ。

（と行きかける）



椰枝　あゝもしあなた！（とすがり）あゝ痛ッ、痛ッ（と苦しむ）

瑠璃幸　えッ、可愛さうだが引導渡してやりませう（とすがりつく椰枝を傘の柄にて脾腹をつく）

椰枝　ウーン（と倒れる）

下手にて御用！　御用！　の聲。

瑠璃幸　オヤ、捕物でもあると見えてあの聲は、こりや見つかつては面倒だ（と上手へ行きかける）

この時上手地藏堂より浪右衞門深雪と出る瑠璃幸はパッと傘を廣げ顏をかくし、下手へ行きかける、と下手より勘藏走つて出てドンと瑠璃幸につき當る、とこの仕組よろしく。

――暗　轉――

## 序幕の三

### 元のことぶき下座敷

舞　臺

ことぶきの下座敷と庭、下手處々に、よろしき立木植込など、二重には下座敷、二重の正面は床の間、出入の襖、二重に折廻してぬれ緣つく、上手に小座敷あり、ひじかけ窓、よろしき雜作。

前場の續きの時刻

靜かにどこかで爪彈きの三味線。

二重には前場の典藏と清野、森田の二人の浪士が酒をのんでゐる。

典藏　既に危ない處であつたが、やつとこゝで逃げ延びて參つた、これで五十年程生き延びた思ひだ。

森田　あの立花開多とか申す男、仲々の腕利きでござる喃。

清野　しかし、かうして海野龍馬の古鏡で風鳥殿の手に入つたからはこんな目出度い事はござらぬ、先づ拙者ら二人はうんと褒美の金を頂かねば相成りませぬな。

典藏　さうだ、あの海野龍馬の話ではこの古鏡の呪文を解けば九龍島と佐野の山中に埋沒されてある、金銀財寶の在所が判るとかぢや、この上はこの古鏡を賴りにその財寶の悉くを拙者等の手に堀出し、それから其方にも分け前をとらせようぞ。

森田　ありがかうござる。

清野　しかし小野田蘭溪の塾へ向つた一行はまだ歸りがおそい樣ぢやが、如何して居るのでござろう。

典藏　蘭溪は不在で娘深雪をまんまとかどわかしたが、とんだ所に邪魔者が入つてこれは失敗ぢや。

森田　新撰組の池田屋斬込みは如何してゐるであらう、勤王の浪士共を片つ端から片づけてしまつたであろうか。

典藏　そんな事はもうどうでもよい、こつちは美しい娘を取るか、財寶を握るかの大仕事、娘の方は失敗しても、財寶の鍵を握れたのが何よりだ、まア今夜はゆつくりと酒でも飲んで過さう。

三人は捨台詞よろしく酒をのんでゐる。

正面襖より以前の浪士竹山が出る。

竹山　風鳥殿、只今歸りました。

典藏　御苦勞であつた、海野龍馬はどうしたな。

竹山　拙者の刄を受けかぬて遂に堀川の水中へ身を投げて行方不明になりました、しかし水勢激しいあの堀川、それに深傷を負ふて居るからはもう所詮命は助かりますまい

典藏　餘計な所へ飛び出して命を落すとはあの龍馬とやらも馬鹿な男だ。

竹山　風鳥殿、それに只今これへ歸る智恩院の山内でよい物を拾つて參りました。

典藏　何、よい物とは。

竹山　女好みのお頭故、拙者の手柄を褒めて貰ふと、それは〳〵よい器量の娘を連れて戻りました。

典藏　何を申すぞ、拙者が女好みなど〻人聞きの惡い事を申すな、しかし折角連れて參つたのなら一目見せて貰ふ、どんな女を連れ戻つたかな。

竹山　打見た所十八九、どこかの旅の者らしい樣子でござる、智恩院の地藏堂の前に突伏して居つたのを介抱して見ると、可哀想に泥坊に出會つたとかで懷中のものをかすめられ、上句の果が當身を入れられて氣絶したんださうで拙者が助けて參つた。

典藏　人助けなどとは貴樣に似合はぬ奇特なことだ。

竹山　これもお頭への御恩返へし、まあこゝへ連れて來ますからよく見ておやりなさい

（と立上る）

典藏　早く連れてまゐれ。

竹山は正面に去る。

森田　今夜は何といふ風鳥殿の仕合せな晩だろう、財寶が思はぬ事で流れこむ、女が手に入る。

清野　女と云へば風鳥殿はこのことぶきであの藝者の瑠璃幸にゾツコンまいつてゐる樣だが、あれが海野の女と知つてはもう手出しをする氣もなれますまい。

典藏　嫌はれゝば嫌はるゝ程、女といふ者にはこつちがのぼせ上る、海野が死んだ上はあの女も拙者が近く手に入れて見せやう。

森田　そんなに達者に廻れますかね。

清野　色と金との兩手に花、今年は風鳥殿の當り年と見へますなア、アハ……（と笑ふ）

この時正面より竹山が前場の椰枝をつれて出る。

竹山　さあ、お頭にお目見得するがいゝ、こつちへ來い。

椰枝　ハイ、ありがたうございます（と中へ入り）既に一命危ない所をお助け下され有がたうございます。

典藏　（椰枝を見てびつくり盃を落す）やつ其方は熊野の椰枝ではないか。

椰枝　さう御有いますあなたは……（と顔を上げ）アッ、お前は立花聞多様の父の仇赤堀軍衞。

竹山　ではお頭にはこの女を。

森田　御存知でござるか。

清野　これはまた意外な事ぢや

典藏　其方はその聞多の許婚椰枝か、不思議な所で出逢ふたな、其方の夫立花聞多は既に今夜拙者らの手で返り討ち、いかにも返り討に致した所ぢや。

椰枝　エッ何と申す、夫聞多を討つたとは……

典藏　今宵、智恩院の山内にて不思議の出合聞多は美事拙者が手にかけて討ち果した。

椰枝　エッ、そんなお前が（と氣負ふ）

典藏　（椰枝の手をとり）これさ、椰枝、夫と云つてもまだ祝言もすまさぬ先、夫婦の契りも致さねば聞多とは他人も同樣、どうだ折角京へのぼつて來たのだ、牛を馬にのり替へて今日から拙者の邸へは參らぬか、隨分、可愛がつてもつかはすぞ。

椰枝　えゝ汚はしい、赤堀軍衞、祝言せずとも聞多樣は私の夫、はる〳〵紀州熊野路から聞多樣の歸へりを待ちかねてこの京へ上つて來たものを、お前のやうな男にこの身を任せてなるものか、聞多樣を討つたとは僞り、お前の樣な卑怯武士に負けるやうな聞多樣ではない、返り討ちに逢はせたとは嘘ぢや〳〵、夫の父の仇、女ながらも私も武士の娘、覺悟しや（と懷中より懷劍を拔いて斬りつける）

典藏　（素早く椰枝を組み伏せ）じたばたするな、貴樣らの手にかゝつて死ぬ樣な、この軍衞樣ではないわい、强いて敵呼はりするならば、可哀さうだが最後の引導！

森田　風鳥氏、お身は敵持でござつたか。

清野　風鳥殿とは僞はり、赤松軍衞と申さるゝか。

竹山　こんな事になるのなら、その娘を連れて歸るのではなかつた。

典藏　お互ひに脛に傷持つ浪人仲間、實は拙者はこの娘の許婚立花聞多の親父の富右衞門と申す者と紀州熊野で僅かの事から爭つて武士の意氣地から討つて立退いた。

椰枝　現在の夫の父の敵にめぐり合ひながら討つ事も出來ぬとは口惜しい。こゝに敵が居ると聞多樣に告げてやりたい、聞多樣、立花樣（ともがく）

典藏　エイ、じたばたせずと往生しやがれ、（と向かへ突き、椰枝かゝらんとするを一刀拔いて斬る）

椰枝　あつ……（と仰向けに倒れる）

典藏　（じつと椰枝を見て立つ）可哀想だが刀の錆……

森田　あたらつぼみの花を散すとは。

清野　きじも啼かずば討たれまいに。

竹山　罪の深いはこの俺ばつかり。

典藏　竹山、死骸を片づけろ。

竹山　ハッ（と椰枝を抱き起して正面へ連れ去る）

この時、下手庭傳ひに、瑠璃幸頭布を着たまゝ二重の典藏を見て、ハッとする。

典藏　瑠璃幸か（と刀を鞘におさめる）

瑠璃幸　オッ、風鳥さん。

典藏　みぞれ降る夜をそなたは頭布などを着て、いづれへまゐつて居つたな（と元の坐につく）

瑠璃幸　ハ、ハイ、（と頭布を取りおもむろに裾さばきをして二重に上り風鳥さん私は酔つておりますのさ、さつきの騒ぎは一體どうなりました、海野様はどうなさいましたね。

典藏　龍馬か、彼奴は拙者この手にかけて討ち果し彼奴の家に傳はる古鏡も吾が手へ、この通り（と傍の風呂敷包を示す）

瑠璃幸　えつ、ぢや龍馬様を手にかけてその品までも……

森田　海野は口程にもない、もろい奴。

清野　我等の手にて討ち果した。

瑠璃幸　（思ひ入れ）おや、さうですかい、そりや大きに御苦勞さん、おかげで私が手を下さずにお前さん方に厄介拂ひをしてもらつた様なものですね。

森田　何と申す。

清野　何だと。

瑠璃幸　ひよんな拍子で馴染んだ男、勤王浪人とかはこけおどし、からつきしの意久地のない野良男の海野龍馬、私や近頃ぢや飽き〳〵してゐた所なのさ、まあ、あゝして皆さんに刄を向けられたのを見ちや飛び出して仲へ入る氣にもなりますが私の知らないそのうちにバラしてくれりや、これで氣が晴々したといふもの、おそまき乍らお禮を申しますよ。

典藏　瑠璃幸、そりや其方の本音なのか。

瑠璃幸　何でそんな事、嘘をいふものですか

典藏　そんなら日頃この典藏があれほど口をすつぱくして其方に云つたあの事は……

瑠璃幸　さあ、かうなりやまたどんな相談にこの瑠璃幸、乗らないとも限りませんね。

典藏　さうであろう〳〵ではまづ一献さそう（と盃を出す）

瑠璃幸　いたゞきませう（とうける）

典藏酌をする。

この時、竹山出る。

竹山　お頭。

典藏　何だ。

竹山　只今、新撰組の近藤勇殿よりお頭始め一同に隊まで來てくれとの急使でござる。

典藏　何事が出來致したかな。

竹山　何でも今宵池田屋に會合の勤王浪士を襲撃致したところ、大方は討ち取つた者もあるが逃亡した數も相當にある由様子にてそれ等逃亡の浪士の詮策について急に相談がしたいとの事です。

典藏　折角瑠璃幸が參つてゐるのに……すぐ行くと申しておけ。

森田　では我々一足お先へまゐろう。

清野　風鳥殿は御ゆつくりとなされい。

兩人立上る。

典藏　然らば貴殿等、一足先きに行つてくれ拙者もあとよりすぐまゐれば。

森田　左様なれば風鳥殿……

清見　お先きに御免。

竹山　拙者もおさきへ。

三人は正面より去る。

典藏　瑠璃幸、今夜は其方とこゝでゆつくりとしてはゐられぬのぢや。

瑠璃幸　それはまたどうしてなんです、折角おちついて飲まうと思ふ私を捨てゝ何處へおいでなされます。

典藏　新撰組の近藤勇の呼び出しとあれば、どうでも行かねばならぬ、用がすめば、また歸つてまゐる程に、こゝで待つてゐてくれ。

瑠璃幸　いやですよ、風鳥さん……待つてゐ

ろと氣やすめ文句を聞かせておいて、外の可愛い女のところへではございませんか。

典藏　何と申す、長い月日をこがれて居たそなたではないか、それが漸やく龍馬に死なれて、拙者の方へなびくといふに、どうしてそなたを捨てゝおかう、きつと歸つて來る、きつとぢや〳〵。

瑠璃幸　そんなら、きつと歸つて來るといふ證據をおいて行つて下さいまし。

典藏　證據といつて、何にをおいて行けと云ふのぢや。

瑠璃幸　龍馬樣から奪つた、その古鏡……風呂敷ぐるみ、私にあづけて行つて下さい。

典藏　何と申す、この古鏡をおいて行けと申すか、こればつかりはならぬ。

瑠璃幸　どうでもならぬと仰有いますか。

典藏　間違ひはなかろうがこの品だけは渡されぬ。

瑠璃幸　さうですか、それぢやよろしうございます、私も瑠璃幸、嫌と云ふものを無理に取ろうとは云やしません、その代り私もお前になびくのはいやでございます。

典藏　これ〳〵その樣なわやくを申すな、エヽ、仕樣がない、おいて行かう、その代り、きつと其方に預けるぞ、間違ひがあつては命がないと思へ。

瑠璃幸　おやうれしい！　ぢやあづけて行つて下さいますか、私も江戸の瑠璃幸です、しつかり預つておきますから早く歸つて來て下さいね。

典藏　（古鏡の包みを出し）さ、では一時も早く行つて歸つて來るからなどこへも行かずにこのことぶきで。

瑠璃幸　（古鏡の包みを受取り）待つて居りますとも。

典藏　では、行つて來るぞ（と立上りよろしく正面より去る）

瑠璃幸　早くお歸んなさいよ（と見送り）とう〳〵行つてしまつた。

この邊りより『高瀨舟』の獨吟聞ゆ

唄〳〵由緣もとめて若紫の、草のまがきを今來て見れば、

瑠璃幸は元の所へ來りこの間に古鏡の包みを開き、古鏡を出して見る事

（古鏡に見入り）龍馬樣、許して下さい、心にもない仇言葉、何であの樣な風鳥風情に身を任せやう、今聞けばお前にこの世を去つたか、そりや本當でござんすかたゞしは生きておいでなさるか、私やお前の生死を知りたい。

唄〳〵花か紅葉かその俤の、もしもこのまゝお前に逢はれぬのなら私やこの鏡を形見と思ふて肌身につけ、お前の祖先の財寶は末長くお守り致します。

唄〳〵見えつかくれつ木の間の月の

この時、上手二重小座敷より浪右衛門出る。

浪右　浮氣ならねど身は高瀨舟

瑠璃幸！

瑠璃幸　（ハッとして古鏡をかくし）おや、お前はいつぞやの龍神丸のお大盡樣。

浪右　古い鏡と差し向ひ、何やら面白さうな物語をしてゐた樣子。

瑠璃幸　では、今の話を。

浪右　今の話はおろか風鳥典藏とか申す壬生浪人との話も殘らずあの小座敷で聞いてゐた。

瑠璃幸　エッ。

浪右　おい、瑠璃幸！　江戸前の美しい藝者とばかり思つてゐたら案外お前も凄腕だの

ふ、鏡の主の海野龍馬とやら云ふ可愛い男があるからは所詮この浪右衛門にもなびくまい

瑠璃幸　寶船の船頭さんかは知らないが、金に糸目をつけぬ遊び振り、遂ぞ見知らぬ龍神丸のお大盡がやぶから棒の身うけの話、私や金で自由にはなりませんよ。

浪右　フン、お前は仲々大したものよ、京の祇園の瑠璃幸と近頃評判のお前故、船からあがつて金に明し、どうでも俺が身うけして連れて行かうと思つてゐたが、どうも俺の手に負へねエ筈だ、菩薩の裏は夜叉の面とんだ所を見せてもらつたよ。

瑠璃幸　エッ、何だつて。

浪右　おい、瑠璃幸、お前もちよく〳〵あんな内職をしてゐるのか。

瑠璃幸　何の事やらお前の云ふ事は私にや判らないよ。

浪右　さうとぼけるなよ、それ今のさつき智恩院の山内で。

瑠璃幸　エッ。

浪右　旅の娘の腹痛を介抱するかに見せかけてずつしり重い胴卷を卷き上げたお高祖頭巾はお前ぢやなかつたかい。

瑠璃幸　ぢや、あの場の事を。

浪右　さうさ、その時地藏堂の中にかくれて何も彼も見てゐたのだ、おい、瑠璃幸、そこにお高祖頭巾が出てゐるぜ、さう樂屋内を見せちや祇園の藝者も台なしだ。

瑠璃幸　（お高祖頭巾をすばやく袂にかくし）何も彼て見てゐたとありや仕樣がない、それを今更知つたとて驚かく程のお前でもあるまいよ、お前だつてどうせ當り前の船方衆でもなさゝうな、毛色の變つた工合から目の色までも違つた所は紅毛人にも似寄つた顏、人の物は吾物と思つて通す泥棒仲間

浪右　こりや御挨拶だ、だがお前よりはちつとばかり大物だぜ、俺ア龍造寺浪右衛門と云ふ海賊だ。

瑠璃幸　私も祇園の瑠璃幸と、まんまと化けてはゐるけれど、根を洗へば江戸育ち、お高祖頭巾が仕事のからくり、黒百合のお才と云ふお前さんには親類交際さ。

浪右　虫も殺さぬ顏をして何でそんなやくざにはなつたんだ、お前の惡事の馴染初を何なら聞かしてくんねエか。

瑠璃幸　今更親をうらむのぢやないが、香具師の勘藏と云ふなら子者の子に生れ、遂に曲つた事までも敎へられたが身の因果、とう〳〵江戸おかまひの身となつて流れ〳〵てやつて來たのさ。

浪右　ぢや、お前の親は勘藏と云ふのかい。

瑠璃幸　それをお前は知つてゐなさるのか、

浪右　俺の巾着を切ろうとしたのが緣となり金をめぐんだあの老爺が。

瑠璃幸　えゝ。

この時上手より勘藏出る。

勘藏　娘か、逢ひたかつた〳〵。

瑠璃幸　（おどろき）お前は誰だい。

勘藏　お前の親だ、見世物師の勘藏だ。

瑠璃幸　ぢや、お前がお父つあん！

勘藏　娘！

兩人はだきつく。

浪右　そんなら今の瑠璃幸の身の上を勘藏お前は聞いてゐたのか。

勘藏　旦那、お前の云ひつけであの智恩院から深雪とかいふお孃さんを蛸藥師のお邸まで送つて行つてこの座敷へ歸つて見ると今の話、意外な所で娘に逢へて私やうれしら

ございます。

瑠璃幸　（勘藏をつきのけ）おふざけでないよ、私にや十五の時から親はない曾、年齒も行かない小娘に悪い事を散々仕込んだその揚句、つぶしの利く年頃にや賣り飛ばすなんてそんな業慾な親は親ではない、鬼だ……外道だ。

勘藏　俺が悪かつた、許してくれ〳〵、それや皆んな俺の了見違ひだつた、年が行つて知る獨り身の寂しさ、あゝ娘は今ごろどうしてゐるかと近頃ぢや思はねエ日はありやしねエ。

涙をふく。

浪右　憎み合つても親と子だ、互ひにつきせぬ緣があればこそかうしてめぐり合つたのだ、長崎の遊女町丸山の仇し女と目色毛色の違つた異人の間に出來たと云ふ俺も、その片親でもいゝから一目逢ひてエと海に鷗の姿を見ねエ日があつてもその事ばかりは忘れた事アねエ（懐中から小判入りの財布をずつしりと投げ出しさ、瑠璃幸、こゝに持ち合せの二百兩これでお前は足を洗つて勘藏と一緒に暮しねエ。

瑠璃幸　一旦はうらんで見ても親は親、久しぶりに熱い涙がどぼれました、あゝあ、つくづく〳〵私は世間が嫌いになつて來た、龍神丸のお大盡私を海へ連れて行つてはくれないかい。

浪右　何んだと。

瑠璃幸　戀しいと思ふ男は大義のために戰つて生死も分らず、お構ひの身の兇狀もちでは親と一緒に江戸へも歸れず、一層自由な海へでも乘り出して見たいものさ。

浪右　そんなら俺と一緒に龍神丸へ來るか。

瑠璃幸　今夜からでも連れて行つてもらひませう。

勘藏　俺やア江戸へたゞ一人惠んで貰つた金を路用に歸りませう。

浪右　老爺どん、何も皆悲しい運命、今夜はゆつくり別の盃でも交さうぜ。

瑠璃幸　お父つあん。

勘藏　娘や！

又兩人寄る。

浪右　さア、俺らの座敷へ。

立上る。

唄　こがれこがれて燒くや藻鹽の夕煙、此身をこがすえ……

よろしく三人仕組あつて。

――幕――

## 二幕目の一

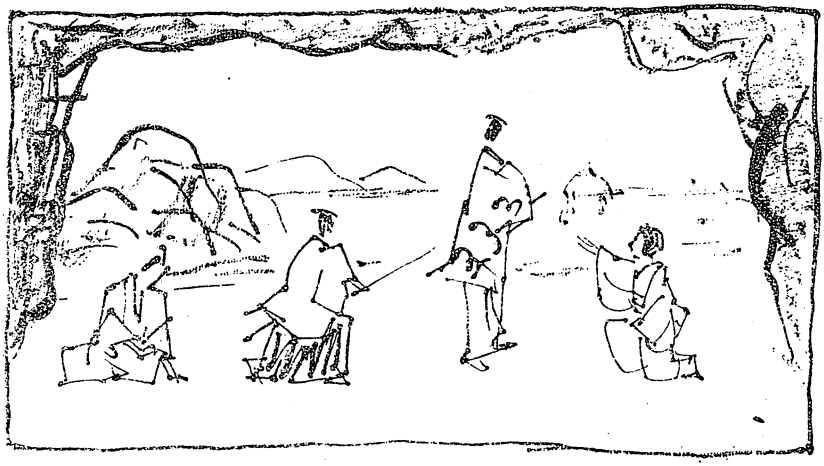
### 紀州九龍島の暗り洞

舞臺

紀州古座港の近くにある、九龍島の暗り洞の中、下手に大きな洞窟への入口、入口の前に立木、道をへだてゝ向ふに古座の港が見える、洞の中は、ずつと上手にまた他の洞窟へつゞく入口、上手寄り正面に小さな祠があり、七五三縄をめぐらす、槍石などあまたあり、下手の入口り明るい光りがさし込んでゐる。

同年の春

近くの浪にて幕明くと洞の中にてたき火をし、それに龍神丸船頭實は浪右衛門の子分仙太、久七、團六（いづれも三十代、好みの風）にて濡れた美しい女物の衣裝や、男物の衣類



を焙つてゐる。

仙太　肋けた客人の中のあの娘はさすが京の女だけ、あつて、この界隈では見られない美人だ、あんな女になら命もいられエ氣がするな。

久七　手前はいゝ女を見たらすぐ命がいられエと吐かす、この間も親分が京から連れて歸つたあの瑠璃幸とかいふ藝者を見てさう吐かしだぜ。

團六　親分のあの女と來たら小股の切れあがつた何ともいへねエ仇つぽい女だ、ありや京の祇園で瑠璃幸といふ江戸前藝者で鳴らしたもんださうだ。

仙太　それを身受けして船へつれ歸つた親分は大した色事師だね。

久七　あんな毛色の變つた男になびくやうな女ぢやねエがな。

團六　何でもあの姐御にや先にいゝ男があつたとかで、そのいゝ男の形見の品を持つて來てゐるといふ話だぜ。

仙太　何だつて、先の男の形見、そりや何だ

久七　俺も聞いてゐる、何でも古ぼけた鏡ださうだ、それが何でも親分の先に馴染んでゐた男の形見とかで肌身離さず持つてゐるさうだ。

仙太　ヘーン、そいつア初耳だ、そんものを持つてゐてよく親分は默つてゐるな。

團六　默つてゐる所ぢやねエ、時々その鏡の事でとんだ燒餅喧嘩をやつてる樣だ、何しろあれだけの美人のかみさんを持つと氣がもめるといふものだ。

仙太　さうかなア。

久七　（乾いた衣類をはらひ乍らゝ）さあ、もうこれで一通り皆んな乾いた樣だ、奥へ持つて行かうぜ。

團六　さうしやう／＼、したがあの客人衆は何だろう……

仙太　武家は武家だが、こんな海へ流れて來るなんて、どうしたんだろう。

久七　あの年寄りは學者らしいぜ、それから若いのは何でも近頃の勤王とか何とかいふ浪士に違えねエ。

團六　ぢやあの娘は若え方の武士の何かになるんだらうか。

仙太　所が若え武士は年寄りの方を搦まへて師匠々々と云つてゐた樣だ、娘にはお嬢さんと云つてる所を見ると、まさか若え武士

が娘の聟になるのでもあるまい。

久六　するとあの年寄りの先生の弟子だな。

仙太　噂をすれば何とやら、向ふから歸つて來たぜ。

一同は鎭まる。

この時下手より長州浪士高杉晉作、蘭溪の娘深雪、歸つて來る。

晉作　これは〳〵御一同にはいかいお世話になりますな。

仙太　お歸んなさいまし、どこへ行つて來られましたな。

晉作　この島の風光をそこゝと見物致して參つた、今日は餘程海も風いでゐる樣子ぢやのふ。

久七　ヘイ、珍らしい風でございますよ、こんな天氣ばかりだといゝんですが、これが昨夜の樣に時々急に荒れますんで、この近海へ船を出すのは餘程むつかしうございますよ。

晉作　拙者も昨夜の暴風雨にこの島へ打ちあげられ、親切な浪右衞門御夫婦の厄介になり、おかげで助かつたと申すもの、いかい雜作をかけるのふ。

仙太　どう致しまして、何ならゆつくり御逗留なさいまし。

久七　着物は皆んな乾いた樣だ、奥へ持つて行かう。

蘭六　さうだ、ちよつと持つて行かう。

仙太　ぢや、ちよつと、これを片づけて來ませう。

三人は上手奥へ去る。

深雪　高杉樣、昨夜の暴風雨に便船が帆を失なひ灘に乘せられて流れた時は心細うございましたが、この島に打ちあげられ本當に命びろひをした樣に思はれます。

晉作　それと申すも蘭溪先生始め、拙者の武運の强きが故でござらう、思へば京の地を發つてからもう一月にもなりますな、あの池田屋に吾等の同志が新撰組浪士の不意打を喰ひ、味方は過半討死を爲し、半ばは散り〴〵に落ちた樣だが、同志の方々はどうしてゐられるかなア。

深雪　あの安藤鐵馬樣は御無事に落ちられたであらうか、それからあの立花樣も……

晉作　立花とは聞多殿の事でござるか。

深雪　ハイ。

晉作　聞多にはそなた心から慕ふてゐられる樣子、拙者はとくより存じ居りまするぞ。

深雪　高杉樣とした事が、その樣なこと、父に聞かれたら私や恥かしうございます。

晉作　何恥かしい事があるものか、お身の父蘭溪先生も末頼母しい男だと彼の立花聞多には遠うから望みをかけられてゐられる、しかし彼とて今はどうしてゐるであらう。

深雪　私共がこの島に來てゐることは、よもや御存知なさるまい。

晉作　いづれこの島より船にて長州に下れば味方の方々ともまた再會する時節もあらう。

この時下手より浪右衞門が魚籠と釣竿を持つて歸り來る。

浪右　オ、客人はこゝにゐられたか、今日はお前さん方の御馳走に大きな魚を釣つて來ましたぞ。

晉作　これは親分でござるか、色々と御手數をかけてかたぢけない。

浪右　何、遠慮にや及ばねエ（と釣竿を隅において）廻り一里にも足らぬこの小島、それに棲む者とては俺等夫婦に子分の者共、氣兼ねなしにゆつくり逗留して行つておくんねエ。

深雪　この方には京にゐた時にも、一度危ない所をお助け下され、わざ〳〵邸迄送つて來てもらひました。

晋作　では、いつぞやそなたが壬生浪人にかどわかされた時でござるか。

深雪　ハイ、左樣でございます。

浪右　ナーニ、助けたと云つてもほんのちよつとお邸まで送りとゞけたにすぎねェ事、そんなに恩に着るにも及びませんよ、それよりか折角かうして取つて來た魚だ、早く料理をさせやせう（と上手奥に向ひ）お才

お才。

『ハイ〳〵』と前幕の瑠璃寺のお才姐さんかむり、たすきがけにて出る

お才　あゝお客人、お歸んなさい、只今奥で先生がおたづねでございましたよ。

深雪　あの、お父上が。

お才　ハイ、お二人共お呼びの樣でございました。

晋作　では蘭溪先生の居らるゝ所へ參りませう、浪右衞門殿、後刻お目にかゝらう。

浪右　そんなら後程、今夜どぶ六だが一杯飲んで貰ひます。

晋作　頂戴いたすでござらう。

深雪と共に晋作は上手へ去る。

浪右　お才、こんな大きな魚が釣れたよ、ちよつとこゝへ來て見ねえか。

お才はじつと上手へ去つた晋作等の方を見途つたまゝ動かない。

浪右　おいお才、お才ッたら、おかしな奴だな、どうしたんだ（と寄つてお才の肩をたゝく）これお才。

お才　何だね。

浪右　何だねもないものだ、何をそんなにボンヤリふさぎ込んでゐるんだ、手前今朝からふさぎ込んでる樣だぜ、何か思つてる事があるな。

お才　いゝえ、別に……

浪右　かくすなよ、手前武士の姿を見たので何だな、大方あの海野龍馬の事をまた思ひ出してゐるんだな。

お才　フン、親分、妬くのはお前の柄ぢやない、私が誰の事を思つてゐやうと勝手ぢやないか。

浪右　さうは云はさねェぞ、もう此頃ではお前は俺のものだ、京からお前を連れ歸つてからといふものは滿足に仕事にも出ず、この小さい島に立籠つてその日々々を暮らしてゐるのは何の爲めだ、龍造寺浪右衞門は今迄は廣い海原が棲家だつた、しかし始めて俺といふ人間も滿足な戀を得てこの小さい島の春に樂しむことを知つたのだ、だがたゞ一ッお前の心の隅にこびりついてゐるものが氣にくわねェ。

お才　氣にくわないつて、身も心も投げ出して昔の黑百合のお才が案外優しくしてゐるのが判らないかね。

浪右　そりやあれ程强情に見えたお前がこんな所で俺等と一緒に暮らしてくれる心はうれしいが、あの古い鏡が第一氣に入らねェ

お才　氣に入らないつて、あの鏡の主は今では死んでゐるとも生きてゐるとも判らないぢやないか。

浪右　もし生きてゐてお前の前に姿を見せたらどうするつもりだ。

お才　おや、親分とした事が、これ程にしてゐるのに、疑ひ深い人だね。

浪右　俺アお前があの鏡を手放さねェうちは何だか本當にお前を俺のものにした樣な氣がしねェ。

お才　ホホ、、、止しておくれよ、そんな弱い音を吐く様なお前でもないぢやないか。

浪右　（ぐつとお才を抱き）何でもいゝもうお前のすべては俺のものだ、誰が來てもお前は手放さねエ、お前も俺からは離れまいな。

お才　判つてますよ、世間を捨てゝこの島へお前と二人で來たんぢやないか、どこへも行きやしないから、柄にもない燒餅は妬かないがいゝよ。

浪右　手前がいらねエ事で氣をもますからだよ、それより今俺が取つて來た魚で何か奥の客人へ馳走でもこしらへてくれ、あの人たちは京洛の人だ、どうも俺のにらんだ目ぢや勤王の志士らしい、それにあのお孃さんとはふとした事で知り合つてゐる仲だ。

お才　おや、さうかい、あのお孃さんとは不圖した事で知り合つてるッて、親分、お前まさか（と、にらむ）

浪右　冗談いふねエ、ありや蘭溪先生といふ年寄りのな、和漢の學に通じた學者の一人娘だ、お前のお高祖頭巾を見かけた智恩院で既に曲者にさらはれ樣とした所を俺が助けてやつた人だ。

お才　そんならいゝけど、お前も昔は何をしてゐたか判りやしないからね。

浪右　おや〳〵、俺が龍馬の事を云つて妬くのでとんだ返報返しをしやがるな、さアこの魚籠をあつちへ持つて行つてくれ。

お才　ハイ〳〵ようございます。

魚籠を持つて上手へ去る。

浪右衞門ニヤリとお才を見送る。

この時下手より漁師出る、つゞいて深編笠を着た立花聞多、同じく深編笠の海野龍馬の手をとり、いづれも旅裝束にて出る。

漁師　ヘイ、親分、客人を案内して參りました。

浪右　何、客人。

聞多　おッ、そなたはいつぞやの船方衆ではないか。

浪右　と、仰有るあなた樣は。

聞多　（編笠を取り）立花聞多と申す、いつぞやは智恩院の山内にていかい御世話に相成つた、

浪右　オッ、こりやあの時の若いお武家、してこんな避難な九龍島へは、どうしておいでなされましたな。

聞多　拙者等は、この島に少し尋ねたいものがござつてはる〴〵京より參つたのぢや。

浪右　尋ねたいものとは。

龍馬　（編笠をとり）この島に埋沒してある吾等の祖先の金銀財寶。

浪右　何、この九龍島に金銀財寶が埋めてあると仰しやいますか。

聞多　現世の者は誰も存ぜぬ所に埋めてあるのだ、たゞその寶を掘出すには、一つの古鏡の呪文を解かねばその隱し場所は分明致さぬ。

浪右　何、古鏡の（と思ひ入れ）

聞多　しておぬしはこの島の御仁でござるか

浪右　ヘイ、俺ですかい、俺アこの九龍島の暗り洞を家邸とも思つて暮して居ります。

聞多　左樣か、一河の流れ一樹の蔭、一度の顏馴染のみで厚顏のお願み乍ら、拙者その財寶を掘り出すまで此所に逗留させてはもらへまいか。

龍馬　拙者は海野龍馬と申す者、何分よろしへ御願ひ申す。

聞多　この龍馬はその財寶の持主たる正しき血統のもの、京の地にて曲者共にその財寶

の鍵とも申すべき古鏡を奪はれんとして深傷を蒙り、まだ傷痕の癒らぬのを無理に連れて參つたれば、餘程身體も疲勞致し、先程より歩行にも難澁致し居る、何分よしなにお願ひ申す。

浪右　折角のお二人さんのお願ひだが、まあこの島にお留め申すことはお斷り申しませう。

聞多　そりや何故に。

浪右　譯と云つてはござりません、たゞお二人さんをお構ひする事が出來ませんから、お斷はり申すんです。

聞多　例へ何處如何なる所にても結構なれば兩人をお留めおき下されい。

浪右　いけねェ／＼、歸つて貰はう、こゝは俺の棲家も同樣の島だ、二人共早く島から出てもらはう。

聞多　（キッとなり）では、どうしても歸れと申すか。

浪右　くどく云はねェで早く歸れやがれ。

聞多　察する所噂に聞きし如くこの島は海賊の棲家であつたか、金銀財寶がかくしあると聞いて慾に絡んでかく申すのであらういづれ財寶發掘の曉は其方にも分け前を取らせるからどうかこの島においてくりやれ

浪右　いやだ！　俺ア金が欲しくつて云つてるんぢやねェ、お前と一緒に來た奴が氣にくわねェんだ、其奴を早く連れて歸つてくれ。

聞多　拙者と共に來た者とはこの海野龍馬か

龍馬が何故其方の氣に入らぬのぢや。

浪右　何でもいゝから歸つてくれ、こゝは俺の棲家だ、早く歸れと云つたら歸らねェか。

聞多　譯も云はずに歸れとは武士に對して無禮であらう、何の爲めに拙者等參つては惡いのだ、さあ、その譯を申せ。譯を申せ。

浪右　譯は云へねェ、どうあつてもこゝから出て行つてもらはう、それともどうしても出て行かねェといふのなら俺も龍造寺浪右衛門だ、腕にかけても突出すからさう思ひねェ。

聞多　何だと！（と氣負ふ）

浪右　さ、出ろ！　出ろ！（と、聞多を突く）

聞多　無禮致すか（と、浪右衛門の手を拂ふ）

浪右　（少しよろけて）しやらくせえ眞似をしやがつて、俺を投げやつたな（と、いきまく）

聞多　何！（と、いきまく）

この時、お才出る。

お才　お前さん……親分待つとくれ。

龍馬　オッ、そなたに瑠璃幸！

お才　海野樣か！

龍馬　瑠璃幸、其方はこんな所へどうして來てるのだ。

お才　龍馬樣、私や元の瑠璃幸ではございません、今ではこの浪右衛門の女房お才、何にも云はずにこの場は一先づ（と思ひ入れ）

龍馬　さうか、折角二人が樂しく暮してゐる所へ拙者が參つたので浪右衛門殿の氣を惡くさせたのであろう。立花氏もう拙者らはこの島から立退かう。

聞多　何と申す、折角寶の山に入り乍ら手を空しうして歸るとは。

龍馬　寶の山に來たとは云へ、あの古鏡がなければ何處に財寶がかくしてあるかも判らぬ、所詮吾等の手にはこの財寶が入らぬものにきまつてゐるのであらう、いやもうすべてをあきらめて歸らう。

聞多　貴殿にさう云はれると拙者は何とも申譯ござらぬ、その夜智恩院の山内で貴殿よ

り預げられしあの品を、父の敵赤堀軍衛に出逢つた際に敵の手に奪はれ、殘念乍ら討ち洩らしたは聞多一代の不覺、貴殿に對しても武士たるものゝ切腹しても申譯なすべき所、拙者には赤堀を討たねばならぬ大望がござれば今暫らくの猶豫が願ひたい、拙者も武士として男として貴殿に對しては、いつか、立派に申譯致す所存でござる。

龍馬　いや貴殿に切腹と强いた所で何にならう、吾物でありながら財寶の在所も知れずその鍵とするべき古鏡までも失ふとは拙者の不運をなげく外よりござらぬ、いざ參ろう。

聞多、然らば參らう。

龍馬はお才に心を殘し、すご〳〵と洞を出て下手へ去る、聞多も去る。

お才、鏡を懷中より出しづか〳〵と走り行かんとするを、浪右衛門とめる。

浪右　お前はどこへ行くんだ。

お才　せめてあの人たちへ古鏡なりと、

浪右　何、鏡を返す……ぢやお前はその鏡をいつも肌身につけてゐたのか。

お才　ハイ、この懷ろに持つて居ります。

浪右　ぢや俺と一所に暮しても心は龍馬を慕ふてゐやがつたんだな、お才、お前とはまだ僅か一月の緣だが、俺ア十年も二十年も一所に樂しく暮した樣な氣がするんだ、お前はどこへもやらねエ、お前は俺のものだ俺のものだ。

お才　親分、浪右衛門さん、許しとくれ、お前にどう云はれても私やあの人が忘れられなかつたんだ。

浪右　何だと……

この時、下手より深編笠の風鳥典藏（旅裝束）出る。

つゞいて本多、竹山、清野出る。

典藏　瑠璃幸！

二人はビックリして振返る。

俺だー　久しぶりだな（と、笠をとる）

お才　オツ、お前は風鳥……

浪右　典藏か。

典藏　よくも貴樣は俺を一杯かけやがつたな

お才　一杯喰つたはお前の間抜けからさ、こんな所迄追ひかけて來てどうしやうと云ふのだい、今ぢや浪右衛門といふ亭主のある身、もう自由にはならないよ。

典藏　貴樣なんかに用はない、貴樣の持つてゐる鏡を貰ひに來た。

お才　えつ！

浪右　さうだ、お才、折角風鳥がこんな所迄お前の後を追ふて來たんだ、その鏡は器用にあの男にやつてしまへ、さうすりや俺の心もきれいさつぱりすむといふものだ。

お才　いやです、こんな男に鏡をやる位いなら、あの聞多樣とやらに渡して、再び元のあの人の手へ。

浪右　お前はまだ彼奴の事を……

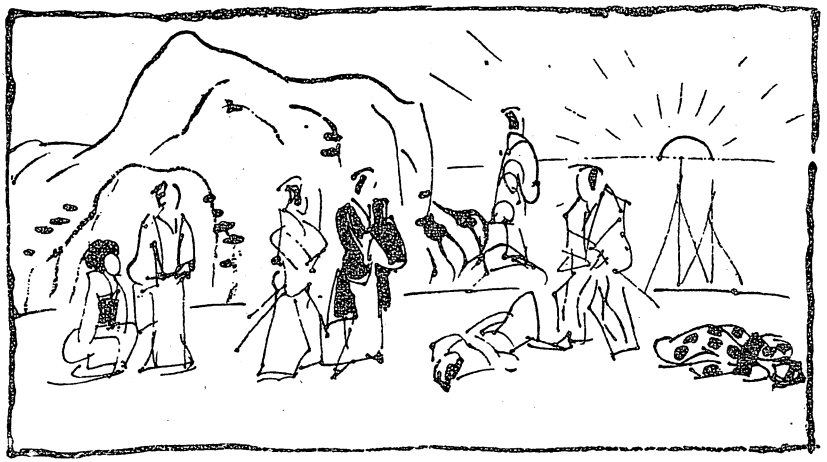
典藏　何、そんなら立花聞多や海野龍馬が此の島へ來てゐるのか。

浪右　お前は今逢はなかつたか、その道を二人は歸つて行つたんだ。

典藏　ではあの深編笠の侍か。

浪右　さうだ、お前も悪事にかけちや仲々の腕利きらしいが、どうだ、今の侍を殺して來てくれないか、お前があの二人を殺して來たら、この鏡はお前にやらア。

典藏　よし、彼奴等は幕府のお尋ね者、この紀州路へ落ちたと聞いて者拙は彼等勤王の餘類を追ふてやつて來たのだ、よい所で出



會つた、それ各々……遠くに行くまい後を追つて彼等の息の根を。

一同はハハッとバラ〳〵と下手へ入る。

典藏　お才、二人の首とその鏡は引換へに致すぞ！（と入る）

お才、ッカ〳〵と行さかける。

浪右衛門とめる。

浪右　お才、どこえ行く。

お才　お二人さんをこの島から

浪右　落してやるといふのか、行く事アならねェ！（と、ぐつと手を引く）

お才　（よろけ乍ら）えゝ。

よろしく。

――暗轉――

## 二幕目の二

### 同じく明り洞

舞臺

下手に洞窟の入口に、ぎがたる岩窟が正面の向ふ海の方へ突き出てゐる、その岩窟さながら洞の如くになり、上手は洋々たる大海を望む景、千石船の帆柱の先、松の上枝などが正面に見える。

すべて前場のつゞきの時刻

浪の音。磯千鳥の聲。

下手よりバタ〳〵と本多と清野が拔刀にて出る。聞多同じく拔刀にて追ふて來る。

聞多　何奴だ、名を名のれ！

本多　いつぞやの仕返しだ、覺悟致せ！

清野　兄弟分氏家又八の敵！　觀念せいー

聞多　人違ひを致すな、拙者は貴公等に恨みを買ふ樣な覺えはない。

本多　ないとは云はさぬ、貴樣は立花聞多であろう。

聞多　うむ、何と。

清野　問答無益！　さあ來い！

清野かゝる、本多も掛聲よろしく聞多にかゝる、三人のよろしぎ立廻り

聞多二人を上手へ追ふて入る。

竹山、森田の二浪士と戰ひつゝ龍馬が出る。

激しき立廻りの所へ上手より典藏忍び來り二浪士に何か目顏にて知らす

二浪士はわざと上手へ逃げる。龍馬はこれを追はんとする時背後より典藏斬りかゝる。これを龍馬は外しガツキと受止め。

龍馬　風鳥か、よくぞ參つた。

典藏　海野龍馬、此間くたばつたかと思ひの外まだのめ〳〵生きてゐたか、今度こそは最後の引導渡してくれん。

龍馬　何を小癪な、いざ參れ！

典藏　參れ！

兩人よろしき立廻り。

お才下手より出て兩人に絡む。

お才　龍馬様！　お助太刀申しまず（と七首拔いて典藏にかゝる）

典藏　おツ、瑠璃幸か、よい所へ來居つた。其方の手にある海野の古鏡ぐるみ二人の命はもらひ受けた。

お才　しやらくせエ、私も黑百合のお才といふ莫蓮者、お前の樣な淺黃裏に斬られてたまるものか。

典藏　いざ來い。

龍馬　エイッ！

よろしく三人の立廻り、典藏二人をよろしくあしらひ、途にお才に一刀浴びせる。

お才倒れる、猶も龍馬に激しく斬りかゝり、龍馬危なく見える所へ上手より聞多出る。

聞多　オッ、貴樣は赤塚。

典藏　聞多、參つたか。

聞多　父の仇はおろか。はる〳〵と京へのぼりし拙者の許婚挑枝迄も暗々と手にかけた人非人、三條の料亭で嬲り殺しに致した由後になつて聞いた時の拙者のくやしさ、今日迄行方を探してゐたのぢや。

典藏　貴樣も共に返り討だ、いざ來い。

龍馬　立花氏、それ。

三人またよろしくあり、典藏ははづみで龍馬を斬る、龍馬アツと倒れる聞多はその途端典藏を斬る。

典藏　しまつた！（と、刀をかまへたが、力つきてどつと倒れる）

聞多　（喜悅）討つた！　討つた…父の敵挑枝の仇、思ひ知つたか（と更に一刀浴せて立つ）

龍馬　（あえぎ乍ら）立花氏、聞多殿。

聞多　オッ、龍馬殿、しつかりなされい、傷はあさいぞ、其方の敵は討ち取つたぞ。

龍馬　むゝ、かたぢけない、瑠璃幸はど、どこにゐる。

聞多　こゝだ、瑠璃幸はこゝにゐる（とお才を起し）女！　女！

お才　龍馬様、鏡は鏡は……私が今日迄大事にお預りして居りました、それに、聞多樣聞多樣にもお詫びを申さねばなりません。

聞多　何だと。

お才　龍馬様に貢ぐ金の才覺に困つた揚句が智恩院の、夜道に迷ひ旅の娘の腹痛を、介抱と見せかけて胴卷をせしめたが、許らずそれが許婚の挑枝樣、典藏に嬲り殺しにせられる所を、殘らず見た夫浪右衛門に話を聞いて、あゝあ惡いことは出來ないと、今日まで其の胴卷は私預つておりました、今日あなたのお姿を見たので後を追ふて返しに行かうとした所です、こ、これが挑枝樣の形見でございます（と懷中より胴卷を出し弱る）

聞多　オッ、これが挑枝の悲しい形見か。

龍馬　して〳〵、その鏡は〳〵、いづれにあるのぢや。

この時下手洞の中にて晋作の聲。

晋作　古鏡は拙者等の手に入つて居るぞ。

聞多　（立つて）やッ、あの聲は高杉殿。

高杉を始め漢學者小野田蘭溪（五十すぎ、旅姿）長州浪士安藤鐵馬（二十七八、旅姿）娘深雪と共に出る。

浪右衛門つか〳〵と出る。

浪右　（お才によりつ）オッ、お才ッ、チエッ斎生！　とう〳〵俺を捨てゝやつぱり思ふ男と死んで行きやがつたか、いま〳〵しい女だ！（と、憎くげにいふ）

聞多　オッ、思ひがけない蘭溪先生にお孃様！

安藤鐵馬殿も御一所でござつたか。

鐵馬　立花氏、拙者も計らずこの島へ昨夜の暴風雨に流されて漂着致して見れば、既に蘭溪先生始め、高杉殿もお揃ひなれば早速これより長州へ歸藩の用意。

晋作　お才とやらいふ女の心づくし、古き鏡を拙者等に示し、大義に働らく海野龍馬の志し、何卒この鏡の呪文を解いた上、この島の金銀財寶を堀出し、天朝のためにつくしてくれとの事であつた（と、古鏡を示す）

聞多　アッ、すりや蒔ねあぐんでゐた、海野の品はこのお才とやらが持つてゐたのか、（と龍馬を抱き起し）龍馬殿！　鏡はあつたぞ…

蘭溪　呪文も解けた、九龍島の南に當る洞窟の小さき祠の土の中、そこには金銀財寶が埋めてあるのだ。

聞多　エッ、すりや寶の在所も知れましたか

龍馬　あ、あ、ありがたし、財寶のすべては立花氏より同志の方々へ、錦の御旗の下に働らく何かのお役に…（と、絶息する）

一同愁然となる。

この時正面海の彼方に赤き夕陽の色

聞多　龍馬の最後の言葉に依り堀出した金銀は吾天朝のために。

蘭溪　聞多殿には父の敵を討たれ、さぞ本望でござらう。この上は不束者乍ら拙者の娘深雪と添ふてはくれまいか。

聞多　えつ、何とおつしやいます。

蘭溪　ひそかにそなたを思ふ娘心がいぢらしうて、この老人は今日は云はうか明日は云ひ出さうかと躊躇してゐた、もう其方に申出てもよい時分であらう。

聞多　拙者には挧枝と申す許婚があつたなれど、これも果敢なく敵の手にかゝり、今は形見のこの胴巻（と思ひ入れ）先生のお志、有難くお受け致しませう。

蘭溪　聞いてくれるか、深雪！　聞多殿は今日から其方の夫ぢや、それ！

深雪　聞多様……（と、聞多に倚る）

晋作　オッ、大きな海の入陽を見られい、誰かあの沈む夕陽を止めるものがあらうか、これはこの世の大勢ぢや。

鐵馬　徳川の天下は倒れて、明日の空には新日本の太陽がのぼるのだ。

この時、子分仙太、久七、團六などが洞の中より、五六個の古き壺を車に乘せ曳いて出て、邪魔にならない様に下手におく。

蘭溪　美事な古金の數々だ、この外にもまだ澤山埋めてあるぞ。

鐵馬　軍用金も出來た……京洛では既に薩摩長州、土州三藩の聯合も出來てゐる、此上は一時も早く倒幕の兵をあげねばならぬ。

晋作　さうだ、幕府倒壞、王政復古はやがて目の前。

聞多　方々と共に拙者も長州へ下りませう。
深雪　私も御一所に。
浪右　（ムックリ立ち）その船は俺が出さう
天朝のために長州への船は、これからすぐに帆をあげやう。
晋作　そんなら浪右衞門殿が。
浪右　おい、皆んな、その財寶を船へつんで景氣よく船出の用意をしろ！
仙太、久七、團六捨ぜりふにて車を曳き上手へ去る。
浪右　（淋しく）龍馬様とお才の亡き骸は、この島の土に俺の手で埋めやせう。
鐵馬　先祖の財寶と共に眠らば海野もさぞかし本望であらう。
この間に浪右衞門は岩窟の上に立つ
この時上手下の方にて『船の用意が出來ましたぞ――い』と船頭の聲。
浪右　海は靜かだ、目出度い首途は緣起を祝ふて船出の唄でも唄へ、唄へ。
朗らかに濱の方で船唄が流れる、一同よろしく、仕組にて正面帆柱に白帆がギリ〳〵と卷き上る。浪の音。千鳥の聲。
船唄流れる中に。

――幕――

## 登場人物

熊野浪士　海野龍馬
祇園藝者　璃璃幸（實は黑百合のお才）
壬生浪士組頭　風鳥典藏（實は赤堀軍衞）
壬生浪士　氏家又八
同　本多孫八
同　清野逸平太
同　森田政之進
同　竹山重兵衞
聞多許婚　椰枝
覆面の浪士　數人
捕方　數人
長州浪士　高杉晋作
同　安藤鐵馬
學者　小田野蘭溪
新撰組浪士　神原主馬
同　成田軍兵
祇園藝者　米八
同　梅香
同　琴勇
同　秀野
仲居　二人
舞妓　三人
巾着切　勘藏
海賊　龍造寺浪右衞門
小野田蘭溪娘　深雪
熊野浪士　立花聞多
浪右衞門子分　仙太
同　久七
同　團六

# 編輯後記

朝郎生

兎に角發行期日には如何しても間に合はせたいといふ念願から、うんと馬力をかけて見ましたが、何しろ御存じの通り二月といふ月は普段の月よりは必つと二三日不足してゐるといふ勘定になつてゐますし加之に今月は各座の狂言決定も少々おくれたといふ始末で、遂に申譯けのない樣な按梅になつて仕終ひました。然し斯うした失敗は今後は再び絶對に繰返さない心算りであります。がまあ其れは其れとして、少々讀みにくいとは思ひ乍ら、發行日を急いだり、仕事の能率といふことを考へた上句、本文の振假名を大半削つて仕終ひました。若し餘り讀みにくいといふ樣でしたら、次輯からは元々通りに改めるつもりでゐます。扨て僕の落度はそつとして置いて、毎度自慢をしてゐる事ですが本輯の執筆者の顔振れに一通りお目を止めて頂きたいと思ひます。先づ『芝居と劇評』の欄は、坪内士行、中井浩水、京極利行、片岡我童氏等の玉稿を頂きました。將に新機運に逢着せんとしつゝあるところの關西劇壇の向上發展のために是非とも味讀すべき好讀物であります。更に『解說と考證』の欄に於ては澤村宗十郎、大村嘉代子、三宅周太郎、竹内勝太郎松本幸四郎、高原慶三諸氏それに鐘芳堂主人、高安吸江博士等の御執筆を忝ふしたことはいやが上にも本誌の價値を高からしむるものとして自惚れてもよいものと信じてゐます。

『實盛』と『暫』の印象の實盛斷想を頂いた西田眞三郎氏には隨分御無理を願つたものであります。茲に過日の非禮をお詫びする次第であります。前田榮三氏の『私は暫く考へる』なんか、とても愉快です。サフィアいろの『暫』の正岡蓉氏の何時も乍らのモダンテイツクな筆緻は益々讀者に喜ばれるものと思ひます。

それに就いても毎度乍ら、堂本寒星氏には御世話をかけて居ります。今後共に宜敷くお願ひいたします。

先輯お約束いたしました如く大川澂江、日比繁二氏共編になる『幕内閑話』は本輯より掲載してゆくことになりました。笑ひの中に諸名優の面影を偲ぶことの出來る大變面白い讀物です勿論、名優の逸話ばかりでなく、幕内に關する凡ゆる出來事が號を逐ふごとに展開されて行くさうです。是非共御期待の程お願ひいたします。


昭和三年三月一日發行
月刊雜誌『道頓堀』第三年第十八輯

□誌代は前金でお拂ひを願ます。
□郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
□御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵稅登錄五厘)

昭和三年二月廿八日印刷
昭和三年三月一日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹合名社
編輯兼發行者 鳥江銕也
大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五
印刷者 松本米藏
大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五
印刷所 桃谷印刷株式會社
電話南(三〇二六番 三七二二番)

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹合名社内 道頓堀編輯部
電南(一二四〇番 六六八五番)

# 新刊書

卍れと盛る賣る

プラトン社

## 火あぶり

鈴木泉三郎著

破天荒の普及版

一冊　五拾錢

劇壇に新紀元を建設したる戯曲集!!

新劇招來の烽火を見よ

## 四葉のクローバー

里見弴著

驚異的大廉價版

一冊　五拾錢

麗朗にして才慧豐艶にして多情なる一女性を繞りて捲き起る四青年の戀の葛藤……

此の書を讀まずして戀愛を語るべからず

## 魚人の陸

菊池寛著

ポプリン布製美本　一冊貳圓

輕井澤の夏に現はれた二人の女性一は妖艶にして賢明一は富裕にして明快金力と美貌、地位と手腕、純愛强きか復讐勝つか渦卷き起す戀と名譽の大競爭

## 今年竹

里見弴著

總金泥布製美本　六百餘頁　金貳圓

近代に於ける日本文學の代表傑作!!

再版三版忽にして賣盡すこと二十六版

最新版漸く出來

（東京）プラトン社（大阪）

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和三年二月二十八日印刷
昭和三年三月一日發行

若く明るい顔になる
レート白粉
東京 大阪 平尾賛平商店

金參拾錢（郵稅一錢五厘）